

ファイアーエムブレム封印の剣～古の野望～

仲村哲也

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ベルン動乱の終結から一年が経ったエレブ大陸。各国が復興の道を歩む中、新たな災いの芽が芽吹きつつあった。フェレ候ロイ、オスティア候リリーナら未来を担う若者たちは、大陸に再び平和を導くことができるのだろうか。

目次

リキアの暗雲	
揃わぬ同盟	1
会議後のそれぞれ	7
不気味な古城	12
暗躍する影	17
予兆はうやむやに	22
満月の夜襲	28
トリアの異変	34
魔導士ラストール	40
人を裏切りし人	46
レノスの決意	52
フェレからの報せ	58
揺れ動く火種	64
侯爵の力量	70
数は力にあらず	76
臆病風	82
登場人物集その1	88
知られざる過去	92
行方知れず	98
大胆な盟主	104
弄ぶ連合軍	109
タニア解放	115
そしてアラフェンへ	121
ついに根源へ	126

魔道の双璧

131

理の乱舞

135

闇の申し子の介入と黒幕の高笑い

139

この平穏は嘘か誠か

143

新たなる火種

草原に渡った青年

146

リキアの暗雲 揃わぬ同盟

エレブ大陸全土を巻き込んだ「ベルン動乱」の終結から1年が経った。

敗戦国となったベルンは、西の大国エトルリア王国によって一度は解体の憂き目にあうも、現在は先王ゼフィールの妹ギネヴィアを新たな女王として再興の道を歩みだしている。

ベルン軍の侵攻で最も甚大な被害を受けたサカ地方は、「灰色の狼」の異名をとるクトラ族ダヤンを中心に複数の部族が結束し、交易都市ブルガルの再建にいそしんでいる。同じく多くの被害を受けたイリア地方も、傭兵騎士団団長ゼロットの下で戦乱で荒れた地域の復興を行っている。

そして、動乱終結の立役者であり「若き獅子」とたたえられたフェレ公子ロイは、父エリウッドより爵位を継いで正式にフェレ侯爵となり、故郷とリキア地方東部の復興に励んでいた。

今回の動乱で多くの諸侯を失ったりキア同盟は、一時期エリウッドが盟主代行を務め、動乱終結後には前盟主ヘクトルの愛娘で、オスティア侯爵の地位を受け継いだリリーナを新盟主とし、ロイ他各諸侯の跡取りたちによる若い領主たちによる連合国家として歩み続けていた。

しかし、臣下を分け隔てなく信頼するあまり、結果としてクーデターを招いてしまったリリーナに対する不信任は年長の諸侯に多く持たれ、またロイの活躍に対する羨望により、結束とは程遠い状況が続いていた……。

「アラフエン侯、今一度お聞きしたい件がございます」

オスティア城の謁見の間にて、月に一度の諸侯会議。その席上、議長席に座るオスティア侯リリーナは、アラフエン侯ヘスマンに毅然と

した態度を向けた。

「おおりリーナ殿。気の強きその瞳は、先代のヘクトル様とよく似ていらつしやりますなあ」

先代の弟であったヘスマンは、年齢は三十三とリリーナよりも一回り近く離れている。まるで子供をほめるように、リリーナにお世辞を言った。

「はぐらかさず、私の質問に答えていただきたく思います。また、無断で砦を増設しましたわね」

きつく問いただすリリーナに、ヘスマンは悪びれることなく答えた。

「それが何か。あの動乱からまだ一年。世界は未だ平穩を取り戻してはおらん。リキアとサカの国境にある山脈には、たちの悪い山賊が徒党を成しておりましたな。わが領土の治安維持に、砦はいくつあつても足りることはありませんのでなあ」

「治安に熱心なのは結構です。しかし、そのために近隣の民衆から資材、人材を必要以上に徴収していると聞いています。それに、聞けば砦は修復を含めれば二月に一棟建っているとか。そのように急がれる理由をお聞かせ願いたいですわ」

「ですから治安のためと申しているではないか。民の力を借りておるのも、将来的に砦を築いたほうが、民のとっても理があるからだ。自分の暮らしを守るためにつながるのだから、今少々負担を課すのは仕方のないことだ」

「失礼ながら、リリーナ様は少々疑り深いのではあるまいか？よもやヘスマン殿が、貴殿への謀反を画策していると言っても言いたげじゃ」

そこに横槍を入れてきたのは、カートレー候のビバンツ。先代のおじにあたり、年齢は五十半ばと盟主代行を務めていたエリウツドよりも年上である。白髪交じりのビバンツは、嫌味たらしく小言を呟く。「動乱の轍を踏むまいと、謀反を警戒されるのはなかなか殊勝であるが……。これからリキアの未来を共に築こうという同志たる我らに、そのような目を向けられると、いやはや・・・ホホホ」

嘲笑を浮かべて、ビバンツは一人の諸侯に目を移す。その視線を感

じた若い諸侯は、顔に嫌悪感を浮かべる。

「・・・ビバンツ殿。なぜ俺を見る。まるで俺の方が謀反をたくらんでいるとでも?」

「いやはや・・・すまぬなラウス候シード殿。いかに俊英とされる貴殿でも、所詮はあのエリックの倅じゃ。つい見てしもうての。ホホホ」
「俺はあの男と一緒にしないでもらいたいっ！俺はこのリキアに刃を向けるなど断じてしない!!」

「シード、落ち着け。この席は言葉を荒げる場ではない」

「・・・悪いな。ロイ」

ビバンツの言葉に我慢ならなかった若い諸侯は、語気を強めてテーブルを叩いて立ち上がる。隣に座るフェレ候ロイは、なだめながら着席を促す。それで冷静さを取り戻した彼は、ロイに詫び席に着いた。

彼の名はシードと言い、歳はロイやリリーナと同じ十七歳。動乱の際、盟約を裏切ってベルンに帰順したラウス候エリックの実子である。だが、エリックと違い、彼はオステイアの学問所でもロイとともに俊英とたたえられ、亡きヘクトルには「お前と同じ時を過ごせれば、リキアは安泰だ」と言わしめるほど。先の大戦においても、謀反をもくろむ父を翻意させるべく説得していたが、アラフェンでの一戦を前に重罪人を収監するグライゼル処刑場にて幽閉されていた。ロイ率いる同盟軍がオステイアを解放した折に助け出され、エリックの罪を償わせようと処罰を求める他の諸侯から、「ヘクトルが認めた若い力を見捨ててはならない」とエリウツドが擁護。その後はリキア西部の治安維持の役割を全う。動乱終結とともにラウス侯爵となった。

「フン。威勢だけは立派なものだが、貴様は本来死刑となっていた身。立場をわきまえるんだな」

高圧的にシードを叱責するのはトスカナ候ボスカー。ヘスマンとは公子時代から付き合いがあり、何かとヘスマンをかばうような態度を取り、年下の人間を絶対に認めようとしなない。シードと同じような態度をリリーナにも向ける。

「リリーナ殿。貴殿も少々失礼が過ぎるぞ！オステイアと違って、アラフェンはベルンとサカといった情勢が落ち着いておらぬ国々と隣

り合っておるのだ。自分の領土を守るために、いちいち許可を出しては間に合わんというもの。貴殿の危惧は浅慮に他ならぬ」
「……」

口惜しそうに押し黙るリリーナを見て、得意げになったヘスマンはここぞとばかりに参加者を前にして演説を始めた。

「しかし、内乱を招いた公女と、父親の反乱を止められなかった謀反人が諸侯会議にいるというのはいかがなものかな？ 若いことは悪くないが、やはり同盟は我々が支えねばなりませんなあ」

「然様（さよう）。我々年長の者が支えながら、リキアの未来を描こうではないか」

「ホホホ。頼もしき事じゃ。此度の盟主も、良き諸侯に囲まれておろうのう。エリウッド殿も病の身をおして同盟を守ったかいもありましようなあ」

ボスカーとビバンツも続き、主に年配の諸侯たちが賛同するように拍手を送る。一方で若い諸侯たちはそのふるまいに不信感を見せるも大きく反論できないでいた。その中で、若い諸侯が一人笑った。口イである。

「ヘスマン殿、結構なご演説ですが、あくまでも盟主はオスティア候であって、あなたではないことをお忘れなきよう。いささか、その立ち居振る舞いがみつともなく思われます」

「おお。恋人や学友がなじられるのが、癪に障りましたかな『英雄』殿。ですが私は本当のことを言っただけです」

ヘスマンは反省の色を微塵も見せずロイにも見下すような目線を向ける。わざわざ英雄と言い、慇懃無礼なふるまいをやめようとしている。ロイは咳払いし、棚上げされていたリリーナの質問を振り返る。「お聞きしていると、ヘスマン殿は領土の強化にずいぶん尽力されておられる。オスティア候の懸念はどうあれ、同じ領主として民を思う気持ちは見習いたいものです」

「ふふふ。それはどうも」

「ですが……。私はいくつか不穏なうわさを耳にします。孤児院を営む知人からは、最近傭兵が入れ替わり立ち代わり城を訪れるそうです

ね。それに、保有する兵の数を大きく上回る武具を購入されておいでだそうで」

「これはこれは、聡明な貴殿とも思えぬ。我がアラフェンは先の大戦でベルン軍の主力部隊によつて壊滅的打撃を受けた。戦争が終わつたからと言つて、突然兵が増えるわけでもない。それに戦前から交易の地として栄えたのだ。片田舎のフェレよりは財力に余裕があるのでね」

「なるほど。では・・・」

そう言つて、ロイはおもむろに一つの封書を取り出した。

「ヘスマン殿に見ていただきたいものがあります。これを」

「拝見しよう」

ロイから差し出された封書を、尊大な態度で受け取るヘスマン。おもむろにその封を開け、中の紙を取り出す。折りたたまれたそれを広げ、中身を目にした瞬間、ロイの顔つきは変わり、ヘスマンの顔からはみるみるうちに血の気が失せ、ひきつっていった。

「ロイ殿・・・。これをどこで」

毅然とふるまおうとするが、身は震え顔からは汗が吹き出し、狼狽しているのが見て取れる。

『さる筋』より、先日私に届けられたものです。ヘスマン殿の字であると思つたので」

「さる筋・・・とな」

「砦を建てるのが民を守るためというのなら、その書状について弁明をうかがいたいのですが、よろしいですか」

いつの間にか、主導権はヘスマンからロイに移っていた。ロイは目でリリーナに合図を送り、リリーナが追い打ちをかける。

「ヘスマン殿。その書状には何が書かれていますか?」

「い、いえ。ここで話すほどの、ことでは・・・」

先ほどまでとは一転、歯切れの悪い回答。ヘスマンの変わり様に、ボスカーとビバンツも戸惑う。

「ヘスマン殿。今日は疑いの目を向けたこと、同じリキアの民として相応しくありませんでしたわ」

「い、いいえ、めっそうもない。お国を憂える気持ちはよくわかります故・・・」

「ですが、無断で砦を増築したこと、これは二度目。次報告を怠れば、盟主として罰を与えます。よろしいですね」

「はは。委細、招致いたしました・・・」

最後はすっかりリリーナに従順となったヘスマン。議会はここで幕引きとなった。

会議後のそれぞれ

「いったいどうしたヘスマン。ロイから何を渡された」

諸侯会議が解散となった後、早い足取りで回廊を歩くヘスマンを、ボスカーが呼び止める。ヘスマンはぴたりと止まり、ひきつった表情で封書を手渡した。ボスカーは追いついてきたビバンツとともに封書を見る。二人は目を見開いた。

「こ、これは！」

「バカな・・・なぜあの小僧が持つておるのじゃ」

二人から奪うように書状を取ると、ヘスマンは反射的に握りつぶした。

「この書状は我らにとって重要なもの・・・。故に私も自室の隠し部屋に厳重に保存してあった。・・・何者かを使って盗み取らせたに違いない」

書状を握りならワナワナと拳を震わせるヘスマン。同じようにボスカーも猛り狂う。

「あやつらめ・・・盟主という地位を得、英雄として讃えられておることいいことに、このような真似までするとは・・・勘弁ならんっ!!」
「どこへ行くボスカー」

「決まっておるっ！ロイを告発する。盗賊まがいのことまでして権力をふるうとは言語道断だ」

そう言つてズカズカと歩き出すボスカーを、ヘスマンはその肩を取つて制止する。

「馬鹿者っ！ここでロイを訴えれば、我らの『計画』まで露見しかねん。私がなぜあの場でロイをとがめなかったのかわからんのかっ！」

ヘスマンの言葉に我に返つたボスカーは歯を食いしばる。

「・・・ともかく、この書状が奴の目に留まったのは事実。ほとぼりが冷めるまでおとなしくしたほうがよいのではないか？」

ビバンツの意見に二人は黙る。そしてヘスマンが口を開いた。

「仕方あるまい。私も動きすぎた。しばらくは動きを抑えねばあるまい・・・くっ」

そう言つてその場から再び歩き出したヘスマン。その顔には憤怒がみなぎっていた。

(ガキどもがあ．．．今に見ておれ！リキアの王に誰が相応しいかを、必ず思い知らせてやるっ!!)

「それにしても大したものだ。お前もこのような手を使うとはな」

一方、反対側の回廊では、ロイとシードが歩いていた。手紙を手に入れた経緯を聞いたシードは、ロイに驚きの声を上げる。

「いや、手紙を手に入れたのは偶然だ。しかし、泥棒のような真似をしたから、ちよつと気は引けるけどね」

「つたく、そういう優しさというか、変わらないなお前は」

謙遜するロイを見てシードは苦笑する。しかし、二人の表情はすぐに引き締まったものになつた。

「しかし、というか、やはりとみるべきか。ヘスマンはどうしても盟主の座が欲しいようだな」

「リリーナも密偵を使って調査をしていたそうだけど、決定的な証拠がつかめなかつたんだ。だが、はたしてアラフェン候は謀反を考えているのだろうか」

「おい正気か？これ以上ない証拠を手に入れておいて、まだそんなことを」

ロイの言葉にシードは声を荒げるが、言葉の意味を否定する。

「そうじゃない。僕が気になつているのは『するか、しないか』ではなくて『どこにけしかける』かだ」

「どこに？オステイアではないのか？」

ロイの展望をシードは理解できずに聞き返す。ロイは自分の考えを話した。

「確かに、ヘスマン殿がリキア同盟の盟主の地位に執着していることは明らか。今回見つけたあの書状や、最近の動向をかんがみても、行動を計画していることは間違いない。だが、オステイアに謀反を仕掛けるには腑に落ちないことが多い」

「たとえばっ。」

「まずオスティアとアラフェンでは明らかに距離がありすぎる。斥候兵が全速で馬を走らせても五日はかかる。一領主の反乱軍が移動するととなると、秘密裏に動くには無理がある」

「だが、俺の勘じゃカートレーやトスカナは加担するだろう。そうなれば、オスティアを攻めずともその隣のトリアぐらいなら潰せるんじゃないか？トリアの領民や侯爵のレノスを人質にして盟主の座を明け渡せつてな」

「確かにそれはある。だが、もう一つ気がかりなのは増設している砦の位置だ」

「位置？」

「リリーナと僕で集めた情報だが、増設された砦はほとんどが北東に集中している。ヘスマン殿の言うように、サカとベルンの国境ばかり。オスティアを攻めるとしたら、アラフェン領の南西に作らないか？」

「……。確かに。仮に俺（ラウス）やお前（フェレ）に攻め入るにしても、そつちに砦を作らないのは疑問だな」

「いずれにせよ、この案件はもう少し外堀を埋めてからだ」

そう言つてロイは歩みを早める。対してシードは歩みを止める。違う行動をとつたシードをロイは振り返る。

「シード？」

「ロイ。無茶は禁物だぞ。何かあったら俺をどんどん使つてくれ。俺はお前たち親子に命を助けられた。同じ領主という立場ではあるが、お前の忠臣のつもりでもいる。必ず助ける」

「……。ああ、頼りにしているよ」

「へえー。やっぱロイ様かっこいいなあ」

その頃、オスティアの市街地から離れた小高い丘。その頂上でリリーナは休息していた。ここに彼女を連れてきたのは、天馬騎士のシャニーだ。彼女は先の動乱で傭兵団の見習いとしてリキア同盟軍に参加。数多くの戦いを重ねた末、正式な天馬騎士と認められ、今は

オステイア騎士団に雇われ、リリーナの外出の伴として活動している。政務に追われ、休息の時間が十分に取れないリリーナにとつて、シャニーは気軽にこの丘に連れて行ってくれるありがたい存在だ。リリーナの母フロリーナも天馬騎士だった縁もあって、二人は動乱のころから貴族と傭兵の垣根を越えた親友のような間柄だ。二人は今夜焼けに照らされ始めた丘の草原に、仰向けに寝転んでいられる。諸侯会議の顛末を聞かされたシャニーは、改めてロイを賞賛した。

「リリーナ様っていいよね。あんな人がそばにいるんだから」

「うん。もつと小さい頃は、ぼんやりしててちよつと抜けていて、まるで弟みたいだったのに、いつの間にかすごく頼もしくなっちゃって。ほんと、頼もしい人よ」

「でもいいんですか？あたしとこんなところでしゃべってないで、ロイ様のところに行けばいいのに」

「別にいいのよ。ロイだって忙しいし、私のことであまり気を使ってほしくないから……」

そう言ったリリーナの表情は、どこか寂しげでもあった。

「ねえリリーナ様。最近、笑ってる？」

「え？」

「うん。あたしの思い違いならいいんだけど、リリーナ様、最近すつごい我慢してる。それで、あんまり笑わなくなってる。今はそういつたけど、ほんとにはロイ様ともつと一緒にいたいんじゃない？」

覗き込むように聞いてくるシャニーから、リリーナは顔をそらす。しばしの沈黙の後、一瞬風が吹き抜ける。それからおもむろにつぶやく。

「シャニーには……敵わないな。私が思ってること、全部ばれちゃうんだもん」

「……」

「会いたいよ。今も。侯爵としてやらなきゃいけないこと、盟主としてやらなきゃいけないこと……全部捨てて、ロイとずっと一緒にいたいよ」

「……」

シャニーはただ黙ってリリーナの話の話を聞いている。いつの間にかリリーナの瞳には涙がたまっている。

「私は：お父様みたいに、みんなを引っ張ることなんてできない：。時々押しつぶされそうになるの：。私じゃなくても、リキアはやっていけるんじゃないかって」

「そんなことないよっ！」

次第にネガティブになっていくリリーナを、シャニーは全力で首を振り、リリーナに顔を向けさせる。

「あたしが言っても信じられないだろうけどさ、オステイアはリリーナ様じゃなきゃダメだよ。リリーナ様はどんな人でも、みんなのことを信頼してくれてるし、本当に想ってくれてる。そんな人じゃなきゃ誰もついてこないよ。ポールス將軍やバス將軍、ウエンデイさんにオージェさん、それにあたしやロイ様だって：。リリーナ様がいるからみんな頑張れるんだよ！」

必死に励ますシャニー。シャニーもまた、涙を流している。

「だから：。そんなに自分を責めないで。あたしたちをもっと心配させて。つらかったり苦しかったらどんどん吐き出して。ね」

「：。うん。ありがとうシャニー」

黄昏の下で、二人は泣きながら笑った。

不気味な古城

諸侯会議から五日たったある日のこと。リリーナは近衛騎士のウエンデイから、気になる話を聞かされていた。

「騎士崩れの山賊？」

「はい。ここ数日、トリアとオスティアの国境近辺の村が、騎士のような格好をした一党に襲われているという報告が続いているのです」

「騎士崩れか…考えられるとすれば、レイガンズ一派の残党、あるいはエトルリアで起きたクーデターの生き残りか。いずれにせよ、騎士道を忘れ、賊に身を落とすとは、見下げ果てたやつらだ」

リリーナとともに話を聞いた、オスティア騎士団団長のボールスは吐き捨てた。彼の言ったレイガンズとはオスティア騎士団の副団長だった男で、かの動乱においてはベルンに降伏するためにクーデターを起こしたが、駆けつけたロイ達の手によって討たれた。

「…で、そやつらはどの程度の力があるのだウエンデイ」

「はい、兄上。それが、付近の砦の兵によれば、生半可なものではないと。鎮圧に向かっても、かなりの被害を出すようだ」

「…どちらにしても、民に危害を加える者を放ってはおけないわ。被害が大きくなる前に手を打たないと」

「ならアジトを叩きましょう。やつらの調べはつきましたよ」

リリーナが思案していると、どこからともなく軽い口調が聞こえてきた。かと思うと、いつの間にか、茶髪の男が目の前にいた。

「…もう、マシューさん。普通に出てこられない？びつくりしちゃうわ」

現れた男、マシューにリリーナは呆れながらため息をつく。

「ははは。いいじゃないですか。子供の頃は、随分喜んでくれたでしよっ。」

「…密偵の技を、見世物のように使うのは感心しませんな。マシューどの」

にやけながら話すマシューに、ボールスは咳払いしながらたしなめた。

マシユーはオステイアの家臣の中ではかなりの古株で、リリーナの
おじにあたる先々代侯爵ウーゼルのころから仕えるただ一人の密偵
である。そろそろ四十歳になるうかというのに、見た目はまだ青年と
言っているほど若々しい。場が再び引き締まった中で、マシユーは本
題に入った。

「で、やつらのアジトは、エトルリアとの国境に近い山の古城です。ま
あ、城と言うにはもうボロすぎて、単なる罫（ねぐら）でしかないよ
うなところで」

「つまり、籠城には使えないという事か」

「そういうことだボールス。向こうも崩れてしまったが、騎士として
の兵法はある程度知っているはず。地の利はあるにしても、こっちが
一気呵成に攻めてきたとしたらひとたまりもないだろうさ」

「では、明日にでも一個小隊を組織して、討伐に向かわせましょう」

「いやウエンデイ。できるなら身軽な傭兵部隊に行かせたほうがい
い。重騎士じゃ野外の戦いは機動力を欠く。山ならなおさらだ」

「それじゃあ明日にでもオージエに向かわせるわ。シャニーにも先遣
役を担ってもらえば、敵の動向はつかめるわ」

リリーナの提案に一同は賛同し、さっそく準備に取り掛かった。

同じころ、その一党は明日の襲撃のためにアジトとなっている古城
で酒盛りをしていた。

ボールスの懸念した通り、彼らはオステイアで起こったクーデ
ターの折、レイガンズ側につき鎮圧後は騎士団を追われてしまった者
たちだった。鎧を着ていれば武器も様々。下手な山賊団よりも装備
が整っていた。

「最近は砦からの討伐隊も少なくなった。次はあの村もおしまいさ」

「となるとそろそろ次の食い扶持探さねーとな」

「ならトリアに行くか。あそこはオステイア以上に騎士団がぜい弱
だ。うまく行きや俺たちだけで潰せるぜ」

「ようし、それじゃあ景気づけにのむとすつか」

汚らしい笑い声が、森中にこだました。そのうち一人の賊が、用を

足すために砦を出た。

「うゝい。ちつと飲みすぎたか。よく出やがるぜ」

木陰で立小便していると、男は背後に人影を感じた。突然現れた氣配に、男は慌てて振り返るが、そこに立っていた人を見て、男は戸惑った。

「ガキ・・・か？なんでこんなところに」

見たところ五、六歳ほどの幼女がニヤニヤしながら立っていた。

「お嬢ちゃん。ここがどこだかわかってんのかあ？それとも迷い子・・・か？」

初めは高圧的に接した男だったが、少女の目を見ておののいた。陶器を思わせる、温もりのない白い肌とは、あまりにも対照的な、禍々しきさえ感じる金色の瞳をしていた。

「フッフッフッフッフ」

「な、なんだよてめえっ・・・な」

不気味に笑う少女に男は強がるが、少女が浮き上がったかと思うと、野花のような小さな手を広げ、男の顔にかざした。そして何かの呪文を呟いた。

「メイエイト」

「ぎやああああああああっ!!!」

たき火を囲んでの宴会には相応しくない、突然の叫び声。古城にいた誰もが立ち上がり、慌てて武器を取った。

「なんだ、夜襲かつ!?」

「い、今の声はイガウの・・・」

「お、おい。誰か様子を見てこ・・・」

徒党の頭目らしき男が、部下に指示を出すのをやめた。城の入り口には、人間の鮮血にまみれた、人形のような少女が立っていたからだ。「ウッフッフ。ごちそういっぱい」

少女の言葉が、山賊たちの聞いた最期の言葉だった・・・。

「あれがマシューさんの言ってた古城ね」

翌朝、シャニーはリリーナの指示を受け、偵察のために山賊たちのアジトに向かっていた。オステイア城から飛び立って一時間もしないうちに目的地についてしまうのだから、やはり飛べるというのは貴重である。ただ、それだけに目立ちもする。リキアではペガサスをあまり見ないのでなおさらである。

「敵が近いからアーチャーに注意しないとね。ん？」

古城に近づくとつれ、シャニーはある異変を感じた。風に乗って飛んできたものを、鼻が感じた。

「何、今のおい・・・」

いぶかしみながら、シャニーは古城の上空を旋回した。

「人の気配がない。逃げつちやったのかなあ・・・でも、なんだろう、このにおい。気持ち悪い」

同じような思いを愛馬もしているのだろう。鼻を鳴らして不快感を示す。

「何があつたんだろ・・・降りてみよう」

このままでは十分な報告ができないと思い、シャニーは危険を承知で砦のそばに降下していった。

愛馬から降りて古城についたシャニー。そこで彼女は悪臭の理由を知り、目の前の後継に絶句した。

「何なの・・・これ・・・何があつたの・・・」

霧ひとつない快晴にも関わらず、シャニーは逃げ出したい気持ちを必死にこらえていた。あちらこちらの地面に武器や鎧やらが散乱しており、その周りの地面は赤黒く変色していた。というか、血だまりがあちらこちらにできていた。

「なんでこんなことに・・・仲間割れしたにしても、なんで死体がないの??」

そうつぶやきながら古城の入り口に近づいていく。そこでシャニーは人の気配を感じた。

「誰っ!!」

携帯していた銀の剣をさやから抜いてシャニーは振り返る。だが誰もいない。と思うと、背後に人影を感じて剣を向けた。いつの間にか剣を持った男が、顔を伏せて突っ立っていた。

「これ、あんたの仕業？」

シャニーが聞くが、男は顔を伏せたまま答えない。するとシャニーは次々と気配を感じる。いつの間にか自分の四方を同じような剣士に囲まれていた。

「な、なんなのあんたたち……」

戸惑うシャニーに最初の男が突然顔を上げる。目があったシャニーは、男の顔に悲鳴を上げた。

「ひっ！金色の……目？」

「……殺ス」

おののくシャニーに、そうつぶやいた剣士は突然切りかかってきた。

暗躍する影

「はあ．．．、はあ．．．うっ」

一対四で始まった戦いだったが、シャニーは大粒の汗を垂らし、全身に傷を作りながら二人倒した。一人一人の実力は、槍が本職のシャニーでも互角以上に戦えている。幼いながらも百戦錬磨なのだ。下手な賊に引けを取ることはない。

だが、目の前の剣士たちは、明らかに人間ではなかった。殺気を醸し出すどころか、呼吸ひとつしていない。何より斬られたあと、彼らは血を流しもしなければ死体ともならず、白い砂の塊となって崩れていくのだ。それが不気味で仕方なく、シャニーの体力を必要以上に奪った。

そして三人目を相手にしていると、シャニーは四人目に利き腕である右肩を斬りつけられた。致命傷こそないが、右の肩当ては砕け、切り傷から血が滴っている。左手で傷口を抑えながら、右手で弱しく切っ先を敵に向ける。

「ちよつとヤバいな．．．。やっぱり、引き返して、報告しといたほうがよかったかな。ハハ．．．」

危機的状况を卑下するように、シャニーは自虐的に笑う。対して剣士たちは特に感情を見せることなく、「殺ス」とささやきながらゆらゆらと近づく。

(目がかすむ．．．腕痛い．．．もうダメかな、あたし．．．)

目の前の剣士たちに対して、打開策が思いつかない。シャニーの思考は、徐々に悪いほうに流れていった。

そんな時だった。

「伏せろっ!!」

背後からの怒鳴り声に、反射的にしゃがむシャニー。その頭上を手斧が回転しながら飛んでいく。それは三人目の剣士の眉間を捉え、すぐさま砂となって崩壊している。それと同時に四人目の剣士が、飛び掛かってきたきた男の大剣に斬り伏せられていた。砂の塊から大剣

を抜き、手斧を拾った男は、ゆっくりとシャニーに近づいてくる。脱力して座り込んだシャニーは、助けてくれた男を見て、目を丸くしながらつぶやいた。

「デイク・・・さん？」

「無事か？ シャニー」

目の前の男が自分の恩師であるときちんと判断できた瞬間、堰（せき）を切ったように涙があふれ、シャニーは泣きじやくりながら飛びついた。

「うわあああん！ デイクさあああんつ!!」

「まったく無茶しやがるぜ。国境を越えたときにペガサスを見たからなんかと思えば。腕を上げたようだが、まだまだガキだなお前は」

「ひっぐ、うぐつ、怖かったよお、死ぬかと思つたよお」

「わーったわーった。いつまでも泣くなつつの。近くの村で手当してやるから、ペガサスに乗せろ」

いつまでも泣きやまないシャニーに苦笑するデイク。やれやれと思いつつ、しばらくシャニーを胸の中におさめ、頭をなでてやるのだった。

時間を少しさかのぼる。リリーナがウエンデイから報告を受けていたところ、海路でフェレに帰還したロイは、エリウッドの下に駆けつけた。

「おお、戻ったかロイ。ご苦労だった」

半身を起こしてベッド上から息子を労うエリウッド。ロイはその姿に安堵した。

「只今戻りました。父上、お加減はよろしいのですか？」

「そう心配しなくていい。ここ最近調子がいいのだ。家督をお前に譲ってからは、休むだけの毎日だ」

「ははは。それは何よりです」

しばしの談笑の後、ロイは諸侯会議でのやりとりをエリウッドに報告した。エリウッドはそれを聞いてため息をついた。

「アラフエン候がそのようなことをか」

「父上、やはり謀反はあるべきと考えたほうがよろしいでしょうか」

「うむ。決定的な証拠を手にした以上、その考えは間違いではない。だが、書状の入手経路が問題だ。これを口実にとがめても、我らにもはたから見れば非がある。両成敗で終わる可能性もある」

「しかし、事が起きてからでは遅すぎます。アラフエン候に関しては、ある程度警戒すべきと考えているのですが」

「ああ、それでいい。だが、公にはするな。客観的な確証を得るまではな」

「はい」

そして話はシードのことに及ぶ。

「ところで、シードは元気にやっているか」

「はい。父上の恩に少しでも報いられるよう、精進しているようです。

『いざとなればいつでも俺を頼れ』とも言われました」

「そうか。…だがなロイ。お前もシードを助けてやれよ。彼に対する風当たりは未だ強い。心が折れそうになるくらいにな。心意気はいいのだが、汚名を晴らさんと無理をしすぎてはもとも子もない。できることなら、私とヘクトルのように互いを高めながら助け合い、リキアを引っ張ってもらいたいのだ」

「はい。シードは僕にとってかけがえのない友です。ともにリキアのために力を合わせます」

父への報告を終えたロイは、自室に戻るべく渡り廊下をあるく。この日は新月の夜で、星の弱々しい光と等間隔で灯されている松明がロイの道を照らしていた。

ふと、ロイは歩みを止めた。ため息をひとつついて、独り言を呟きだした。

「出てきたらどうだい。また何か『盗んで』きたのかな？」

振り向かず、目だけを動かして柱に語りかけるロイ。柱の裏からは女の声があった。

「あら。そう言う態度とるわけ？謀反の証拠を見つけてきた『恩人』に對して」

「それについては、改めて礼を言わせてもらうよ。本当にありがとう」
「できたら、感謝の気持ちを、形で示して欲しいんだけどなあ」

そう言った女は、柱の影からお金を意味する輪を指で作った手を差し出す。

「僕が頼んだ依頼ならそうするけど、これはあくまで君からの善意だ。悪いけど出せないな」

わざとらしく笑いながらロイは返す。柱の女は口調を変えて質問してくる。

「…で、実際のところどうなの？あいつら、これで反乱を止めるとは思えないけど」

「うん。ヘスマン殿をはじめ、今のリキア同盟に不満を持つ諸侯は多いし、あの方はその筆頭だ。このまま終わるとは思えないよ」

「だったら先に叩いちゃえばいいじゃん。貴族ってホント面倒くさいわね」

「かもね。ただ、しばらくはアラフェンへの監視は強めるつもりさ。今度は情報収集を依頼したいんだけど、構わないかな」

「そう来なくっちゃ。ただ、あたしは高いわよ。いい情報届けれたら、ボーナスももらうからね！」

その言葉を最後に、柱から気配が消えた。ロイは肩をすくめながら呟いた。

「無理はしないようにね、キャス」

同じ時刻。アラフェン城。私室でヘスマンは誰かと面談をしていた。どういう人物かは、顔を深く覆うローブで確認できない。声色から男であることぐらいは推察できたのだが。

その男は、ヘスマンに対し露骨なまでに失望の色を声で伝えた。

「…なんとまあ愚かな。秘密利に進めねばならないものを、こうも簡単にばれてしまうとは…。我が主が知ればどう思われるでしょうな」

「面目ない。まさか盗まれるとは思わなんぞな…」

「リキアには聡明な輩が多い。くれぐれも抜かるとのなきよう」

声色からして、男はヘスマンよりも随分若い。にもかかわらず尊大な態度をとっていることから、今回発覚したクーデターについて、重要な役割を担っていると考えていい。

「貴殿にうかがいたいですが、軍備はどの程度整っておられるか」

「う、うむ。わたしはもとより、カートレーやトスカナも段取りは整っている。あとはいくつかの諸侯にも意思確認しておるが…」

「ひとまず、この三候だけでも動ける、ということですか」

男はならばよしと言わんばかりの笑みを浮かべた。

予兆はうやむやに

諸侯会議にてロイがヘスマンの陰謀を万座に晒してからの一ヶ月が経とうとしていた。

あれからロイはキャスなど自身の情報網を使ってヘスマンの動向を注視していた。しかし、不思議なほどヘスマンに動きはなく、傭兵の出入りはなくなり砦の増築の様子もない。そればかりが、民にかけていた税金を取り止めたり、城の資金を復興のために使ったりと領主として殊勝な行動が目立つようになり、一部諸侯からは「アラフェン候は心を入れ替えられた」と見直すような反応が増えた。

一方で、オステイアではここ最近謎の事件が相次いでいる。それは領主にとっては起きれば起きるほど、むしろ都合の良いものであるが、それがむしろ混乱を招いていた。諸侯会議のためにオステイアを訪れていたロイは、リリーナからそれについての相談を受けた。

「山賊団が次々と消えている？それは別にいいことなんじゃないのかい？」

「うん。そうなんだけど、ちよつと不気味でね」

そのため息をついて、リリーナはシャニーの件も含め、状況を説明した。

「山賊がいなくなるのは悪いことではないけど…：シャニーを襲った、金色の目の剣士たちも不気味だな。アラフェン候のことだけでも大変なのに…：はあ」

ロイが思わず本音を漏らすと、扉をノックする音が聞こえた。リリーナが入室を促すと、シードが一人の老将とともに部屋に入ってきた。

「マーカス。君も来ていたのか」

「ロイ様、お久しゅうございます。リリーナ様も」

「ご壮健で何よりです。マーカスさん」

マーカスはリキア同盟のすべての騎士団の中で見ても、最古参と言っていいほど長きにわたり騎士として主家につかえ続ける。始ま

りはロイの祖父であるエルバートのころからだというのだから、彼はフェレの生き字引と言っている。そんなマーカスも先の動乱にて衰えを感じ、フェレ騎士団の將軍職をアレンに譲り一線を一時退いた。それから間もなく、シードがラウス候となった折、壊滅状態だったラウス軍の立て直しのために、マーカスが駐留武官として派遣されたのである。以後、この一年、マーカスはシードの片腕としてその復興を支えていたのである。

ロイとリリーナがマーカスとの旧交を温めている傍ら、シードはいたずらっぽくニヤニヤと笑う。

「なんだ、お前たちだけか。恋仲同士の二人の邪魔をってしまったか？」

「え、な、よしてくれよシード。別にそういうわけじゃ」

シードは顔を赤らめて反論するロイをあえて無視し、マーカスに言う。

「マーカス殿。しばし席をはずしたほうがよいのではないかな」

「そうですね。お二人だけの時をもうしばし・・・」

「ちよ、ちよっと、マーカスさんまで。やめてよ」

シードのいたずらにリリーナも赤面しむくれる。それがシードには面白かった。だが、すぐに顔を引き締めた。

「実はな。最近ラウスで妙なことが起きてな。これを諸侯会議で協議したいと思って、先にリリーナの耳に入れようと思ってな」

「妙なこと？」

「ああ。ロイよ。ラウスの海岸から南に離れ小島があるのは知っているか」

「うん。ラウスに行ったときに見たことがある。確かそこは海賊が根城にしているという」

動乱の際の記憶を掘り起し、ロイはそれを思い出す。

「そうだ。俺がラウス候についたときに一度叩き潰したんだが、またいつの間にか復活しててな。仕方ないからまた潰しに行ったんだ」

「君自らが？勇ましいね」

「その行動力、まるでお父様ね」

「勇将の娘にそういわれると照れるね。でだ、十日ほど前に島に行っただんだが・・・」

一度ためらうように口をつぐんだシードだったが、すぐにまた話し始めた。

「砦の中は・・・地獄絵図だった」

「どういうこと？」

リリーナの質問に、シードは気乗りしないようにつぶやいた。

「血だらけだったのさ。海賊が身に着けていたと思われる斧やバンドナが血だまりの中に浮かんでた。そんなんばかりだったのさ」

シードの話に、ロイとリリーナは顔を見合わせる。

「リリーナ、今の話・・・」

「ええ・・・。ラウスでもあつたなんて」

「ラウスでもあつた？　どういうことだロイ」

「実は・・・」

聞き返すシードにロイは説明する。オステイアでも同じようなことが起きていたことに、シードはただただ驚いた。

「どういうことだ。まあ、賊を駆逐してくれるのはありがたいが」

「いったい誰が何の目的でしているのか、見当がつかない。義勇軍の討伐にしては・・・やっていることはとても人間のそれとも思えないしね」

「それに・・・。こういう言い方はしたくないけど、被害にあっているのが山賊や海賊であるうちはいいけど、これが無関係の民衆や軍が巻き込まれることよ。いずれにしても、すぐに解決しなければならぬ問題よ。これは今回の諸侯会議で話し合う必要があるわ」

「まあ・・・そうだろうがな」

そう意を決するリリーナだが、水を差すように、シードはぶぜんとした表情を浮かべる。ロイは真意を尋ねた。

「シード、何か不満でもあるのか」

「いやなに。ほかの諸侯がどう思うかだ。ヘスマンたちは別として、『賊が駆逐されている』という短絡的な評価で押し切られそうな気がしてな。これをあいつらが言ってくれば楽なだけだな」

「君はヘスマン殿たちが、この問題に関わっているとしても考えているのかい？」

「まあ、無理があるというのは分かっている。だが、謀反を画策が発覚しからのアイツらが静かすぎるんでね。．．．俺の考えすぎか。すまん、忘れてくれ」

そう言っつてシードは頭をかく。バツが悪くなったシードは、そのまま部屋を出て行った。

「あ、シード。待って」

リリーナが呼び止めたのも聞かず、シードはそのまま足早に去っていった。

そして諸侯会議の日。リリーナは早速この案件を取り上げてみるが、シードの予想通り、前向きにとらえる諸侯が相次いだ。

「方法はどうであれ、民に害をなす賊がなくなることはよいではありませんか」

「然様。特に気にするまでもありませんまい」

「その一団には感謝せねばなりませんな。いつそのことリキアの賊をすべて駆逐してもらいたいものだ」

楽観的な意見が大勢を占める中で、リリーナたちは自分たちの懸念を示す機会を失う。結局このことは大した進展もなく、静観することので一致した。その中で、ロイは気になることがあった。

「まあ、当然と言えば当然だが．．．。賊の存在は各諸侯にとっても頭の痛い問題だ。それを消してくれるんだから特に触れたくはないんだろ」

会議の休憩の折、バルコニーにてシードとロイはさっきの議題を振り返っていた。

「しかし、これでこの一件は秘密裏にしか動けなくなったな。どうするんだ、ロイ」

「．．．．」

「?おい、ロイ」

「あ、すまない」

「なんか気になることでもあったのか？」

いぶかしみながら尋ねるシードに、ロイは考え込んだままとつとつと話し始めた。

「各諸侯の表情……。気になったのが二人いる」

「二人？誰だ」

「二人はヘスマン殿。君の見立てでは、あの方が何らかのかかわりがあるとのことだ。そこでしばらく様子を見ていたが、僕にはむしろ戸惑っているようにも見えた」

「戸惑っている？」

「僕の想像だが……。おそらくヘスマン殿は関わっていない」

「そうか……。俺の考えすぎだったか」

ロイの展望を聞いて、シードは苦笑いを浮かべる。だが、ロイの表情は変わらず曇ったままだ。

「ただそれ以上に気になったのが、トリア侯だ」

「トリア？レノスがか？」

ロイが気になったもう一人の人物。それは自分たちと同じく若い諸侯である、トリア侯爵レノスだった。

レノスは、先の動乱でベルンに寝返ろうともくろんだ執事ワグナーに暗殺されたヘクトルの従兄弟オルンの嫡子である。ロイらとは二つ年上で、物静かな人物である。元来あまり会議で発言するようなことはないのだが、リリーナが案件を取り上げたときから、その挙動がロイには引つかかった。

「はた目から見ればいつもの通りだったが、僕には何かにおびえているかのようだった。もしかしたら、何か知っているのかもしれない」
「ならば、聞いてみるか。直に」

「ああ。もしかしたら、何か知っているのかもしれない」

そうロイが決めたときだった。

「ロイ様、シード様。ここにおられましたか」

「どうしたんだマークス」

駆けつけてきたマークスにロイが尋ねる。マークスは思いもよら

ぬことを伝えてきた。

「トリア侯爵のレノス様が、急病により帰郷することになりました」

「何だつて？」

「このところお身体がすぐれなかったようで……。先ほどの会議で調子を崩されたとか」

マーカスの報告を聞いて、シードは首を傾げた。

「もともと奴はひ弱い……。こうなつたところで別に不思議はないんだが……。ずいぶんと都合がいいな」

「都合がよいとは？」

「いや、マーカス。何でもない。わざわざすまなかつたな」

マーカスを労うと、ロイは目でシードに来るように言う。二人はおもむろに歩き始める。

「どう思う。これは偶然ではない……。と？」

「少なくとも俺はそう考える。レノスは、何かを知っている」

「……。リリーナには、どうする？」

「うむ。話せるなら話したほうがいいか……。あとで知らされるよりはいいだろう。お前の口から言つてやれ」

このとき、二人はまだ知らない。いや、知る由もない。

トリア侯爵が、リキア反乱のカギを握っていることに。

満月の夜襲

(結局こうなったか……。くそ、なんてのんきな)

例の件がうやむやになってしまったことに、シードはいまだにイライラが静まらない。悶々とした気分では廊を歩いていると、城の中庭の木陰にもたれかかっている男を見かけた。

(あれは……。あの顔の傷……)

近づいていると、男は腕を組んだまま、気にもたれかかって昼寝をむさぼっていた。

ただ、シードが立ち止ると同時に、男は目を閉じたまましゃべりだした。

「何か用かい。貴族さんよ」

「失礼だが、貴殿はかの『手負える虎』か」

「だと、したら？」

異名で尋ねられて、デイクは片目を開く。

「俺はシード。ラウス侯爵だ。一手、願えないか」

「……どういうつもりだ？裏切りの腰抜け侯爵の息子が、この俺にいきなり腕試しか？」

「エリックは確かに俺の父だが……俺はその父に幽閉されていた。『リキアを裏切るな』と言ったらな」

シードがそういったところで、デイクは両目を開き、シードと目を合わせた。そして一つ息を吐く。

「いい目だ。俺はあの侯爵のことは知らんが、お前はそこそこやるようだな。いいだろ」

そして二人は練兵場に。訓練用の木剣を手に取り、向かい合った。「いい構えだ。勝負を吹っ掛けるだけの實力はある」

「ならば、もつと感じてもらおうか」

シードは先手必勝とばかりに仕掛ける。切っ先を突き出し、払う。素早く間合いを詰めて斬りかかる。

だが、いずれもデイクは鼻先でかわす。

「戦場には出たことないか。一太刀一太刀の動きがデカイぜ？」

「そうかい。これでもロイとはそこそこ互角なんだがな」

余裕をかますデイクに、シードも笑みを浮かべる。だが、次第に動きが悪くなるのはシードだ。

(くそっ！こうも軽く、あしらわれるとは・・・)

「甘いぜっ!!」

一瞬だった。起死回生の一撃を狙ったスキを逃さず、デイクはシードの剣を弾き飛ばした。シードの手から飛び立った剣は、その後で音を立てて転がった。

「・・・やはり、強いな。完敗だ、デイク殿」

「いや、お前も悪くない。トンビから生まれた鷹っていうのは、あんたみたいなことを言うんだな」

デイクの言葉に、シードは一度顔を曇らせてからつぶやいた。

「俺は、父親とよく比べられた。それでよく驚かれた。あのヘクトル様に『本当にあの腰抜けの息子か?』ってよく言われたもんだ。まあ、俺自身もそんな自覚はあったがね。だが、俺にはこの先「裏切り者の息子」という肩書がついてまわる。だから俺は自分を絶えず磨かねばならん・・・。良ければラウスに来てもらえないか。貴殿と手合せすれば腕も磨けるし、軍の強化にもなる。金はそんなに出せんが」

「フン。悪いな。俺はあいにくそう言うのは嫌いだね」

「ロイであつてもか?」

「どうだろうな。ま、人としての器があるかどうかだ。あんたは・・・多分それなりにあるだろうよ。だからこそ自分の弱さを自覚できてる」

「わかった。ならば俺はしばらく自分の器を磨くでしょう。機会があれば、ともに戦ってみたいものだ」

そう言つてシードは練兵場を後にした。

その日の夜。オステイア城では諸侯同士の懇親を兼ねた晩餐会が開かれていた。ロイたちらの本音を言えばそんな気分ではないのだが、他の諸侯にも配慮し「トリア侯が病中のため」という理由できわめて簡素なものだった。

外の満月はまばゆいほど輝いていた。

「いい月だな。こんなきれいな満月はそうそう目にかかれないぞ」

「あーあ、こんなタイミングで当直か。月見酒といきたいが」

城壁にある物見やぐらの一つで、満月を眺めながら、兵士たちは背を向けあつて、そんなことを口にしていた。

「ま、交代したら寝る前に一杯やるか。最近いい酒が手に入ったんだ」

「おお、それはいい。ほかの誰かも……」

そこで兵士の言葉が途切れた。

「ん？どうし」

不審に思った兵士が振り返ったが、彼もそれ以上の言葉が出なかった。なぜならば、二人とも眉間に針を打ち込まれ、その命を終えていたからである。

「フン。満月の夜に暗殺とは……、これまた粹というやつですか」

顔を黒い布で覆った男は、詩人のように場に浸っていた。そしておもむろに指を鳴らす。すると次々と人影が現れた。

「とりあえず、やぐらの掃除は頼みます。あと二人ほど場内を徘徊しなさい。無論、通りがかりに姿を見たものは消しなさい」

もう一度指を鳴らすと、男の周りの人影は消えた。

「ふう……しかし、相変わらずトリア侯は病弱のようだな。諸侯ともあろうものが、気がすぐれぬという事で会議からさるとはの」

「然様ですな。あのようなものがリリーナ様と血縁にあたるというのだから信じられませぬなあ」

晩餐会を中座し、部屋に戻るロベロ侯爵とその従者。彼らは不幸にも、あの男と出くわした。

「む？何者だ？」

「・・・城の兵か。端によれ。ロベロ侯のお通りぞ」

従者の叱責に耳を貸さず、オステイア兵の男は顔を伏せたまま近づいてくる。

「白き満月には、赤き鮮血がよく似合いますよ」

そう言つて男は侯爵と従者の間を通り抜ける。

「・・・クヒエ」

「・・・カフオ」

二人はそんな音を漏らして崩れていく。喉笛をぱっくりと切り裂かれた二人は、夥（おびただ）しく鮮血を吹きだしていた。

「きやああああああああつ!!!」

それが偶然松明のふもとだったために、偶然ついてきていた侍女が一部始終を目撃。悲鳴を上げた。静寂を切り裂く悲鳴は、晩餐会が開かれている部屋にまで届き、場を静まり返らせた。しばしぎわめいた後、血相を変えたオステイア兵士が、会場に駆けこんできた。

「申し上げますっ!!回廊にて、ロベロ侯爵様が殺されておりますっ!!」
「なんですつてっ!?!」

兵士の報告に、リリーナは血相を変えて立ち上がる。

「一体どういうことだ」

「侵入者か？詳しく話せ」

「は。では、誰がやったのかを・・・お教えいたしましょう」

急になにやついて、飛び込んできた兵士は腕を広げる。そして立ち上がるのと入れ替わりで、事情を聴きに来た入り口にいた兵士二人が、首から血を流しながら倒れた。男の両腕には爪状の刃物が鈍く輝いていた。

目の前の後継に貴族たちはおののき、卒倒する淑女もいた。

「そうお騒ぎにならなくともよいのですよ。私が欲しいのは・・・あなたなのですから」

そう言つて男は刃先をリリーナに向ける。

「いかん！ウエンデイ、シャニー、リリーナ様を」

守れ！ボールスがそう言おうとしたときには、男はすでにリリーナの目の前まで跳んできた。

そしてそれを阻む者が、レイピアで男の爪を受け止めた。

「さすがはリキア一の剣士。お見事な腕前で」

余裕の表情を浮かべながら、男は後ろに下がる。ロイはリリーナと男の間に立ち、切っ先を男に向けた。

「貴様・・・一体何者だ」

「フフフ。とりあえず、バルグという名を持っています。フェレ候。美しき盟主とともに若き獅子の首も頂戴しましょう。・・・

キイイイイイイイエエエエエツツ！！！！」

「うっ！！」

奇声を上げて飛び掛かってくるバルグにロイはわずかに反応が遅れ、左の頬を斬りつけられた。

「く、速い・・・」

「おや？頬ですか。首を裂いたはずなのですが、ネエエエエエエエツ」

「やあっ！！」

入れ替わる二人。ロイは右肩を斬られてひざまずく。

「ぐうっ！！」

「ロイツー！」

「おやおや。今度は肩ですか。では次こそ首を・・・」

そこでバルグの言葉が止まった。自分の身体に異変を感じたからだ。バルグは自分の身体を見る。

「おや・・・。いつの間にか・・・」

バルグの右わき腹にはレイピアが突き刺さっていた。無造作に引き抜き投げ捨てたが、バルグは無表情だった。そして次第に白い砂と成って崩れていった。目の前の事実がよくわからず、誰もが啞然とする。シャニーを除いて。

「こ、こいつ・・・あたしがこないだ相手した剣士と一緒に？」

すると突然目を焼くような閃光が現れた。それが収まるとリリーナの目の前には、一人の少女が立っていた。あつけにとられたリリーナに、その少女はつぶやいた。

「おねえちゃん、いつしよにきて〜」

無邪気そのものの口調だったが、その少女に尋常でない魔力を感じたりリリーナは、反射的に魔力の障壁を作る。だが、信じられないことが起きる。少女の手のひらから水のようなものを吹き出し、それがリリーナの身体にまわりついた。

「な、なにこれっ!?!」

「それねえ、まりよくにはんのうするの。あたしおねえちゃんをいけどりにきたの」

「貴様、リリーナ様に何をっ!」

そう叫んでボールスはリリーナに飛び掛かる。だが、少女は開いている手をボールスにかざすと、そこから衝撃波を放ってボールスを吹き飛ばした。

「ボールスっ!う、くうっ!!」

「リリーナっ!!」

ロイの叫びもむなしく、リリーナにまわりついた物体は、そのまま彼女を包み込み、シャボン玉のような形となった。その中でリリーナは気を失っていた。それは少女とともに宙に浮かぶ。

「まてっ!リリーナをどこへっ!!」

呼び止めるロイに、少女は無邪気に答えた。

「れのすってひとのどこ〜」

「何だっってっ!?!」

意外な名前にロイは目を見開く。

再び部屋を閃光が包み、リリーナと少女の姿は消えていた。

トリアの異変

オステイア城にて起きた謎の一段の襲撃事件。ロベロ侯爵をはじめ十数人の死者を出し、さらには盟主リリーナもさらわれてしまった。

「オステイアの歴史も地に落ちたものですね」

「ロベロ候……なんと哀れな。リキアの混乱に巻き込まれたまま……」
「もうオステイアはあてにならない。ひとまず戻るとしよう。今のままならアラフェン侯が盟主でもよいとも思えるわい」

リリーナがいないことをいいことに、散々彼女を卑下して諸侯たちは自分たちの国に帰っていった。

一方で、ロイは一つの決断を下した。

「トリアに行こうと思う」

「さてロイ。あの女のことを信じるのか？」

「いや。そういうわけではない。だが、トリア侯が何らかの関わりがあると考えていいと思う。それにあの少女が言ったことが本当なら、リリーナをすぐに助けないと。このままではリキアはバラバラになってしまおうしね」

シードが逸るロイを止めようとしたが、ロイの考えを聞いて納得した。

「しかしいいのか？フェレの方は」

「甘えかもしれないけど、フェレには父上がいるし、アレンやハーケン、イサドラと力のある騎士も多い。そう簡単にはやられはしないさ。だが、さつきも言ったように、リリーナを早く取り戻さないとオステイアの屋台骨を揺るがすことになる。長たる存在を取り戻さなければ、日和見していた侯爵たちがヘスマン殿の一派に流れる可能性もある」

「確かにな。こう考えてみると、トリアもそうだが、今回の事件……やはりヘスマンも何らかの関わりがあると考えていいな。で？メンツはどうするよ」

ロイとシードは、トリアに向かう部隊を組織する。早急に行動でき

る機動性と、万が一の襲撃に備えて相応の実力者であること。この両面から考え、二人はデイク、シャニー、ウエンデイを連れていくことにした。

「すまないな、ランス。君だけ先にフェレに帰すことになってしまった」

「いえ、非常事態ですので仕方ありません。それにロイ様が帰る場所を守ることも、騎士としての務めでもあります」

出立前、ロイは自身の警護のため同行したフェレ騎士団副団長のランスとその小隊をフェレに帰すことにした。領主の自分がいない今、少しでも戦力は返しておきたいという考えだからだ。同じように、シードもマーカスを帰還させた。

「念のため、帰り次第国境の警備を強化してくれ。ヘスマンに同調する連中が、リリーナを擁護する俺たちにちよっかいを出さないとも限らんからな」

「お任せください。立ち直りつつあるラウスを、再び混乱に招かぬよう、全力を尽くします」

「では、行こう。トリアへ」

ロイ、シード、デイクは馬を駆り、ウエンデイはシャニーの天馬に同乗し、その上空を追走していった。

軍隊として行軍すれば、オスティア城からトリアまでは、強行軍でも三日はかかる。しかし、少数精鋭の効果は大きく、一行はその日のうちにトリアに入り、日がくれるまでには城下にもつとも近い村タナマについた。しかし、村人が巻き込まれることをおそれ、ロイ達はさらに城の方へと進み、街道から少し外れた場所で野営することにした。

「ここまでは、何もなくこれだな」

「ああ。不自然すぎるぐらいな」

たき火を囲みながら、ロイとシードはこれまでの道のりを振り返っていた。

「向こうは俺たちの動向は気づいていると思うか？ロイ」

「何とも言えないが……。騎士団を帰還させたことが僕たちも自分たちの国に帰ったと考えてくれればいいが、そう都合よくいくとは思えないな」

「だろうな。あんな暗殺集団が仕掛けてきたぐらいだ。俺たちを泳がせていると考えるのが自然だな」

そう言つて、手にしていた枯れ枝を折つて、シードは火の中に放り込む。枯れ枝は火に触れるとそのまま炎に包まれていった。

「ただ……。さっきの村、通りすがりに見やっただけだが……。あそこだけでもトリアがおかしくなっていることはわかったよ」

「というど？」

「空気が、死んでいる。活気がまるでなかった。元々ここはエトルリア近辺の村々との交易も盛んで、フェレ以上に活気があった。レノス殿がオルン様の跡を継いでからの復興も順調だとも聞いていた。けど……」

「確かに、とてもそうとは見えなかったな。順調に言ってるなら、あんな疲れ切った顔なんかしてないだろうしな」

ロイの言おうとしていたことを、シードと言う。言ってみて、シードも思うところをいくつか感じた。

今回ロイたちは、敵に見つかるリスクはあるものの、何より早くトリアにつくために、あえて整備された街道を進んでいた。その中で、一つ違和感を感じていた。

貴族同士のゴタゴタが続いているものの、リキア地方はかなり活気がある状態である。にもかかわらず、タマナ村だけでなく、途中いくつかの村に立ち寄った時、あるいはトリアの方から向かってきた、行商人と見られる一段とすれ違いもしたが、いずれも目が死んでいた。「物証……つっても人間の表情だけだが、トリアは間違いなく何か起きてている」

「そして、レノス殿も何らかの関わりがある」

二人がそう確信した時だった。二人に背を向けてあえて話に加わらなかったデイクが、急に立ち上がり、周りを見渡した。

「どうした、デイク」

「……。あっちの方で物音がした。ちよつと見てくる」

そう言つてデイクは森のほうへと向かつていった。そしてすぐさま大声が飛んできた。

「おいっ！しつかりしろっ!!」

ロイはシールドに女性二人に声をかけておくよう告げると、デイクの後を追う。ここでは、全身血まみれの男を抱えるデイクの姿があった。

「これは、ひどいな。……ん？」

血だらけの男の首元の、光るものにロイは気づいて男は近づく。それを見て、ロイは目を見開いた。それはオスティアの密偵が持つ特別なペンダントである。

「君はオスティアの者か！」

「あ、……な……た……さまは」

「……ロイ」

「!!……フェレ……候……様」

「いったいどうしたんだ」

「と、トリアには……行っちゃ……だ……グフオツ!!」

「大丈夫か！しつかりし」

「無理だ。……死んだよ、こいつは」

吐血して頭(こうべ)を垂れた男になおも呼びかけるロイを、デイクは止めた。

「彼は、トリアの方から来たみたいだな」

「ああ、そんでもつて、トリアは相当……」

そうつぶやきながらおもむろに立ち上がるデイク。

「やべえみたいだなっ!!」

そして跳びあがるとすれ違いざまに人影を斬った。斬られた人影は倒れるとともに白い砂となって崩れ落ちた。来た方向から、剣と剣がぶつかり合う音がした。

「チイツ、気味悪いもんだな。無表情で襲われるって、もんわっ!!」

シードはそう叫びながら剣を振るい、敵を倒す。

「シャニー、ウエンデイ、大丈夫かつ!？」

「ご心配なく、シード様。やっ!!」

ウエンデイはそう返して、槍を敵に突き刺す。

「前はドジふんじやったけど、もう怖くないんだからねえっ!」

そう言つて、シャニーも敵を斬り裂いた。そこにロイとデイークも加わった。

「やはり来たか。なおさらトリアに急がないとな」

「せいじゃ、こいつら片づけたら、さっさと行くとすつか」

謎の集団から受けた突然の夜襲。しかし、個々の力量は比べるべくもなく、敵は次々と砂となつていく。もう少して終わりそうな瞬間、逸るロイの集中が途切れた。

(早くトリアに向かわなければ・・・。待っていてくれ、リリーナ)

「ロイツ!後ろだっ」

シードの叫びに気付いて後ろを振り返った時、すでに刺客が短剣をロイの喉元を狙っていた。

(しまった、後ろを・・・)

「レイズっ!!」

誰もがロイの死を覚悟した瞬間、誰かの声が森の奥から響き渡り、声のした方角から青白い閃光が飛んできた。それは刺客を捉えると、雷にも似た音を立てて刺客の身体にまとわりつく。電撃から解放された刺客は、黒焦げとなった後砂になった。

「いやあ危機一髪でしたねえ」

そんな軽い感じで声をかけてきた男に、最初に気付いたのはシャニーだった。

「ヒュウさん?なんでこんなところにいるの?」

「おお、シャニーちゃん。イリアの婆ちゃんちは居心地が悪くてさ。修行も兼ねて放浪の旅だよ」

そう言つて紫の長髪をした魔導士は笑った。そしてヒュウはロイ

の前で跪いた。

「お久しぶりですロイ様。すっかり侯爵の顔ですね」

「ヒュウ、ありがとう。おかげで助かった。それにしてもこんなところで会うなんてね」

「しかし、こいつらは一体……。それにロイ様こそ、こんな夜更けになんでトリアなんかにいるんですか？」

事情の知らないヒュウに、ロイはことをすべて打ち明けた。

「リリーナ様がねえ……」

「いるかどうかは分からないが、今はとにかくトリア候に会わなきゃいけない。それでここにいるんだ」

「なるほどねえ。なんなら俺もご一緒していいっすかね」

「え？でも……」

「いや実は、ちよつと路銀が尽きちゃつて。傭兵として就職活動中だったんでね」

「あんたねえ……。この非常時にどういう理由なのよ」

頭をかくヒュウにシャニーはあきれれる。だが、シードは二つ返事だった。

「いいだろう。ロイ。彼にも来てもらおうか。リリーナを拉致したのが魔導士である以上、こつちもないに越したことはない」

「そうだな。……危険かもしれないが来てくれないか。礼金もそれなりに出すよ」

「昔お世話になった人を助けに行くんだ。格安で大丈夫っすからね」

かくして、ヒュウを加えた一行は、一路トリア城へ向かった。

魔導士ラストール

襲撃を退け、かつての戦友だった魔導師ヒュウも加えた一行は、太陽が中天に昇った頃にトリア城下に到着した。そこでロイ達が見たものは、トリアの惨めな姿だった。人影はほとんどなく、露店も出ていない。そして家々の扉や窓は固く閉ざされている。まるで街一つが死んでしまったような光景に、ウエンディは絶句した。

「これが・・・トリアの今。信じられません！二月ほど前、リリーナ様とレノス様を見舞った時は露店が並び、人々が行き交うほど賑わっていたのに・・・」

「どういう連中がやったかは知らんが、まさか街の人間まで巻き込んでいるとはな」

「ひどい・・・。どうしてこんな」

デイクとシャニーも、それぞれに小さく怒りを込めながらつぶやく。

「いや、街の人は無事さ」

そこにヒュウが二人の言葉を否定する発言をする。そしてそれに同調していたのはロイだ。

「・・・魔力のない僕でも、なんとなくわかる。ヒュウ、これはまさか「察しがいっすねロイ様。こりや魔法の仕業さ、それもえげつないくらいとびつきりのな」

ヒュウの態度に、ただ事ではないと感じたシードが聞く。

「どういうことだ。魔法で人だけが一扫されたって言うのか？」

「そうじゃないんですよ。これは『時間を止めてる』んですよ」

「時間を・・・止めるだど？そんな芸当、できる魔導士なんているのか？」

「どうっすかね。まあ、巷じゃ『山の隠者』なんて呼ばれてるニイメばあちゃんですら、足元にすら及ばねえぐらいのすげえ奴ならね。確証は持てないですけど・・・どう考えてもこれは魔法の仕業っすよ。魔導士の端くれの俺が・・・ハンパなく気持ち悪くなるぐらいのね」

よく見てみると、ヒュウの顔色はあまりよくない。魔力の影響だろ

うか。全員がそう考えた瞬間、どこからともなく声がした。

『さすがにするどい。お察しのとおりですよ』

そして一同の前に大きな魔方陣が現れる。

光が収まると、そこには一人の男が立っていた。ほら貝のような三角帽をかぶった長髪の優男。見るからに魔導士と言える男は、丁寧な会釈の後口を開いた。

「お初にお目にかかります。私（わたくし）、トリア候の執事を勤めまするラストールと申します。お見知りおきを」

「執事ね……。かしこまったしやべり方はそうだが、魔法陣から現れるつうのは、なかなか凝りすぎなんじゃねえか」

ただならぬ気配を感じたシードは、ひきつった笑みを浮かべる。

「そう警戒なさらずとも。しかし、そちらの魔導士殿とロイ様がお察しの通り、この街の時を私が止めておりますので、必要かもしれまん」

あつさりと自分の仕業であると言いきったラストールに、全員が身構える。対してラストールは「そう警戒しないで下さい」と笑みを浮かべて手をひらひらさせた。

「私はロイ様に御用があるのです。主レノスより、ロイ様をお迎えして参れと」

そういったラストールは、自然な仕草でロイを指さす。一瞬瞬いたかと思うと、次の瞬間、ロイは白い光に包まれていく。一同が戸惑う中でラストールが指を鳴らすと、白い光は強く瞬いた後、消えた。そしてそこにロイはいなかった。

「貴様！ロイに何をした！」

すぐさま、シードが怒りをあらわにして剣を抜き、斬りかかる。それをラストールはジャンプでかわすと、そのまま宙に浮いた。

「血気盛んで結構です、ラウス候。しかし、いきなり斬りつけるとは、粗暴が過ぎますよ」

そしてラストールはまたも指を鳴らす。すると、地面から次々と兵士がシードたちを取り囲むように「生えて」きた。白亜の肌に金色の瞳をした例の刺客たちである。

「さて、主はしばらく手を離せません。ロイ様の安否を知りたければ、こいつらを片付けて自力で城にお越しく下さい。では失礼」

そう言い残して、ラストールは姿を消した。

「ちっ、ござかしいまねしやがって・・・」

そう吐き捨てて、シードはぐるりと囲む敵をにらむ。恐らく百人近い人数。技量はたかがしれてるが、感情がないためためらいなく攻めてくる連中だ。正直なところ甘く見ても五分五分と言っている。

「むこうはなかなか俺達を買いかつてるようだな、デイク殿」

「そのようだシード様よ。人海戦術でつぶしにきたな」

「へへっ、あたしたちがこれで怯むと思ったら大間違いなんだからね」

そう言つてシヤニーも剣を構える。

「よし。ウエンディはヒュウ殿を守れ。デイク殿とシヤニーは俺と一緒にこいつらを斬り尽くすぞ」

「任せろ」

「オツケー」

「了解しました！」

「んでヒュウ殿。できれば派手めの魔法で援護を頼む。一撃で大勢仕留めてくれ」

「高くつきますよ、まあ任せて下さいって」

「あと一つ。みんな死ぬな。いくぞっ！」

そう告げて、シードたちは戦闘に入った。

(・・・う、・・・)は・・・ど(・・・うっ)

頭痛に耐えながら、リリーナは意識を取り戻した。朦朧（もうろう）としながら周りを見渡すが、真っ暗でよくわからない。手掛かりを探ろうと、リリーナは腕を動かそうとした。しかし……（う、動けない……？）

右腕、あるいは左腕を動かそうとするが、リリーナの両腕は左右に広げられたまま微動だにしない。脚も同様に肩幅よりも広く開脚した状態から動けない。暗闇の中でリリーナが得た情報は、自分が今大の字の状態で動けなくなっていることだけだった。どうすればいいか考えを巡らせていると、急に周りが眩しくなった。

「気づいたかい。リリーナ」

目をつむっていると、聞き覚えのある声があった。眩しさに目が馴れてきたため、ゆっくりと瞼を開けると、見慣れた場所によく見知った人物が立っていた。

「レノス……様」

「ずいぶん眠っていたようだ。寝顔を見てみると、幼いころの君を思い出したよ」

リリーナは声に構わず周りを見渡した。そこはトリア城の玉座の間であった。そして自分の身体を見てみると、動かない自分の手足は、白亜の物体にめり込んでいる。どういう状態かは凶りにくかったが、とりあえず拘束されていることは間違いない。

「レノス様、ご病気とうかがってましたけど、これがどういうことかの説明はできませんでしょうか」

状況がある程度理解できたことで精神的に落ち着いたりリリーナは、気丈な態度でレノスに聞く。するとレノスは、ふつと微笑んだ。

「……説明か。そんなことはどうでもいいじゃないか。……会いたかったよ、リリーナ」

リリーナの質問を無視するようにつぶやき、レノスは近づいてリリーナの頬に手を当てた。レノスの左手がふれた瞬間、リリーナは言い知れぬ悪寒に襲われ、反射的にレノスから顔をそむけた。

「どうしたんだい、リリーナ。従兄である私から目をそらすなんて」「ひっ……」

顎をつかみ自分のほうに向かせるレノス。リリーナは目があつた瞬間、その異常さに小さく悲鳴を上げた。

本来のレノスはリリーナと同じ紺色の澄んだ瞳をしているが、今の彼の眼は赤黒く淀んでいた。それ以前に、先ほどから自分に触れる彼の手先、掌は氷よりも冷たかった。少なくとも、今レノスは人とは言えなかった。

そこに二つの魔法陣が現れ、二人はそちらに目を向ける。一つからは魔導士ラストールが、もう一つはうつぶせに倒れるロイが姿を現した。

「レノス様。ロイ様をお連れしました」

「ああ。ご苦労だった」

「う……。今の、光はいつたい……」

「ロイっ！」

「えっ……。リリーナ、大丈夫か！」

朦朧とした意識の中、幼なじみの呼びかけに覚醒したロイは、立ち上がって安否を尋ねる。ただ、無事とは言いにくい状況であることはすぐに分かったが。

「ロイ殿か。久しいな。少々手荒だったが、許してほしい」

「……レノス殿。これは一体……」

「君をここに招いたのはね、うん。君に会いたかったからなんだよ」

「街も、人も、死んだように静かになっている。レノス殿、いったい何があつたというのです」

「君とリリーナは恋仲だそうだねえ。まいったな、僕も彼女には恋心があつたんだ」

「レノス殿？」

ロイは一瞬寒気がした。いくら質問しても、レノスとは会話が成立していない。よく見るとひどく淀んだ眼をしており、口元からはよだれも垂れだしている。

「ロイ、気をつけて！今、レノス様は何か魔法のようなものをかけられてるわ。ウツ!!」

リリーナがロイに向かってしゃべりだすと、レノスは突然彼女の首

をわしづかみにした。

「・・・静かにしなさいリリーナ。私は今大事な話をしているのだよ」

「ウ、グツ・・・カハツ」

「レノス殿ー」

苦しみもだえるリリーナを見て、ロイは血相を変えてレノスの手をつかむ。だが、ロイはそこでレノスの変貌におののいた。

(何だ、この腕力・・・)

「じゃまをするぬあぁっ!!!」

「ぐあっー!」

反対側の手でレノスはロイを振り放う。その瞬間、ロイは壁まで弾き飛ばされた。

「リリーナは私の物だロイ。私とリリーナの邪魔をすルトイウノナラ、ヨウシヤハセンゾ!!!」

次第にレノスの表情は表面し、赤黒く淀んでいた瞳は、不気味な深紅の輝きを放ち、禍々しい槍を手にロイに向かって歩き出す。そこにいたレノスは、二人が知るレノスではなかった。

(いったいどうしたんだレノス殿は。さっきの力といい、まるで何かが宿っているようだ)

(レノス様は間違いなく操られてる・・・どうすればいいの?)

その傍らで、ラストールがほくそ笑んでいた。

「ふふふ。では、レノス様。その男を殺しなさい」

人を裏切りし人

「レノス殿、どうしたんですか！僕がわかりませんか！」

「・・・ジャマナヤツハシマツスル」

ロイの呼び掛けに、レノスはまるで反応を見せない。そして槍を構えて斬りかかった。

(くっ)

素早くそれをかわすロイは、この一撃で腹をくくった。

(今のレノス殿は正気じゃない。第一、今の槍さばき一つとっても、このままではこっちがやられる。やるしかない！)

間合いを取り、体勢を立て直したロイは、レイピアを腰から抜いて構えた。

(腕の腱か足首を斬って、なんとか動きを止めれば・・・)

突き出してくるレノスの槍をさばきながら、ロイはスキを窺うがなかなかそれがない。レノスの動きは明らかに武芸に秀でたものなそれだ。

「ドウシタ、マルデテゴタエタガナイ。リリーナトワタシノジカンヲジャマシテオイテソノテイドカ？」

禍々しい口調で話すレノス。だがロイもまたレノスの攻撃を凌いでいた。

(レノス様・・・ロイ・・・)

十合、二十合と続く立ち合いに、リリーナはただ見守るしかできない。それでもなんとかロイを援護できないかと、レノスの動きを注視した。

「おやおや、そんなにレノス様が気になりますか？」

「あなた、レノス様に何をしたの」

話し掛けてきたラストールに、リリーナは睨み付けながら問いただす。

「特別何も。彼を私の傀儡(かいらい)と化させる術を施したまで」

「あなた、一体何者なの。このリキアで一体何をしようとしているの!？」

毅然とした態度で聞いてくるリリーナに、ラストールは嘲笑を浮かべながら答えた。

「何者か、ですか。ふむ。言うなれば『人を裏切りし民』と」

「人を・・・裏切りし？」

理解できないリリーナに対して、ラストールはとつとつと語り始めた。

「あなたは『人竜戦役』をご存知ですか？」

「千年前、エレブ大陸の覇権をかけて人と竜が戦った・・・」

「そう。あなたはその時に、竜に与した人がいたことをご存知ですか？」

初めて聞いた事実に、リリーナは目を見開き啞然とする。その反応に満足げなラストールは続けた。

「我々は竜を利用し、互いが疲弊した暁に大陸の覇権を横からさらおうとたくらんだ一族の末裔なのです。まあ、末裔と言っても、百数年はこの世界にいますがね。忌々しい八神将の活躍により、竜が敗れて大陸から姿を消す折、目論見がばれてしまいましたね。我々もまたこの大陸を追われました」

「それが『人を裏切りし民』ということね」

「ええ。そして千年たった今、我々はもう一度この大陸を奪わんがために力を蓄え、そして今、機が熟したのです。ベルンが動乱を起こしてくれたおかげで大陸は今混迷の時にある。この状況下で反乱をけしかければ、再び我らの時が来るでしょう」

「それじゃあ、ヘスマン殿もあなたたちの」

「おっと、おしゃべりが過ぎましたか。・・・まあ、この戦いを見届けからにしましょう。お静かに」

ラストールがそう言つて、リリーナを拘束する物体に触れたとき、それから液体のようなものがうごめき、リリーナの口許にまとわりつく。轡のようになって固まった。

「ウグウ・・・」

「私の仕掛け、そしてそれを解く方法に恐らくあなたは気づかれるでしょう。助言などされては興ざめというものですよ。それに私はあ

なたからいただきたいものがあります」

「?・・・!」

ラストールの言葉が理解できなかつたりリーナだが、急に異常なまでの脱力感を感じる。自分の身体から魔力が吸い出されていく感覚があった。

「あなたを捕えているこれは、吸魔蠟(きゆうまろう)と言いました、魔力に反応し、それに絡みつき、それを宿す器から吸い取る性質があるのです。覚えていませんか?あなたを捕えた少女が出したあれもそうなのです」

言われてりリーナは、拉致された瞬間を振り返る。確かにあの時感じた感覚と同じだ。強烈な脱力感に襲われるりリーナは次第に意識を失っていった。

「おやおや。一眠りされますか。目が覚めたとき、もつとも愛しい口イ様と、もつとも親しいレノス様の、どちらが生き残っていますかねえ」

「くっ、強い」

ロイはいったん間合いを取り、レイピアを構えなおす。そしてレノスの動きを整理する。

(とにかく、まずレノス殿の気を乱さなければ。どこかでもいい。どこかに傷を負わせられれば・・・しかし)

「ろい。オマエヲ・・・タオス。シネツ!!」

レノスは槍を振り回してロイに狙いを定め、槍を突き出してきた。もうロイは迷いを捨てた。

(仕方ない・・・。許してくれ、レノス殿!)

「うおおおおおっ!!」

レノスの突き出してきた槍を半身になってかわすと、そのままレイピアの先端を突き出す。そして、レノスの右目を捉え、斬り裂いた。

「ギャアアアアアアッ!!!」

右目から勢いよく血が吹き出し、叫ぶレノス。

「オ・・・オノレエ・・・」

右目を抑えながら振り返るレノス。血を右目から滴らせているが、戦意は萎えていない。だが、右目を失ったことで明らかに動きが変わった。痛む上に視界が減ったレノスは狙いを定めることができず、適当に振り回すだけになる。ロイはもう一度斬りかかり、今度は左脚を貫く。

「グアアアアア．．．」

レイピアを引き抜いた傷口からも血が噴き出している。急所は外しているが、とても立てる状態にない。

(これで動きを止めた！)

そう決めてロイは振り返り、ラストールとリリーナのほうを見る。

「リリーナを返してもらうぞ。ラストールっ!!」

そう言つてロイはラストールに肉薄する。その時、ラストールは笑みを浮かべた。

「どうやら、もうトリア候は使い物にならないようだ。ならば、私が操るとしよう」

そうつぶやいて、手をロイの方にはかざして、手招きするような動きを見せた。

「いくぞっーラストー．．ぐはあっ!!」

レイピアの先端が、ラストールの鼻先を捉える寸前、ロイの動きが止まる。ラストールの魔法によつて完全な人形となったレノスに背後から脇腹を貫かれたからである。一気に脱力し倒れこむロイ。右手からレイピアが落ちた。

その音で覚醒したりリーナは、一瞬啞然とする。

それはレノスから槍を引き抜かれ、脇腹から鮮血を吹きだし、吐血して膝から崩れ落ちるロイの姿だった。

それを現実と理解したとき、**!!絶叫した。**

「嫌ああああああああああつ!!!」

もちろん、口をふさがれているので発声はしていないが、宝石のような澄んだ瞳からは、とめどなく涙が流れ出た。

「くくく。『若き獅子』も命運尽きた。さあレノス様。とどめを」

「．．．．．」

ラストールに言われるがままに歩き出し、ロイの真上に立つと、その首に槍の穂先を合わせる。そのまま下に突き下ろせば、ロイの首は間違いなく切断される。

(レノス様っ！やめてっ！ロイを殺さないでっ！正気に戻ってっ！……レノスお兄ちゃああんっ!!)

リリーナは心の中でそう叫び続けた。

その時である。レノスの禍々しかった瞳に、変化があった。

(私は……一体どうしたんだ？なぜ右目が痛い？なぜ脚が痛む？これは一体どうしたんだ？)

ぼんやりとした意識の中、レノスは無意識にリリーナを見た。

(リリーナ……？なぜ……ここに……それに、ロイ殿？……私……やったのか……うううう……)

レノスの表情が次第に歪んでいく。目の前の現実を理解できず意識が混濁している。

「ゴレワ……ドウイウ……ゴドダ……グ、ガガガ、うぐああつ」

「おや？正気に戻りつつありますか」

ラストールの言うように、レノスの瞳は次第に元に戻っていく。

「仕方ありませんな。マインドノイマ」

開いた手を握り、そうつぶやくラストール。するとレノスが人間とは思えない叫び声をあげ、頭を抱えながら悶絶した。

「ううっ……くうっ」

その叫びに意識を取り戻したロイは、痛みにこらえながら立ち上がる。急所を外していたことが幸いしたか、ロイはまだ命をつないでいた。

「れ、レノス殿……」

「グガアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!」

レノスはそのままロイに突っ込んでくる。ロイは再びレイピアを構えようとするが、全身の痛みと出血で力がまともに入らない。立つだけでいっぱいだった。

(もう、どうにもならないのか……レノス殿に戻すことは……)

歯を食いしばるロイ。襲い掛かるレノス。そこでレノスの動きが止まった。何が起こったかわからないロイは、レノスの眼を見る。残った左目からは、透き通った水晶のような涙が流れだしていた。その瞳は、ロイに語りかけていた。

（ロイ殿・・・助けてくれ・・・苦しい・・・）

「れ、レノス殿！僕が分かるんですか？」

（あ、頭が割れるように痛い・・・苦しい・・・助けてくれ・・・）
「レノス殿、気をしっかり・・・ぐうっ!!」

レノスを励ますロイだったが、脇腹の激痛に顔をゆがめ、ロイも膝をつく。苦悶の表情を浮かべる。それを見たレノスの脳裏にこれまでの記憶がよみがえってきた。

「私は・・・一体何をしていたんだ」

レノスの決意

「ふう。山賊たちには毎度頭を悩まされるな」

時系列は諸侯会議においてリリーナたちが山賊たちの失踪を取り上げる五日ほど前のことだった。

トリア城の自室にて、レノスは部下からの報告を受けて頭を悩ませていた。

「しかし、我々も情けない。山賊相手に後れを取っては、同盟軍の一員として剣を並べることなどできはしない。何とか騎士団を強化しなければな」

「はい。．．．しかし、わがトリアにはこれ以上兵を抱える余力も新たに傭兵を雇う資金ありません。リリーナ様に、兵の借用を申し出られては？」

「そうしたいが．．．オステイアもオステイアで立て直しの最中だ。それに、リリーナはいろいろ気をもんでいる。いくら従兄でも．．．いや、従兄だからこそ迷惑はかけられん」

執事の進言をやんわりと退けながら、レノスは頭を抱えた。

「くそ。山賊など、誰かが一掃してやくれまいかな」

「ならば私がいたしましょうか？」

不意にどこからか声がした。レノスと執事は部屋を見渡すが気配はなかった。しかし、二人の目の前に急に魔法陣が現れ、その中から魔導士が一人現れた。

「山賊の一掃。良ければ我らにお任せできませぬか？」

現れた男は、唐突にそう語りかけた。

「突然現れた怪しい人間にか？まずは自分が何者か改めるべきではないのかな？魔導士殿」

「おお、これはもつとも。初めましてレノス様。私、魔導士のラストールと申します。以後お見知りおきを」

「で、どうできるのだ？いくら貴殿が力があつたとしても．．．」

「いえいえ。私もそれ相応の策があります。どうですか？一つ『かけ』をいたしませぬか？」

ラストールの提案に、レノスは執事に意見を求める。だが、執事もどうしていいかわからず、主に首をかしげて見せる。話だけでも聞く。そう考えたレノスはかけの内容を聞いた。

「次の諸侯会議までに、山賊を相当して御覧に入れます」

「次の諸侯会議？バカな。たった五日でトリア近辺の・・・」

「いえいえ。リキアから山賊を消して御覧にいと申しているのです」

魔導師の提案にレノスは開いた口が塞がらない。リキア一帯を端から端までめぐるとすればどう迅速に進んでも二十日はかかる。この上賊をすべて駆逐するというのだから、最低でも二カ月はかかる。魔導師の条件は、レノスにとって荒唐無稽もはなはだしかった。

「帰愚弄するのも大概にされよ魔導師殿。そんなことなどできるわけではない！お引き取り願おう」

「愚弄・・・ですか。なれば乗ってもよろしいのでは？」
「何？」

「我々はあなたからすれば絶対に不可能なことをしようとしているのです。つまり、あなた様には絶対的に優位なかけ。退屈しのぎにでも考えればよろしいのです。できなかつた場合の罰をも私は受けるつもりです」

「・・・どんな罰でもか？」

「ええ。極刑であっても構いません」

「三日に縮めても、可能か？」

「十分に」

レノスは判断に迷った。ここまで不利な条件を突き付けられながら笑みを浮かべるとは、それ相応の策があると言える。しかし、賊を掃討してくれるというのは、彼にとっては利のある話。ここでレノスに魔が差した。

「・・・いいだろう。三日のうちにリキアの盗賊をすべて掃討せよ。できなければ貴殿の命を貰い受ける」

「かしこまりました。では」

再び魔法陣が浮き上がると、ラストールはそれに包まれて消えて

いった。

「よいのですか・・・？」

「ふん。放っておけ。自分の技をひけらかしたいだけの輩だ」

三日たっても魔導士は現れなかった。

「レノス様、三日前のこと、覚えておいで」

「ああ、あの魔導士か。もう捨て置け。最近は賊の情報もないしな。復興の遅れを少しでも取り戻さねばな」

「しかし、トリアから賊がいけないという事は・・・」

「さすがにリキア全土はあり得まい。だが、少しでもわが領土の治安が良くなればよい。気にすることはないだろう」

そう言ってレノスは気にも留めないまま諸侯会議の時を迎える。その議題で賊の失踪がリリーナから説明されると、レノスは一気に血の気が引いた。

（オスティアだけでなく、ラウスやカートレーなども？リキア全土ではないか・・・）

不意にラストールの言葉がよぎる。

「三日のうちにリキアから賊を掃討して見せましょう」

それが事実と知ったとき、レノスは青ざめた。この様子をロイが不審に思っていることなどは気づきはしなかったが。居ても立ってもいられず、レノスはそのまま病欠を理由にトリアに戻った。そこで彼の眼に飛び込んできたのは、静まり返った街と、人気のなくなった自分の城だった。錯乱する中で自室に飛び込むと、血まみれの執事が倒れていた。

「じいっ！どうした、しつかりしろ！」

すぐさま抱え上げるが、既に執事はこと切れている。状況を把握できないレノスの前に、ラストールが立ちはだかった。

「さてレノス様。かけは私の勝ちでございます。報酬として」

「待て！貴様、民とじい、それに城の兵に何をした！」

「ご安心を民には何もしておりませぬ。ただ、城にいたものは少々うっとうしかったので、全て始末させていただきますでしたが」

「!!」

「さて、あなたには我々の力になってもらいましょう。・・・マインド
ンイマ」

ラストールがそうつぶやいて手をかざしてから、レノスの記憶は途
切れた。

そしてレノスの脳裏には、ラストールに操られてからの光景がフ
ラッシュユバツクした。

(わ、私は・・・なんということを・・・)

「レノス殿！聞こえますかっ！僕です！フェレのロイですっ！」

「ろ・・・ロイ殿か」

「!!・・・レノス殿」

「う、私は・・・ううウ・グ・ガアアツ!!」

一瞬意識が戻りそうになったレノスだが、再び我を忘れてロイに襲
い掛かる。

「くっ・・・もう少しだったのに」

(ロイ殿、私の声が聞こえるか！)

「レノス殿!？」

歯軋りするロイの脳裏に語りかける声がある。その主は目の前に
いるレノスだった。

(う・・・ロイ殿。私はもうだめだ。身体がまるでいうことんきかん。
魂以外はもう私は私ではない)

「レノス殿、気をしっかり持ってください。必ずお助けしますから」

(そうか・・・ならば、ここで私を殺してくれ!)

「なっ!？」

思いもよらぬ要求に、ロイは一瞬棒立ちになる。すぐさまレノスの
槍が、今度は左肩を掠めた。肩当ては砕けたが、ロイ自身は傷を負わ
ずにすんだ。

「レノス殿！何を言われるのです！諦めてはなりません」

(もう私の身体は取り返しようがない。私には分かるのだ。もう・・・
もとに戻ることは叶わないと)

「しかし！」

(頼むロイ殿！これ以上私を苦しめないでほしい。それに・・・妹のよ

うに可愛がったりリーナの、想い人である貴殿をこれ以上・・・ウグアッ!)

大上段から降り下ろす槍を、ロイは横っ飛びでかわす。ここでロイは大きく間合いをとった。

「レノス殿・・・もはや他に道は・・・」

(頼む!もう、私のココロハゲン界だ。私はまだ、ワタシデあるうちニ・・・)

「レノス殿・・・」

レノスの決死の懇願に逡巡するロイ。その時、レノスと目が合う。生きているレノスの瞳からは、涙が流れ落ちていた。その涙に、ロイは腹をくくった。

(レノス殿・・・分かりました。苦しむことなく・・・仕留めてみせます)

顔を伏せ、ロイはレイピアを眼前に掲げる騎士の儀式をした後、切っ先をレノスに向けて制止した。一点の曇りもない必殺の構えだ。

「ナンノツモリダ。(ロイ殿、それでよい・・・)キサマノソノクビ、(しくじらないでくれ)モラツタアアッ!!」

二つの声が被さるさなか、レノスはとどめを刺さんと肉薄してきた。そしてロイもまた、レノスに向かって突進した。

(許してくれ!レノス殿・・・!)

二人の身体が重なり、レノスは大きく吐血する。ロイのレイピアはレノスの心臓を、寸分狂いなく貫いた。ロイの頬には、浴びせられたレノスの赤黒い鮮血と、これが唯一無二の手段となり、レノスを助けられなかったことを悔やむ、ロイの涙が流れ落ちた。

その瞬間はリリーナも見ていた。

「レ・・・ノス・・・い、嫌ああああっ!!」

「おやおや、愛しい者が生き残りましたか。魔力も大分頂けましたし、最期の別れを告げなさい」

絶望するリリーナにそうささやいて、ラストールはリリーナの拘束を解いた。床に投げ出されたリリーナは、鉛のように重くなった身体を、氣力を振り絞って這うようにレノスに近づいていく。

ロイはレイピアをレノスから引き抜くと、丁寧にレノスを床に寝かせた。

「レノス殿・・・許してください。僕には、こうすることしか・・・」
「よいのだ、ロイ殿。これで・・・。リリーナを、悲しませるようまねは・・・もうしたくなかった」

懸命に涙をこらえるロイに、レノスは優しく語りかける。

「レノス様・・・」

そこにリリーナもやって来る。懸命に立ち上がって近づいてきたリリーナに見せたレノスの表情は、幼き日に見た従兄の優しい微笑みだった。

「すまないな・・・リリーナ。私が・・・浅は・・・か、だった・・・ばかりにゴブっゴブっ」

咳き込むたびに、レノスの口から赤黒い鮮血が吐き出される。それに死期を悟ったリリーナは、レノスの手を取り握りしめる。血塗れでべっとりとしているが、そこからは人の温もりを確かに感じた。そのまま顔を伏せてむせび泣く。

「ロイ殿・・・リリーナ・・・どうかトリアを、リキアの未来を・・・頼む。父上と・・・ヘク・・・トル様に・・・謝りに・・・」

そう呟いてきり、レノスは動かなくなった。

フエレからの報せ

「くそつたれ・・・一体いつになったら、ケリがつくんだよ」

苛立ちながら、シードは銀の剣で刺客の首を刎ねる。だが、目の前の敵は自分が、あるいは仲間がどうやられようと、表情をほとんど変えることなく矢継ぎ早に襲ってくる。

「おいデイクよ、まだいけるか？」

「そりゃこつちの台詞だシード。ただ、武器はそろそろやべえかもな」
表情こそ笑みを浮かべてみせるが、デイクが操る鋼の大剣は刃こぼれだけでなく、刀身にも小さなヒビが目立つ。足元には、見る影もなくなった壊れたトマホークが転がっていた。

「シード様、あたしたちも、まだいけるよ・・・ゼエつゼエつ」

「槍も斧ももう使い物にならない・・・しかし、リリーナ様を助け出すまで、私は倒れるわけにはいかない・・・」

肩で息をしながらシャニーも強がってみせ、ウエンデイも折れそうな気力をもう一度振り絞る。

「はあっ、はあっ、俺ももうひと踏ん張りといくぜ。せつかく手に入れた異国の魔導書だが、こうなりや大盤振る舞いだ」

ニヤリと笑って、ヒュウは再び魔導書を開いた。

「くらいな、マグラスター！」

ヒュウが魔法を唱えると、大きな火の玉が上空に舞い上がり、ある程度上昇したところでそれは八方に弾けた。エルファイアー並の火球が敵に次々と降り注いだ。

「うらあっ！」

「でえいっ！」

そしてシードとデイクが討ち漏らした敵を斬りふせていく。ヒュウが操る魔法は、威力が高いが発動までにやや時間がかかるもの。それを連発できているのは、ウエンデイとシャニーの警護があつてのものだ。

「レイズっ！」

続いてヒュウは青白い閃光を連射。射抜かれた敵は次々と電流を

帯びて崩れていく。

効率よく撃退し続けたところで、シャニーが一つの異変に気づく。「あれ？ヒュウさん。さっきのマグなんとかって魔法は、もう撃たないの・・・って、あ！」

「ハハ。残念シャニーちゃん。マグラスターもレイズも今ので弾切れ。魔導書は燃え尽きちゃったよ」

そう言うヒュウの足元には、灰になった魔導書の成れの果てが落ちていた。

「あと残ってるのはこのフィンブルだけだ。これが終わっちゃったら、俺はほぼ丸腰だ」

一方で・・・

「なっ!?!」

「デイク!?!」

「つくそが!」

もう何人斬ったかわからない。そんな中で遂に大剣が真つ二つに割れた。シードは気遣うが、デイクは強引に殴り付けて敵を倒した。

「そろそろ・・・マジでやべえかもな」

「先にあんたのが折れたか。ま、俺もそろそろ限界だな」

武器を失い、次第に追い詰められるシードたち。もし城内での戦いが長引いていけば、彼らの命運はここで尽きていただろう。

そのころの城内。玉座の間。

部屋の中央で安らかに眠るシードの傍らで、いつまでもその手を握るリリーナに、ロイはただ頭をたれていた。

「リリーナ・・・すまない。僕は、ヘクトル様に続いて、二度もリリーナの大切な人を守れなかった・・・本当に、ごめん」

「・・・謝らないで、ロイ。だって、レノス様・・・こんなに安らかに・・・う、う・・・」

レノスを救い出せなかったことを悔やみ続けるロイと、その死を懸命にこらえてロイを励ますリリーナ。その様子がラストロールには滑稽に映った。

「フフ、クククク。リキアに混乱を招いた人間を仕留めたというのに、なぜいつまでも悔いているのですか？自業自得の男を思いやるなど、なるほど。これでは盟主としてだらしないう言う他ない」

「ラストール、貴様・・・」

嘲笑を浮かべるラストールに、ロイは生涯見せたことのないような、鬼の形相を向けて立ち上がる。

「ククク。あなた方がここでしんでくれればよかったです、最低限のことができたのでよしとしましょう。リリーナ様の魔力を大量に含ん吸魔蠟とともに、私は退散するといたしましょう」

「待て！逃がすものかっ！」

裂帛の気迫でロイは猛然とラストールに迫る。だがレイピアの切っ先が触れる寸前、ラストールは姿かたちを消した。

『フフフ、ロイ様。あなた様の絶望はこれからなのですよ』

最後にそう捨て台詞を残して。次の瞬間、トリア城が轟音とともに激しく揺れだした。

「？」

そのころの城の外。万事休したかに思われたシードたちだったが、襲い掛かってきた兵士たちの動きが止まった。いぶかしんでいるうちに、彼らは次々と崩れ始め、シードたちの周りは砂浜と見間違えうほどの白砂があふれかえっていた。それと同時に、トリア城が崩れだしたのだった。

「な、ロイツ!!」

シードが気づいてそう叫んだときにはもう遅かった。それほど大きくはないトリア城は、あつけないほどに崩落。瞬く間に瓦礫の山と姿を変えたのであった。誰もが最悪の結果を予想した中で、砂塵の中から、人を抱き上げて歩く人の姿があつた。白煙が晴れ、その顔が現れたとき、誰もが安堵の表情を浮かべた。

「ロイ、大丈夫かー」

「ご無事でしたか、リリーナ様！」

すぐさまシードとウェンデイが駆け出し二人を迎える。

「みんな。心配かけてすまない。リリーナは魔力を吸い出されているが、命に別状はない・・・」

「そうか。それで、トリア侯爵は」

シードの質問に、ロイは顔を伏せた。そして静かに首を横に振った。その心情を察したシードはあえて問い詰めはしなかった。そのときである。

「おい、東の空から何か飛んでくるぞ!」

そう言ったデイークが指差した方向を全員が見る。それが何かを認知できたときに、真つ先に叫んだのはシャニーだった。

「あれは・・・お姉ちゃん!」

飛んできたのは一騎の天馬騎士だった。天馬はところどころ傷を負っており、乗っている騎士も、背中に矢を受けたまま、息も絶え絶えに飛んでくる。やがて一同のもとに崩れ落ちるように着陸した。

「テイトお姉ちゃん!!どうしたの!?!大丈夫っ!?!」

「テイトっ!?!どうしたんだ、何かあったのか?」

シャニーとロイはあわてて駆け寄り、テイトを抱えあげる。だが、うつろな彼女の目に危機感を感じたりリーナがヒュウに聞いた。

「ねえ、杖何か持ってない?」

「え、リライブの杖ならありますが、大丈夫ですか?俺がやりましょうか?」

「大丈夫。杖で癒すくらいなら」

リリーナはそういつてヒュウからリライブの杖を受け取ると、テイトにそれをかざす。今にも死に絶えそうだったテイトの顔色に生気が戻っていった。

「・・・うっ」

「お姉ちゃん、シャニーだよ。わかる?」

「・・・シャニー?あなた」

「良かったあ・・・」

姉が意識を取り戻したことに安心して、シャニーは脱力して座りこむ。そしてロイはテイトに聞いた。

「テイト。フェレでアレンと一緒に暮らしている君が、どうしてここ

にいるんだ。それも、こんなに傷だらけになって。…まさか！フェレで何かあったのか!？」

天馬騎士のテイトは、シャニーの姉であり、フェレ騎士団の団長であるアレン將軍とは恋仲にある。その関係もあって、今はフェレにて天馬騎士団の一個小隊を率いている。

ロイに問い質されたテイトは、落ち着きながらも切羽詰まった表情で訴えた。

「ロイ様、驚かれるかもしれませんが…アラフェン・トスカナ・カートレーの連合軍が、…フェレを攻撃してきました!」

「何だどっ!!」

ロイが声をあげるよりも早く、シードが驚きの声をあげ、リリーナも手を口に当てて驚愕している。

「…どういうことだ？あのオスティアでの襲撃、その晩餐会には三人ともいた。あれからまだ三日しか経っていない。一番近いカートレーから仕掛けたとしても、早すぎる。まさか、諸侯の合図もなしにか」

戸惑うロイはアラフェン侯爵たちの行動を予測するが、テイトは否定する情報を伝える。

「いえ。部下に偵察させたところ、敵の本陣にはアラフェン侯ヘスマン、トスカナ侯ボスカー、カートレー候ジバンツの姿もあるということです」

「とはいえ、このままほうつては置けんな。ロイ、ラウスに來い。そこである程度立て直さないか」

シードの提案に、ロイは賛同する。そこにリリーナも加わった。

「待って二人とも。私も行くわ」

「でもリリーナ、君にはオスティアが」

ロイが止める前にリリーナが強く出た。

「反乱が起きてしまった以上、私にも責任があるわ。エリウッドおじ様には、動乱で私に代わって盟主としてリキアをまとめてくれた。その借りを今返したいの」

「リリーナ・・・」

レノスを失った悲しみを押し込めて、凜とした瞳を向けるリリーナに、ロイは説得をやめた。それを合図にシードは指示を出す。

「テイト、といったか。お前はロイを。そしてシャニーはリリーナをラウスに連れて行け。マーカスにこの護符を渡せばラウス軍を意のままにできる」

「わかった。シード、君はどうするんだい？」

「デイークとウエンデイをつれてオスティアに行き、少し兵を借りてから戻る。リリーナ、お前の意を部下連中に伝えておくぞ」

「ええ、お願いするわ。ごめんなさい。使い走りみたいなまねをさせて」

表情を曇らせるリリーナに、シードは鼻で笑って返した。

「気にすることはない。エリウッド様に対してのご恩返しのお気はよくわかるからな」

そう言ってからリリーナに近づいて耳元でささやく。

「大事な人間と、離れる時間はもういらんだろ？」

「!!」

そのささやくにリリーナが赤面したことを気に留めず、シードはオスティアに馬を走らせ、二頭の天馬もラウスに向けて空を駆った。

揺れ動く火種

「ん？何か来るぞ？」

「あれは・・・天馬か？トリアのほうからだが」

ラウス城の見張り台。そこで騎士たちが北西から飛来する天馬に気づいた。

「敵か？」

「わからん。とにかくルカ隊長の指示を仰ごう」

そう言った兵士が自分たちの隊長を呼ぶために城内に駆け込む。程なくして部下に案内された黒髪の女騎士が現れた。

「あれがその天馬か。それぞれ二人乗り。・・・男が一人混じっているな」

「はい。いかがでしたでしょうか」

「戦意はなさそう、か・・・よし、ここに降りさせろ。お前はマーカス將軍に報告だ」

ルカの指示により、兵士たちは天馬を城のテラスに誘導、着陸させた。天馬から降りた四人に、ルカが毅然とした態度で言い放った。

「ラウス騎士団第一小隊長、ルカである。貴殿らは何者か！」

「フェレ侯爵ロイト、オスティア侯爵リリーナだ。マーカス將軍にお目通り願いたい」

赤い髪の剣士の言葉に、兵士の誰もが目を見開いてざわつく。それが本当のことだとすれば、リキア同盟の大黒柱が今目の前にいるということになる。ただ、それでもルカは態度を崩さなかった。

「・・・よかろう。念のため武器と魔道書をお預かりしたい。お前たちはこの二人の天馬騎士を見張っている。何か妙な真似をしたら捕らえても構わぬ」

その態度にシャニーがむくれ、テイトがそれをたしなめたのは言うまでもない。

要求どおりマーカスと引き合わせると、ルカはりんごのように真っ赤にした顔でロイトとリリーナに謝罪した。

「申し訳ありませんぬ!!何分、女しか乗らないはずの天馬に男がいたも

ので……。リキア同盟の盟主と我がラウスを支援して頂いているフェレ候に、私はなんて粗相を……」

「ハハハ。気にしないでいいよ、ルカ。君は任務をしつかりこなしたまでだ。なかなか立派な騎士じゃないか、マーカス」

「はい。……しかし、何事にも少々まじめすぎるといえるか、どうにも堅物なところもありまして……」

ルカの振る舞いをむしろほめるロイに、かつての忠臣は苦笑いだ。そしてロイの言葉に、ルカの顔はますます赤くなる。

「これ、ルカよ。もう肩の力を抜け。それでは熟したりんごのようだぞ」

「は、はい！申し訳ありません！」

それでも態度が崩れないルカに、マーカスはやれやれとため息をついてから、真剣な表情でロイを見た。

「ロイ様、実は……」

「わかっている、フェレが攻撃されたのだろうか？テイトから聞いたよ。ラウスには、何か情報が入っていないかい？」

「は、何度か斥候を東に放ち情報を集めたところ、どうも連中はタニスを手中に収めているそうです」

「タニス……ミステイのところか」

ロイが口にしたミステイとは、彼やリリーナ、そしてシードと同じオステイアの学問所での同級生であると同時に、大陸でもっとも広く信仰されているエリミーヌ教の司祭であり、杖の扱いについてリキアで彼女の右に出るものはいない。マリンダという姉がいるが病弱で政務をこなすことが困難なことから、動乱後は彼女が爵位についてタニアを収めている。

「つまり、アラフェン候たちは、フェレを攻める足掛かりとしてタニアを手に入れたということかしら。マーカスさん、ミステイたちは大丈夫かしら？」

「残念ながら、まだそれは確認できておりません。リリーナ様。エリウッド様をはじめ、フェレの様子も斥候を放っておりますが……」
表情を曇らせるマーカスの心中をロイは察する。今はラウス家の

身ではあるが、長らく使えた主の安否がわからない胸中は穏やかではないだろう。

そんな周りの空気を打破しようと、ルカが進言してきた。

「ロイ様、マーカス将軍。こうなれば、私が一個小隊を率いてフェレを見てまいります！」

「馬鹿を言うなルカ！まさかさっきの無礼の侘びとでも言うのではあるまいな」

「それもありますが・・・いつまでもここには何の解決にもなりません。我がラウスはフェレから支援を受けている身、ならばここでその礼を尽くすべきではないでしょうか。それにタニアが敵の手中にあるならば、そこを前線基地としてフェレに援軍をつぎ込みやすくなり、下手をすれば陥落という事態にもなりかねません！」

無茶な案件だったが一理あった。タニアはフェレとカートレーに挟まれるような位置関係にあり、カートレー軍がそこを拠点としている可能性は高い。となればヘスマンらがそこをフェレ攻撃の拠点とすることは火を見るよりも明らか。ルカの言うように、一刻も早くフェレに向かう正当性はあった。

「・・・よし、マーカス。ルカの案を使おう」

「ロイ様、しかしそれはあまりに」

「確かに危険はある。だが彼女の言うように一刻も早くフェレに行く必要もある。僕がその指揮を執る」

「大丈夫です、マーカスさん。私も一緒に行きます。ロイの剣と私の魔法、取り返すことはできなくても乗り込むことぐらいはできるわ」

ルカの意見にロイとリリーナが賛同し、マーカスも腹を決めた。

「・・・わかりました。では、ルカよ。すぐに精鋭を編成し、ロイ様とともにフェレに向かえ！」

「御意！」

形の整った敬礼をし、部屋から駆け出していくルカに、ロイは頼もしきすら覚えた。

「アレンの熱さとランスの律儀さを併せたような騎士だ。シードは良い部下を持ったな」

「この古いぼれにはもったいない限り。シード様とルカがいる限り、ラウスの未来は明るいでしょう」

「私もそう思うわ。私もしつかりしなきゃ・・・」

編成を終えたルカ率いるラウス騎士団は、ロイに率いられてすぐさまフェレに向けて出撃。テイトはロイ達のことを先に伝えるべくフェレへ、シャニーはシードに伝えるべくオステイアに向けてそれぞれ飛翔した。

出撃から二日後、ロイ達はフェレの国境に差し掛かる。

「もうすぐレステン村だ。ルカ、そこで休息をかねて情報を集めるぞ」「はっ。了解しました」

ロイはその近辺にある村で、行軍を停めることにした。一刻も早く故郷にむかいたところだが、つれてきた兵力を考えると、すぐに仕掛けるのは無謀だ。かなりの強行軍で来たために、戦う前には体を休めておきたい。逸る気持ちを抑えての休息だった。

しかし、村を見下ろす丘の頂上に達した時、リリーナがその異常に気づいた。

「え？あれは・・・！ロイツ、村が!!」

後ろに乗るリリーナが指差す方を見ると、ロイにとって信じられない光景が飛び込んできた。

時間を少し巻き戻す。ロイ達が立ち寄ろうとしたレステン村に、リキア同盟軍旗を掲げた一団が訪問した。一団を率いる男は村長を呼びつけた。物々しい雰囲気、村長ら村人たちは戸惑いながら男の前に現れると、男は尊大な態度で命令した。

「村中の食糧と金貨を献上せよ、ですと・・・」

「そうだ！今フェレは戦乱の危機に貧しておる！よって、有事に備えるべく我々はここへ来たのだ！さあ、とつとと始めろ！」

「お、お待ちください。事前に知らせもなくくるとは、これまでのフェレではありませんでしたので・・・急に申されましたも」

「何だと・・・？貴様、事は急を要するのだ！可能な限りでよい！さっさと出せ！」

「し、しかし・・・」

戸惑うばかりの村長に業を煮やした男は、部下のアーチャーに命じて、村長の肩を射抜かせた。

「ぐあっ！」

「村長！」

「ああ、なんてひどい・・・」

うろたえる村人に対して、男は語気を強めていい放った。

「今のは警告だ！我がリキア同盟軍にこれ以上逆らうと言うのなら・・・次は火を放つ！」

「わ、分かりました！すぐに準備します・・・」

すっかり怖じ気づいた村長が、弱々しく頭を下げて青年たちに食糧と軍資金の準備をするよう促した。しかし、村長の息子で、この村の自警団長を務めるアルクが、毅然とした態度で尋ねた。

「失礼ですが隊長殿。貴殿らはフェレの騎士団でしょうか」

「ああ。先日こちらの方面に配属されたばかりだがな」

「では受け渡しの折、『しるし』をお見せ頂きたいのですが」「なに？」

「フェレ地方の騎士団は、私たちから糧食を徴収するときには必ず証である『しるし』を頂くのですが、お持ちですね」

「む・・・」

アルクの問い掛けに、男の態度は変わる。若干ではあるが、間違いなく戸惑っていた。

「お、おう。あの『しるし』・・・な。すまぬ、何分急に来たものだから今手元がないのだ。後日改めてこちらに持ってこさせよう」

「フッフ、それは無理ですよ隊長殿。何故なら、『しるし』なんてはじめからないのですから」

「!?」

アルクの笑みに、男は凶られたことを悟り、うろたえる。一気呵成にアルクは言い返した。

「いくら貴殿がリキア同盟軍であつたとしても、この振る舞いは賊と何ら変わりませぬ。申し訳ないが、お引き取り願いたい!!」

アルクの態度に、男の怒りは頂点に達した。そして思わぬ暴拳に出る。

「おのれえ・・・リキア同盟軍を、侮辱しおつたなあ!その罪、思い知らせてくれる!!者共、ここは反逆者のアジトであると判明したつ!これより反逆者の掃討にかかれ!全てを焼き払い、こやつらは女子供残らず討ち果たし、食糧と金は没収せよつ!!」

一本の火矢が茅葺き屋根の民家に突き刺さり、たちまち火の手が上がる。村は混乱に陥るが、幸運な事に、これをロイ達が目撃したのであつた。

侯爵の力量

時間軸をもとに戻す。

レステン村に急行したロイ達の目の前で、治安のいいフェレでの出来事とは思えぬ光景が広がっていた。燃え盛る民家、逃げ惑う人々、時おり響く悲鳴。そして村中を駆け回る、リキア同盟軍の甲冑姿の騎士たち。

そこでロイの視界に入ったのが、子供を抱き抱えた母親を追いかける騎士の姿だった。

「お、お願いします……どうかこの子だけは」

「ふん。我々に逆らった罰だ。思い知らせてくれる」

「その騎士つ、待てっ！」

その二人の間に、ロイは馬を巧みに操って割って入った。馬が止まるとリリーナが降りて母親を連れて安全圏に走っていった。

「な、なんだ貴様ら！ 邪魔する気か」

「別に。リキア騎士でありながら領民に危害を加えているのが気に入らなくてね」

「なんだと？ おのれ、何者だ」

「……フェレ侯爵、ロイだ」

抑揚なく静かに口にした名乗りに、ロイを囲む騎士たちは身が固まる。その時、正面に立つ騎士の剣に血がついているのに気づいたロイは、身に湧き出る炎の様な感情にとらわれた。

「貴様、その剣……」

「え、あ、これか……自警団と名乗る輩を」

「斬ったのか？」

「ひっ……い、や、あの」

「領民を、民を斬ったのかと聞いているんだっ!!」

怒号を発するロイに誰もが恐怖するが、全身から放たれる怒りのオーラに怖じ気づいて身動きできない。のまれそうになったことに我慢できず、騎士は開き直って言い放った。

「そ、それがなんだと……どうせこのフェレは我等新リキア連合のへ

スマン様の統治下となる。それにたかが村人一人。斬ったところで問題ないわ！」

「・・・そうか、ならば！」
「え」

ロイはその騎士に近づくと、帯剣していたリガルブレイドで、抜剣と同時にその首を刎ねた。呆けた表情の生首が足元に転がり、周りの騎士たちは狼狽する。

「ひいっ！」
「わっ、あわわ！」

「民を傷つけた貴様らは、最早騎士にあらず。一人たりと逃がさず成敗させてもらうぞ！賊どもっ!!」

彼らに鬼の形相を向けたロイは、文字通り鬼神の如く敵を次々と斬り伏せた。

「ロイ様、ご無事ですか！」

そこに、やや遅れたルカが駆けつける。だが、先ほどまで温厚だった男の周りには、一撃で倒されたと思われる死体が転がっている。瞬時にそれが彼の仕業であると悟ったルカは、生まれて初めて人を見て怖いと感じた。

そんなルカにも目もくれず、ロイはリガルブレイドを天に掲げて叫んだ。

「ラウス騎士団に命ずる！これよりレステン村に現れた『賊』を掃討する!!半数に分かれ、一方は敵を討ち、もう一方は村人の救助にかかれっ!!」

「はっ、お任せを。ラウス騎士団、参りますっ！」

気を取り直した部下は、ロイに追従して攻撃を開始した。

その頃、子連れの母親を連れて逃げるリリーナは、村人たちが避難する教会にたどり着いた。

「あそこが避難所になっているのね」

「は、はい。ですが、私は逃げ遅れてしまって・・・」

「大丈夫よ、私がついているから。さ、早く」

そう言つて母親の手を引き、どうにか扉の前にたどり着いたが、案の定扉は開かない。とりあえずノックして中の人間に声をかける。

「逃げ遅れた人を連れてきたの！開けてくれないかしらっ！」

「マンナです。お願い、開けてください！」

「おお、マンナか！」

中から老人の声がし、門が外される音の後に扉が開けられた。

「おおよくぞ無事で。どこにも見えないから心配しておつたのじやよ」

「ロイ様が助けに下さつたのです。いま、村をお助けしていただいで・・・」

「なんと、それは本当か」

「あの、失礼ですが肩を怪我してるみたいですね」

再会を喜ぶ二人を見ていたリリーナは、男が肩を抑えながら会話していることに気付いた。

「とりあえず中に入りましょう。よろしければ杖をお貸しいただけますか」

「あ、あなた様は・・・」

いぶかしむ男に対してリリーナは身分を打ち明けると、二人は驚いて目を白黒させた。

中に入ったリリーナは、教会内にあつたライブの杖を借りて男の傷を治療した。男はこの村の村長であり、事の顛末を伝えられた。

「では、息子さんたちは、今も外で・・・」

「はい。ですが、向こうは訓練された騎士、こつちは見様見真似の付け焼き刃、果たして無事であるかどうか・・・」

「わかりました。なんとかロイに伝えて・・・」

その時である。扉を叩く激しい音がしたのは。振り返ると、斧のようなもので扉をたたき割ろうとしている様子が分かつた。斧の歯が刺さるたびに、扉の木屑がこぼれている。外からは怒鳴り声も聞こえてきた。

「ま、まさか、奴らは本気でわしらを・・・」

不安を呟く村長に、子連れの母親も恐怖の色を浮かべる。

「ここは私に任せて、二人は奥に逃げてください」

「そ、そんな・・・」

「大丈夫よ。弱い人を襲う事しかできない連中には、遅れは取らないわ」

そう言つてリリーナはウインクしてみせる。その表情に二人は奥にある地下の隠し部屋に向かった。その足音が遠ざかる中で、リリーナはつぶやいた。

(こうなったのも、私が諸侯をまとめられなかったから・・・。その責任を果たさなきゃ)

そう心に決めて、リリーナは扉に近づき、おもむろに印を結んだ。

一方外では、騎士たちが扉を打ち壊している最中。遅々として進まない様子に隊長らしき男が怒鳴った。

「何をしておるか！さっさと壊せ」

「はあ。しかし、門が予想以上に固くて・・・」

「自警団連中にラウスからの騎士団が合流して、我々が押されておるのだ。ここに引きこもってる女子供を人質にとつて奴らをけん制するのだ」

「はっ。ん？」

作業を再開しようとする騎士たちは、ふと焦げ臭いにおいに気付いた。

「どうした!」

「は、何やら焦げ臭いにおいが中から」

次の瞬間だった。激しい轟音とともに紅蓮の炎の濁流が、騎士たち諸共扉を吹き飛ばした。誰もがあつけにとられる中、リリーナが堂々たる立ち居振る舞いで現れた。

「村人たちにはこれ以上手出しはさせない。どうしてもここに入りたかったら、私を倒すといいわ!」

凜とした声が響き、そして誰もがおののく。先ほどの強力な魔法を見せられた後だけになおさらだ。

「ええいひるむな!魔道書のない魔導士なんぞ、丸腰にすぎんわ!!」

いきり立って隊長らしき男はリリーナに向かって特攻する。その

様子にリリーナは鼻で笑った。

「全ての魔導士が魔道書を必要とすると思わないことね。知識を重ねれば……」

そう言つてリリーナは両手を上げる。すると騎士たちは不思議な光景を見る。魔道書を持つていないのに、リリーナの手は明らかに魔力を帯び始めている。それだけではない。右手は燃え盛る炎、そして左手にはまばゆい電撃がまわりついている。

「こういうこともできるのよ。ヒートスパークっ!!」

そう叫んでリリーナの両手が重ねられると、電撃を帯びた火球が隊長らしき男を直撃する。男は声にならない断末魔を上げ、まさに『丸焼き』となつて絶命した。その死体には、おびただしい電流がなおもまわりついていた。

「これ以上の抵抗、無駄つて感じてくれるといいんだけど?」

余裕の笑みを向けるリリーナに対し、騎士たちは手にしていた武器を捨てて投降するほかなかった。

日中に始まつた戦いは、日が沈んだ頃に終息を迎えた。そして戦後処理をするうちに、村の被害があらわになる。人家の多くはもちろん、収穫した穀物を備蓄する納屋、家畜小屋も多くが焼け、自警団にも多くの死傷者を出した。老人や女子供といった非戦闘員への被害が皆無だったことが、不幸中の幸いだった。

「本当に、申し訳ないことをした。まさかリキアの騎士が村を襲うなんて……」

村長親子に面会したロイは、まず被害を食い止められなかったことを詫び、頭を下げた。

「いえいえ、こうして助けていただけただけでも、ありがたいことです」

「そうです。ロイ様がこうして駆けつけてくださらなければ、今頃は村が全滅していたことでしょう。こうしてお救いしていただけただけでも奇跡です。死んだ自警団員も、村が救われたことで浮かばれたでしょう」

村長とアルクにそう励まされて、ロイはずいぶん救われた気がした。確かに、休息を考えなければこの村を通り過ぎていたかもしれない。かっただけに、被害をある程度食い止められただけでも良しとするべきか。それに、この戦闘で捕えたりキア騎士は、ルカが尋問した結果アラフェンに与するカートレー軍の兵士だったことが発覚。そこからフェレの状況をある程度把握することもできた。ロイたちは村の復興を兼ねてシードら後発組を待ちながら、敵の情報を集めることにした。

数は力にあらず

「一体どういふことなのだ！」

フェレ城から北に離れたボルム山近辺にある古城。そこでアラフェン侯爵へスマンは地団太を踏んだ。

「数の上ではわが軍が圧倒しているうえに、奇襲を仕掛けることもできたのだぞ！それでいてなぜいまだにフェレ城を落とせないのだ！」

アラフェン・カートレー・トスカナの三侯爵が「新リキア連合」を名乗って、リリーナ擁護派の中核であるロイの故郷フェレ家を攻めて七日、一向に進展しない戦況にヘスマンはいらだっていた。

「せっかく魔導士を使って居城に戻り、相手の予想だにしない速さで進撃したというのに……これでは台無しではないか！」

「し、しかしヘスマンよ。まさかフェレ騎士団がここまでやるとは思わなんだのう……。アレンと、ランスといったか。やはり先の動乱で功績を上げた力量はだてではなかったのう」

いらだつヘスマンをなだめようと声をかけたカートレー候ビバンツだったが、彼の怒りに油を注いだけだった。

「うるさい！私の予定ではもうフェレを制圧して三日のはずなんだぞ！第一天馬騎士がいるなんて聞いとらんど！誤算がこうも続くとは……」

やりきれない怒りを吐き出しながら、ヘスマンは拳をワナワナと震わせていた。

オステイア城での謎の一段の夜襲とリリーナの拉致には、やはり彼らが深く関わっていた。彼らは人を裏切りし人、「古(いにしえ)の民」なる集団を使って、リキア同盟の解体を目論んでいたのである。事件後、三人はその日のうちに古の民の転移魔法によって居城に戻り待機させていた軍隊を統合。総勢一万騎の大部隊となって、リリーナの次にもつとも目障りな存在である、ロイの故郷フェレを留守中を狙って侵攻。元盟主代行として未だに影響力のあるエリウツドの抹殺も狙った作戦である。電撃的な侵攻でまずタニアを制圧。領主の姉を

人質にとって無理やり懐柔させ、ここを足掛かりに一気にフェレ領へ侵攻。国境の砦や村を次々と支配下に置き、あとは本丸であるフェレ城を落とすのみ……と考えていた。

だが、フェレ城に侵攻してからは惨めなものだった。強襲に慌てたものの、病床の身を起こして指揮するエリウツドの指示により、フェレ騎士団が連合軍を迎撃。そこで連合軍はあろうことか、前衛部隊を完膚なきまでに叩きのめされたばかりか、攻城戦の要と言える弓兵部隊を失ってしまったのである。数と速さにモノを言わせて攻略を狙ったヘスマンだったが、その力量差を思い知らされる羽目になった。

しかし、その作戦自体も、彼は「誤算続き」と頭をかいたが、そう言える代物ではなかった。彼らはフェレ軍の力量と現状をまるで把握できていなかったのである。もともと彼らはオステイアのように密偵を抱えていないため、「表」の情報だけを頼りに作戦を練っていたのである。そしてそれは明らかに動乱前の情報であり、かの動乱を経て成長していたフェレ騎士団をなめてかかっていたのだ。天馬傭兵騎士団のことも頭に入っていなかった彼らは、フェレ騎士団からのカウンターを三次元でくらってしまったことで被害が甚大となったのである。

「おまけに始末できたはずのロイやリリーナが生きているらしい……あのラストールという魔導士、まるで使い物にならんかったわ。だが、フェレに援軍を派遣できないよう、ラウスの西にある諸侯どもにはそれを阻止するよう約定を交わしておいた。フェレには援軍はない。仮にロイたちが駆け付けようとたかが数人で何ができる！何としてもフェレを焦土と化し、ロイにリリーナをかばい続けたことを後悔させるのだ！」

意気込むアラフェン侯爵だったが、机上の知識しかない彼には、戦場では当たり前の「予期せぬこと」への備えはまるでなかったのだった。

一方、国境の村レステンにて休息と復興にあたっていたロイたち先発隊に、オステイアから東進してきたシードたちが合流した。シードらの部隊の主な顔ぶれは、デイーク、ヒユウ、オージエ、ウエンディ、シャニー。そしてラウス騎士団第一小隊。この合流でロイ達の戦力は百騎余りとなり、フェレ城に向かう目処はついた。そこにテイトからの報告が届けられた。

「ロイ、書状の中身はなんだ？」

せかすシードを尻目にロイはテイトから受け取った手紙を読む。次第に安堵の表情に変わっていった。

「父上からだ。とりあえずフェレ城下は今のところ無事らしい。もうしばらくは籠城できるらしい」

「そうか。ならば尚更急がねばな。持ちこたえているうちに戻らないとな」

シードも同じように安堵し、進軍の意思を固める。だがロイは別の策を考えていた。

「いや、まずこのサンタルス地方の村々を解放する」

「フェレに行かんのか？」

「父上のもとにも、国境付近の村がアラフェン連合軍に蹂躪されていることは耳に入っている。彼らは外堀を埋めることでフェレを追い詰めようとしているらしい。父上としては解放したいけど城の防御で手一杯で助けにいけないそうだ」

「・・・なるほど。タニアを前線基地としている以上、この上に郊外の村を手中に治めればアラフェン側はますます勢いづく。だが、それらを各個撃破できれば、埋められた堀を掘り返せるし、向こうの戦力も削れるわけだ」

ロイの意思を理解したシードは、納得したように頷く。だが、ロイの考えはもう一つあった。

「それに向こうと比べて、僕らはまだまだ数では圧倒的不利だ。そんな僕らが敵の戦力を打ち負かし続けれたとすれば・・・」

「・・・効果は推して知るべし。確かにこつちにはかの動乱で名を馳せた猛者ばかり。ロイ、リリーナ、それにデイーク殿。この三人の名前

は戦を知らない連中の戦意を十分削げる。うまくいけば敵を瓦解できるな」

「だからこそ・・・」

ロイはそう言って地図上の一つの村を指差す。

「この地方で一番大きい村、タルシアンの駐留軍を叩く」

ロイの選択したタルシアン村は、サンタルス地方が侯爵領地だったころの領主館が残る村で、侯爵亡きあとフェレにサンタルス地方が併合されてからは、サンタルス地方最大の豪商ハムスト家が管理している。アラフェン連合がフェレ侵攻の折に真っ先に攻撃し、ここを橋頭堡（きょうとうほ）としている。故に、この地方の中では最も多くの戦力が駐屯している。その数およそ五百。ロイたちの五倍である。それでもロイは、強力な魔導士が二人いることを利用して、電撃的な奪還作戦を立案。実行に移したのだった。

タルシアン村は、レステン村から見て低い位置にあり、周囲を山林に囲まれた盆地にあった。そこでの様子はというと暢気なもので、村を占領する連合軍はいまだに祝いの酒をかつくらっていた。馬で一日も離れていないこの村に緊張感がないのかというと、レステン村にいた駐留軍はほとんど全滅し、生き残りはすべて捕虜としてレステンにて軟禁されていたため、情報が伝わっていないからだ。

その上空を二頭の天馬が通過していた。

「ほんとに間抜けてるね、連中。村人たちをいじめることしかしてないのに、まるで勝ち戦だよ」

リリーナを乗せながら見下ろすシャニーは、道端や壁にもたれかかって酔いつぶれている敵兵にあきれ返っていた。

「そういうあなたも、浮かれやいとところがあるから、気を付けることね」

「えへ、お姉ちゃんひどくない?」

「ははは。テイトさんよ、シャニーちゃんは、もうそこまで子供じゃないんだぜ?」

「そうですか?」

姉の指摘にむくれるシャニー。それをテイトの天馬に同乗する

ヒュウが笑った。

「だが、確かにこんなボンクラ連中だったら、魔法と自然現象の区別はつかねえだろうぜ」

「ヒュウさん、間違っても村人たちが軟禁されてる領主館は狙っちゃだめよ」

「了解。そんじやリリーナ様、派手に雷を落としてやってください」

ヒュウに促され、リリーナは呪文を口ずさんで右手に魔力を込める。そして兵士たちが多くたむろしている広場にある噴水めがけてそれを落とした。

「サンダー・・・ストームウツ!!」

山が吹き飛んだかのような轟音と強烈な雷の放つ閃光に、酔っぱらった兵士たちは蜂の巣をついたようなありさまだった。そこにテイトに急降下させたヒュウが二の矢を放つ。

「季節外れの大雪と行こうか。フィンブルツ!!」

メインストリート上空から突然の大寒波。そこを通って逃亡を図った兵士たちはすべて氷漬けになった。当然兵士たちの混乱は増すばかりである。

「それじゃあ行くか。ライド、ルカ、行くぞー！ラウス騎士団、突撃いっ!!」

先陣を切ったシードに続いて部下のライド、ルカ率いるラウスの精鋭騎兵たちが一気に村になだれ込む。もはや逃げることしか頭になり連合軍は、最後の出口を目指して突っ走る。そこにはロイ率いる歩兵部隊が待ち構えていた。

「逃げてえのか？構わねえぜ？俺の大剣をくぐりぬければな」

「フェレの民を苦しめた逆賊ども。投降すれば助命しよう。だが、その気がないなら容赦はしないっ!!」

嘲笑を浮かべるデイークと、殺気を放つロイ。二人の剣士の尋常でない覇気に、彼らはただ座り込むだけだった。

なんとわずか二時間で、ロイたちはタルシアン村の奪還に成功。その日のうちに近隣の村々すべてを開放し、わずか一日、しかも日中のうちにサンタルス地方の奪還に成功したのである。

そしてその武勇は、連合軍に大きな衝撃を与えたのであった。

臆病風

ロイ達のサンタルス奪還。その衝撃は瞬く間に連合軍を震撼させた。その日から彼らには暴風が吹き荒れた。

臆病風という暴風が。

カートレー軍が駐留する砦のひとつ。そこでは兵士たちが、リキア同盟軍の強さをうわさしていた。

「サンタルスが墜ちた……。あそこには千ぐらいの騎兵がいたんだろ？」

「いくら分散させてたからって、たった一日で奪い返されるなんて」

「ロイ様はエトルリア王国の騎士軍将と五角の剣術、リリーナ様は魔導軍将が『天才』と言いきった程の賢者……。よくよく考えるとただ者じゃねえ」

「それによ、むこうにはな、あのデイークがいるんだってよ！」

「デイーク!？」

『大陸最強』の!?!?そんなのがいるのか??」

「……勝てっこねえ」

「聞けばよ、ロイ様もフェレの民が傷つけられたってんで、連合の兵士を皆殺しにしてるんだとよ」

「た、確かに……。誰も逃げてこねえ……」

「……」

新月の夜。誰もが寝静まった砦の裏口が、その夜に静かに開いた。そこから一人、また一人と、兵士たちが「手ぶら」で外へ出た。その砦の隊長が気づいた時は遅かった。

「き、貴様らどこへいく! まだ退去命令は出とらんぞ!」

隊長の叫びも虚しく、兵士たちは次々と闇夜に消えていく。激昂した隊長は、逃亡兵の一人を斬り捨てたが、逃げようとする兵士たちの目付きが変わった。

「な、なんだお前たち。私をどうす、う、ぐあ! や、やめ!」

「邪魔するな！俺達はもう終わりなんだ！死にたかねえんだよ!!」
「グワッ！」

隊長は血迷った兵士たちに殺害された。止める者がいなくなった
砦からは、臆病風に吹かれた兵士たちが次々と消えていった。

「な、なんじゃと?!我が兵士たちが・・・」

翌朝報告を受けたカートレー侯ビバンツは、自軍の恥に言葉を失った。三つの砦のうちの一つ、そこにいた三百強の兵士が逃亡したのである。この数は、カートレー軍全体の二割に迫る。逃亡の事実共々大きな問題であった。

「ビバンツ殿、貴殿の私兵はとんだ役立たずではないか！これでは話にならんぞっ！」

当然この失態はヘスマンのもとにも届き、さっそくヘスマンはビバンツを叱責する。そしてトスカナ侯ボスカーは、ビバンツを鼻で笑った。

「ふん。所詮は老いぼれの私兵。一度臆病風に吹かれればこのザマだ。しかし、これ以上ロイどもを凶に乗らせぬためにも、小規模のうちに叩くべきだな」

そう言つてボスカーは、ヘスマンに進言した。聞いた瞬間、ヘスマンは明らかに戸惑った。

「トスカナ全軍でロイ達を潰す、だと?」

「おうよ。これ以上グダグダしていても埒が開かん。フェレの希望ともいえるロイどもを、少数勢力のうちに潰しておくのさ」

「し、しかし、カートレーの戦力が大幅に減った今、これ以上戦力を分断させるわけには・・・」

開戦当初は一万騎の兵力を有していた連合軍だが、サンタルス地方制圧にまず千、タニアの監視に二千の兵力を割き、フェレ騎士団との戦闘で千の兵を失った。カートレーが戦力としての計算が立たなくなった今、現状連合の兵力は五千余り。ここでトスカナ軍二千がロイ討伐に向かうとなれば残り三千。それでもフェレの三倍ほどの戦力を有してはいるが、包囲することが難しくなり、撤退という選択肢も

出してしまうのである。

「向こうの戦力は確かに小規模かも知れんが……個々の力量は明らかに秀でている。得体もはつきりしておらん。なあボスカー、考え直してくれんか」

「心配せんでもよい！フェレの小倅ごとき、この俺が叩き潰す！」

そう鼻息を荒くして、ボスカーは古城を出撃、タルシアン村に向かった。

「なんとということだ……これでは勝てるものも勝てん」

一人残されたヘスマンは、その頭を抱えてぼやいた。完璧だったはずの作戦が頓挫し、ここへ来て離反や分裂というトラブル続き。ヘスマンの脳裏に、自分の末路が思い起こされた。

なんとか打開策を探すが、思いつくのは負け戦ばかりだ。リキアを転覆させかねない大罪を犯しているという自覚のせいか、思考はネガティブ一辺倒である。

(リリーナとロイをトリアで始末できなかつたことが全てだ。降伏しようが抵抗しようが、アラフェン家の取り潰しは間違いない。我が軍が領民を傷つけたことにロイは激昂しているらしい……軽くても流罪、だがリリーナもリキア同盟の在り方を示すべく、鎮圧の暁に私を処刑するだろう……もはや私は助からんのか……)

頭を抱える彼の前に、突然魔法陣が浮かび上がる。その中から現れたのは、今彼が最も罵声を浴びせたく、それでいて泣きつきたい人物だった。

「ら、ラストール！き、貴様いままで……」

「おやおやヘスマン様。どうされましたか？ずいぶん憔悴されておりますが、何かありましたかな？」

「何かありましたかな……だと？ふざけるな！貴様らがあの二人を始末しなかったせいで、我が野望が暗礁に乗り上げたのだぞ！よくもまあいけしやあしやあと……」

「フッフ。ずいぶんお怒りのようですが、顔は違いますな。安堵の色が濃いはずぞ」

「うぐぐぐ……」

ラストールの言う通り、ヘスマンの今の感情は、怒りよりも安堵の方が勝っていた。それほどまでに彼は追い詰められたのである。

「・・・で、どうするのだ？何か切り札でもあるのか」

「ええ。いくらか。しかし、いくつかしてもらいたいことがございます」

「言え」

「よいのですか？あなたに賛同したお二方が危うくなるかも知れませんが？」

「・・・構わぬ。もうあの二人はあてにならん。王となれるのなら、最早手段は選ばぬ！」

その時のヘスマンの表情に、ラストールはほくそ笑んだ。

「失礼します。シード様、連合軍のボスカー候がこちらに向かってるとの情報が入りました」

「真っ直ぐか」

「はい。このタルシアン村に向かってるとのことです」

ライドからの聞かされた情報に、シードは思わずほくそ笑んだ。「情報というのはつくづく重いもんだな。なるほど、オスティアが強いわけだ。こうしてみると密偵はしっかり抱えとかねばならんな」

「あんまりいい気はしないわ。相手の見えないところまで見てるみたいだね」

リリーナが苦笑したところで、ロイが本題に入った。

「さて、ここからが問題だ。サンタルスを取り返したことで、間違いなく戦況は変わる。現に連合軍側に離反や意見のズレが生まれつつある。ただでさえ膠着したこの状況で、好戦的なボスカー殿が動かないわけがない。友人であるヘスマン殿が止められなかったとなると・・・ボスカー殿の頭には血が上りきっているな」

そしてロイはトスカナ軍を撃破することを決め、村の南にある街道

に誘い込む作戦を立てた。リキア同盟の各諸侯が抱える騎士団は、オスティアを除いて騎馬兵を軸として構成している。だがこのサンタルス地方の地形は山や森が多く、騎馬兵が行軍するには必然的に陣形が細長くなってしまふ。ロイ達は防衛線を築いて迎え撃つ策を講じていた。

しかし、リリーナがこれに異を唱えたのである。

「でもロイ、それでは時間がかかりすぎるわ。もっと早く決着をつけられないかしら」

「リリーナ？」

「だって、これは単なる諸侯間の小競り合いじゃないわ。数千の兵力が動いているのよ？時間を浪費したら、エトルリアが介入しかねないわ」

リリーナの指摘に、ロイは我にかえった気になった。よくよく考えれば、これはリキア地方だけの内戦であり、他国にその動向を感じられる訳にはいかない。再興中のベルン王国はともかく、先の動乱ではほとんど被害のなかったエトルリア王国はその余力は十分にある。

「うっかりしていたな。確かにエトルリアのことを考えていなかった。今リキアが二分していることを知れば、つけこめる力を持っているからな」

そしてロイは、リリーナの進言を受け入れ、作戦を練り直す考えを示す。そのやりとりを見ていたシードは思わず苦笑した。ロイは戸惑いながら尋ね、リリーナは頬を赤らめて怒った。

「どうしたんだシード、急に笑い出して」

「ま、まさか・・・また私たちのこと」

「いやすまん。だがリリーナ、勘違いしないでくれ。別にお前たちの・・・まあ、笑ったのは確かだが、あの親にしてこの子供ありと思つてな」

言つて、シードは遠くを見つめるようにつぶやく。

「武勇に優れ、エトルリアとベルンの二大王国と対等に渡り合う外交力を持ったヘクトル様の血を、リリーナは見事なまでに持ち合わせている。ロイにしてもそうだ。領主としてあるべき姿が目の前にあり、

しつかりとそれを受け継いでいる。・・・だからこそ思うのだ。ベルンの先王ゼフィールがいかに憐れだったかをな」

「憐れ・・・！」

シードの言葉の意味を凶りかねたりリーナが首をかしげるが、すぐに思い立った。ゼフィールが「生まれ変わってしまった」いきさつを。

大陸全土を巻き込んだ戦乱を巻き起こし、今では狂王としてその名を遺しているゼフィールであるが、王としての才覚は王子のころから秀でていた。それを父王デズモンドは疎み、憎み、果ては暗殺を画策した。人の見にくい部分に失望したゼフィールが戦乱を起こす源泉となっていたのが、実のところ、子の秀でた才覚に対する肉親の嫉妬だったのである。それをいつぞや人から人へと伝え聞いたシードは、ふとした時に自分と重ね合わせるのである。

「だが、改めて思った。このリキアはお前たちが率いるべきだと。それだけの器がお前たちにある。俺たちラウスは、全力で支えるつもりだ。よろしく頼むぞ。『国王ご夫妻』」

最後の最後で冷やかしを入れ、二人は互いに顔を赤らめながら、リーナはむくれ、ロイは苦笑した。

「もう・・・。どうして最後に冷やかすのよ」

「シード、不謹慎だぞ」

そんな三人に、訳の分からない知らせを、ルカが持ち込んできたのである。

「シード様！、ロイ様！、リリーナ様！、おかしいことが起こりました。こちらに向かっていたトスカナ軍が・・・消息を絶ちました！」

登場人物集その1

ロイ（CV：福山潤）

今作品の主人公。フェレ家侯爵。17歳

先のベルン動乱においてリキア同盟軍およびエトルリア軍の最高司令官として終結に導いた英雄。領主としての手腕や人望を集める人柄、そして剣術の腕は父エリウッド譲り。リキアのみならず、大陸中を見渡しても剣術の腕は抜きんでている。リリーナに対しては告白こそしているが、お互いの多忙さもあってなかなか恋人としての時間を過ごせないでいる。若い諸侯たちのまとめ役でもある。

クラス：マスターロード

初期装備：レイピア、リガルブレイド

リリーナ（CV：坂本真綾）

オステイア侯爵。17歳

ベルン動乱において父ヘクトルの名代としてオステイアを治めるも、クーデターを阻止できず一時軟禁される。ロイたちに救出された後は配下の重騎士団を率いてリキア同盟軍に参戦。終戦後は正式にオステイア侯爵となり、併せてリキア同盟の盟主となる。官民分け隔てなく信頼を置く心優しい性格だが、それに付け込まれてクーデターを阻止できなかつたことを悔いており、それを他の侯爵からいびられている。魔道の力量は大陸最高との呼び声が高く、魔道書なしで発動できるほか二種類の魔法を融合させて放つことができる。

クラス：賢者

初期装備：ファイアー、サンダー、ライブの杖

※ゲーム的に言えば魔道書の耐久が一切減らない

シャニー（CV：桑島法子）

リリーナの近衛傭兵騎士。17歳

動乱時はまだ見習いの天馬騎士だったが、その活躍が認められ終戦後は正式な天馬騎士になる。リリーナの亡母フロリーナが天馬騎士だった縁で動乱時から友人関係にあり、リリーナが侯爵になつてからは近衛騎士として雇われている。リリーナが本心を打ち明けられる

数少ない存在。修行先として所属していた傭兵団の団長デイクとは師匠以上の感情を抱いている。

クラス：ファルコンナイト

初期装備：銀の剣、ショートスピア

デイク（CV：藤原啓治）

「手負える虎」と渾名される大陸最強の傭兵。35歳

リキア同盟軍およびエトルリア軍の傭兵隊長として獅子奮迅の活躍を見せる。ロイにとっては剣の師でもあり、その剣技の成長に一役買う。終戦後は傭兵団を解散し一人放浪の旅に出るが、その存在だけで大きな戦力となるため、多くの貴族が大金を積んで勧誘するが全て断っている。

久方ぶりにリキアに入った際に窮地のシャニーを救い、以後はロイの傘下に入る。

クラス：勇者

初期装備：鋼の大剣、トマホーク

ウエンデイ（CV：松井菜桜子）

オスティア侯爵近衛騎士隊長。20歳

先の動乱でオスティア重騎士団に入隊。騎士団始まって以来の女性騎士であり、以後は主にリリーナの護衛役を務める。実直な性格は兄のボールス譲りで、槍の腕には一家言持つ。リリーナ救出のためにロイとともにトリアに向かい、その後もリリーナの護衛役として遠征に帯同する。

クラス：ジエネラル

初期装備：スレンドスピア

ヒユウ（CV：うえだゆうじ）

巷で「闇の隠者」と称される闇魔導士ニイメの孫。25歳

闇魔道の大家に生まれながら、理魔法扱いに長ける傭兵魔導士。軟派な性格だが子供に優しく義理堅い。ロイたちがトリアに向かっていた折、ロイの窮地を救う。エレブでは手に入らない外国の魔道書を多く所持している。

クラス：賢者

初期装備：マグラスター、レイズ、フィンブル

マグラスター：拳銃の「マグナム」と、拡散する爆弾「クラスター」をくつつけました。性能は作中通り。

レイズ：雷魔法。レーザーで敵を攻撃。勇者シリーズの魔法版です。

マーカス（CV：家弓家正）

元フェレ騎士団団長。現ラウス騎士団指南役。65歳

ロイの祖父エルバートの代から騎士としての人生を歩む。動乱後一度は現役を退いたが、ラウス軍立て直しのため指南役として派遣され、シードの参謀も務める。

クラス：軍師（今作では戦う予定なし。紋章でいうところのジェイガン）

マシユー（CV：島田敏）

オスティア家密偵。40歳

オスティア家の家臣ではリリーナの伯父ウーゼルにつかえた数少ない存在。風貌は若いころとほとんど変わっていない。人呼んで「霧の密偵」。

クラス：アサシン

ボールス（CV：玄田哲章）

オスティア重騎士団団長。ウエンデイの兄。30歳

人呼んで「金色の壁」と呼ばれる重騎士。動乱でリキア同盟軍が再編成された折、重騎士団の新団長となり現在に至る。主家に対する忠誠心は誰もが認めるところ。

クラス：ジエネラル

キヤス（CV：岡村明美）

怪盗。18歳

貴族専門の泥棒。動乱の際に何かとロイと絡むうちに、ロイが本当に民のために尽くしているかを見届けるために同行。終戦後は何かとロイの手助けをする。

クラス：ローグ（聖魔に出てきたクラス。盗賊としての能力に特化）
シード（CV：山口勝平）

DSで出てくる「マイユニット」的なポジション。本作のオリジナルキャラ。ラウス侯爵。17歳

オスティアの学問所では、当時駐留武官だったセシリアに、ロイとともに俊英と評され、生前ヘクトルからも将来を嘱望されていた。しかし、動乱時に父エリツクがリキアへの謀反を画策していた際、それを止めようとしたときに反感を買って幽閉の身に。リキアがベルン軍を撃退した折に解放され、以後エリウツドの庇護を受けながら才覚を磨き、終戦後にラウス侯爵となった。領主としての確かな器を持ち、その才能を肉親に嫉妬されたベルン先王ゼフィールと自分を重ねることがある。ロイとは親友の關係にあり、フェレ家に対しての恩に報いるべく奮闘する

クラス：ロードナイト

初期装備：銀の剣、手槍

知られざる過去

「トスカナ軍が、消えた？」

ルカからもたらされた情報に、ロイは目を白黒させた。シードは苦笑を浮かべながら部下を咎める。

「おいルカよ。冗談を言えるようになったのは褒めてやるが、質の悪いものでは笑うに笑えんわ」

「シード様、私は絶対に冗談は申しませんが、確かにのです。動向を見張っていた斥候からの報せ、それもライドからのものです。シード様に誓って嘘偽りは申しません！」

ルカの言動から、三人はそれを信じたが、報告された内容はとてもではないがそうできるものではない。実際に三人は現場に向かった。

「蹄の跡・・・まだ新しいな。しかし、この途切れ方は、ずいぶん不自然だな」

村の南にある街道につき、地面を注視したロイは行軍の足跡を見つけた。だがそれは村からわずか五里のところであつたりと消えており、周囲の森や崖に進路を変えた痕跡もない。

「リリーナ、こういうのは魔法でできなかつたか？」

シードの問いにリリーナは顔を曇らせた。

「確かに『レスキュー』の杖を使えば・・・でも一人二人じゃなくて一軍隊よ。こんな大人数を一度に転移させるなんて、想像がつかないわ」

そこに、村から慌てるように飛んできたシャニーが、三人に知らせた。

「今、フェレから連絡がありました！アラフェン軍が撤退したそうですっ！」

「父上！ご無事でしたか！」

シャニーの知らせを受けて、翌日ロイ達はフェレに入った。城内で

騎士団の労いもそこそこに、真つ先にエリウツドのもとへ駆けつけた。

「ロイか。ご苦勞だった。サンタルス地方の奪還、大義だ。リリーナとシードも、心配をかけたな」

「いいえ。おじ様がご無事で何よりです」

「エリウツド様から受けた恩に比べれば、これくらいは訳ありません」
若い諸侯たちを勞ったところで、エリウツドはロイからここまでの情報を話し合った。トリアやオスティアでの謎の一団や、事の発端とも言える賊の失踪に至るまで、ロイは包み隠さず話した。その中でエリウツドが食いついたのは、金色の目をした集団だった。

「・・・まさかお前たちも、そのような連中と戦うはめになるとはな」
「お前たち『も』？父上、ご存じなのですか！」

「おじ様、よろしければ話していただけませんか。・・・レノス様の仇である、その金色の目をした者達のことを」

二人に迫られ、「わかった。隠すほどでもないだろう」と、エリウツドはとつとつと語り始めた。

「もう20年以上前になるな・・・私の父エルバートが行方不明となる事件があつてな」

「おじい様が、行方不明」

「その足跡をたどるうちに、シードの祖父にあたる、当時のラウス候ダーレンがオスティアに対する反乱を計画していることがわかった」
「・・・親子二代で、リキアを裏切るとはな」

「だが、その裏で、竜の復活を目論むネルガルと言う闇魔導師がいた。その男が作り出した私兵が、お前たちが戦った『モルフ』と呼ばれる人形だ」

「人形・・・あんな強力なものを、ネルガルは生み出していたんですか」
「ああ。それも何百体もな」

エリウツドの言葉に、リリーナは絶句する。それがどれだけの魔力を擁するのかが、彼女には理解できない域にあった。

「ではエリウツド様。今回の一連の動きには、そのネルガルという男が・・・」

「いや、それはない。奴は私が、デュランダルにて倒したからな」

「デュランダル？神将器の！」

「父上は、デュランダルを使ったことがあるのですか？」

エリウツドの思わぬ告白に、シードとロイは目を見開く。当然である。彼らの中で神将器はベルン動乱で復活した『竜』に対抗する切り札として、人竜戦役以来の復活となったはずだったのだ。それが20年前に打ち度自分の父親が手にしていたという事実には、ロイはただただ驚くだけだった。

「その戦いでは、ヘクトルも神将器を手に行っている。とにかくそれほど力を使わねば勝てない相手だった」

「しかしエリウツド様、それなら今なぜ『モルフ』が敵として我々の前に現れたのでしょうか・・・」

「うむ。ネルガルは常に力を求めていた。そして古代魔法の研究に明け暮れていたという。その古の民とやらが古代魔法に関わりがあるのだとしたら・・・モルフを作る術を知っていても不思議はないだろう」

エリウツドから聞かされた話は、ロイたちにとって半信半疑なものであったが、敵の正体が少しでもわかったことは収穫だった。そしてそれ以上に、彼らには気になることがあった。

「ヘスマン殿は・・・どうする気なのだろう」

ロイが最も気になったのは、全軍を撤退させたヘスマンの動向だった。おそらくまずはタニアに戻ったのだろうが、次の行動が読めないでいた。もつとも考えられる可能性は、タニアの侯爵姉妹を人質にとつてリリーナに盟主退陣の勧告をすることぐらいか。しかし、古の民と手を組んでいたことはもはや一目瞭然。カードにまだ彼らがいるとしたら、モルフを生成して再び進撃してくる可能性もある。そもそも今更交渉に出てくるとは考えにくい。

「ともかくまずはタニア城を解放せねばならん。アラフエンをとがめるにしても、タニアをほったらかしにするわけにもいかんしな」

シードの提言に誰もがうなずき、一行はタニア城奪還作戦を立案、実行に移すことになった。

「う、ううう……ここはどこだ？」

頭を抑えながら、ボスカーは意識を取り戻した。

「一体なんだったのだ、あの光は。我々はもう少しでロイたちを……」
ボスカーの言うように、トスカナ軍はあと少しでタルシアン村にくつくといいところで、突然強烈な閃光に襲われたのだ。そして今、それ以来の目覚めだったのだが、真つ暗で何も見えない

「ここは一体どこなのだ。早く出ねば、ロイどもを叩きに行けん」

『その必要はないよ』

不意に誰かの声が出たかと思うと、ボスカーは再び強烈な閃光に見舞われた。やがて光が薄れると、ボスカーは目の前の光景に啞然とするだけだった。

どこかの大広間のような石畳の間に、芋を洗うような大混雑で自軍とカートレー軍の兵士がごった返している。そこには戸惑っているビバンツもいた。

「おおボスカー。サントルスに攻め込んでいたのでは？」

「そ、それが……どういうわけかここに連れてこられた。ここはどこなのだ」

「わ、わしにもわからん……」

『ならば教えて進ぜよう』

再び誰かの声が出た。ボスカーとビバンツは真上を見上げる。そこに浮かび上がったのは山のように巨大化したヘスマンだった。

「な、な、な、なんじゃあ……」

「へ、ヘスマン！これは一体どういうことだ！何のつもりだ貴様」

『何のつもり……とな？それが新たなリキアの王に対する言葉か？』

「何だ?!? 貴様気でも狂ったかあっ!!」

ヘスマンの態度に激昂したボスカーは、手にしていた手槍を、ヘスマンの顔を目がけて投擲する。だが、槍はヘスマンをすり抜け、むな

しく弧を描いて地面に落ちた。

『もう貴様らの役目は終わった。あとは我が糧となって朽ち果てるがよい』

ヘスマンがそう言い終わると同時に、彼らのいる大広間が突然揺れだした。見渡すと、五つの方向から大きな影がそびえ立ち、みるみるその感覚を絞らせていく。同時に遠巻きにいた兵士たちが次々と自分たちのほうにわめきながら寄ってくる。

『どういうことだ。部屋が狭まっているというのか?』

『君にしては頭のいいことだ。ならばもう察しが付くだろう』
『??・・・!』

ヘスマンの言葉の意味が分からず、ボスカーは一瞬思考が止まる。だが一つの結論が浮かび上がった時、悪寒が走った。

「ま、まさか・・・ここは貴様の『掌』だということのか!」

そう叫んだ瞬間。五つの山は完全に重なって天井となり、その高度を一気に下げてきた。

『どういうことじゃ。わしらを握りつぶすだけでも・・・』

「へ、ヘスマン! やめろっ!」

『聞こえんな。役に立たぬ獣の声なぞ。熟れた果実の如くつぶれるがいいわ』

「や、やめろっ! 悪かったっ! もう勝手には動かんっ! お前の・・・めに・・・す・・・へ・・・うぎゅ・・・」

ボスカーの命乞いは、巻き添えとなる兵士たちの絶望の叫びと、閉じていく空間にかき消されていった。

ヘスマンが右手の拳に力を込めたとき、その拳の中で『何か』が握りつぶされ、大量の鮮血が絞り出された。

その手を開くと、黒々と輝く赤い光の球が浮かんた。それを見たラストールは、満足げな笑みを浮かべた。

「これはこれは……雑魚どもも五千も集まればそれなりの『エーギル』が採れましたな」

「で、これはどうすればいい」

「ご自身の身体に取り込みなされよ。さすればあなたはこのデュランダルを使いこなせるほどの使い手となりますぞ」

「そうか。では、いただくか」

エーギルの塊を頬張ったヘスマンにすぐに変化が現れる。全身が赤黒く発光し、人間とは思えない叫び声をあげ、やがて禍々しいオーラを身体にまとわせた。

「オオ……。満チテイル……。何トイウ『チカラ』ダ……。」

満ち溢れる力に酔いしれるヘスマンを、ラストールは嘲笑を浮かべて見守るのだった。

行方知れず

アラフエンとタニアの国境の近くの森林地帯。

その獣道を必死に駆ける男がいた。年ごろはまだ若いらしいが、マントで全身と顔を隠しているのでどういう人間かはよくわからない。

ただ、相当ヤバイ目に合っているのは確かなようだ。マントからちらりと見せた鈍い光。それを放った短剣は血みどろになっていた。

「くそつたれ、しつこい連中だ！だが何としてもフェレに行かねえと！！」

そう言つて男はまたひたすら走る。だがその歩みが途中で止まる。いつの間にか、前後を追つ手に囲まれていたからである。

「ちっ！・・・お前からそんなに死にてえんだな」

強気な言葉を吐き捨てて、男はキルソードを構える。対峙する男は、特に何かを言うでもなくすぐさま飛び掛かってきた。

「しっけえんだよっ！！」

そのすれ違い様に、男は飛び掛かってきた男の喉を斬り裂く。間髪入れずにもう一人の男が斬りかかってくす。だが、すぐに動きが止まる。そして仰向けに倒れた。眉間にナイフを突き刺されて。

「誰んだ・・・このナイフ」

男はそう言つてナイフを手取る。それには見覚えがあり、それが誰のものかを思い出した時、男は露骨に嫌な顔をした。

「へっへっくん、無事だったようね〜子分その1。命の恩人に感謝することね」

「その言い方はやめろキヤス。ったく、2年たつても呼び方は変えねえんだな」

「あら、ずいぶんなめた態度じゃない。助けたんだからお礼ぐらい言わないとね〜」

「ちっ、へえへえ、ありがとうございしました」

尊大なキヤスの態度に、男はすねながら謝った。

彼はチャド。かの動乱ではリキア同盟軍の諜報活動員として活躍した少年だ。現在はフェレ家の密偵として活動する傍ら、同じ孤児院

で育った魔導士ルウトともに、アラフェンで孤児院を営む。

「で、そんなに血まみれになって、誰に何を言うつもり？」

からかうように話すキャスに、チャドは思い出したように語った。

「つと、すぐにエリウツド様に報告しねえと！……ちよつとアラフェンが面倒なことになってんだ」

「ふくん。じゃ、一緒にタニアに行こつか。こっから近いし、ロイもいるしね」

「ほんとか！そりや都合がいい。ロイ様にも、ちよつとマズい報告しなきゃいけないんだ」

そう言つて二人は森の中に再び消えた。

一方のタニア城。そこにはリキア連合軍が二千ほど残っている。その司令官であるアラフェン軍のカノーブ將軍は、部下からの報告にいらだつていた。

「侯爵様が行方知れずだと!?アラフェンに戻ったのではないのか？」

「はあ……ですが、フェレから本軍を撤退させてから、ヘスマン様だけでなく、ボスカー様やビバンツ様も行方が未だにしれません」

「ボスカー様はサンタルスに向かったらしいが……何の手がかりもないというのか？」

「残念ながら……」

「うむう……。だが、だからと言ってここを開けるわけにもいかん。

タニアは我がリキア連合の重要な前線拠点なのだからな。よし、引き続き侯爵様をお探ししろ。それからレーブやウオードとも連絡を取れ！ラウスを攻撃させて向こうに動揺を与えるのだ」

カノーブの指示を受けた部下と入れ替わるように、一人のシスターが入ってきた。

「なによろかな？姫君。まさか、同盟軍に寝返ろうとでもお考えなのかな」

尊大な態度をとるカノーブに、この城の本来の主、タニア候ミスティは睨み返した。

「裏切る？その言葉、そっくりお返しいたしますわ。リキアという国

を裏切り、オスティアに刃を向けたあなた方こそ裏切り者ではありませんか」

「フン。確かに我々は事を起こしてはいるが・・・すべてはあの小娘の指導力不足に他ならぬ。リキアは我らの主、アラフェン候へスマン様が治めるべきなのだ！」

「三侯爵が手を組んでおきながら、フェレすら落とせなかった男が、このリキアをまとめられるとは思えません」

負けじと皮肉るミスティに、カノーブは平手打ちをくらわした。

「戦うこともできぬ小娘の分際で・・・あまり我らを怒らせぬことだ。さもなければ、姉君の命がどうなろうと、私のあずかり知らぬことになりませぬ？」

額にしわを作りながら、カノーブは部屋を出た。残されたミスティは、目を閉じて祈りをささげた。

(聖女エリミーヌよ・・・我らリキア同盟に、祝福を与えたまえ・・・)
今の彼女にできることは、かつての学友たちの無事と勝利を祈ることだけだった。

そのリキア連合の司令官であるヘスマンは、今どこにいるのだろうか。

ヘスマンはラストールとともに、ラウスの西にあるレーブ侯爵家の館にいた。

そしてレーブは今、その歴史に終わりを告げようとしていた。

「ぎゃあああああつ!!!」

淑女の断末魔が部屋中に響き、レーブ侯爵は腰を抜かしていた。

「ひ、ひいっ！へ、ヘスマン殿気は確かか」

「黙レ。貴様ラガ戦イニ加ワラナカツタコトデ、私ノ完璧ナ計画ハ頓挫シタ。我ラニ呼応シテスグ動イテイレバ、ろいモシードモ始末デキタモノヲ」

ヘスマンは反乱を起こす前、オスティアとラウスがフェレに駆けつけられないように、その二国に挟まれているレーブ侯爵に、自分たち

と呼応してラウスに攻撃するよう取り付けていたのである。

だが、そのことを感付いたシードが、ロイと合流する前にレーブ侯爵にくぎを刺したのである。

「訳あってラウスは主力をもつてフェレに向かうことになった。なるべく貴殿らは動かないでもらいたい。動こうものならどうなつても知らんぞ？ラウスはもとより、北の旧キアラン領の駐屯軍と全軍を残してあるオスティア軍、この三方から挟撃されると思っていただけだいい」

その時のシードの態度もあつたが、これに怖気づいたレーブ侯爵軍は一切動かず、やすやすとロイたちをフェレに帰らせたのである。

そのことを知ったヘスマンは、アラフェンに帰る前の憂さ晴らしに、レーブ侯爵家を文字通り断罪したのであつた。城に来るや侯爵の血縁者を老若男女問わず惨殺し、今日の前で侯爵夫人を真つ二つにしたのである。

「りきあノ開祖、ろーらんガ操リシ『デュランダル』デ葬ツテヤル。アノ世デ家族水入ラズにクラスガイイ」

「うわわ、やめろっ！助けてくれえっ!!あぎやあああああああつ!!」

右の肩口から左の脇腹にかけて一刀両断され、レーブ侯爵家はここにその歴史を閉じたのである。

「ヘスマン殿、お見事な腕でございます」

「スマナカツタナ、らすとーる。我が憂イヲ断チタカツタノデナ。コレデ心置キナク王ヲ目指セル」

「然様ですか。それでは戻りましょう。アラフェンでは段取りが整つておるはずです」

足元に浮かんだ魔法陣に包まれ、ヘスマンとラストールは、血なまぐさい屋敷から姿を消した。

そして反乱終結を目指す、ロイ率いるリキア同盟軍は、連合軍の手の中にあるタニアに向かった。目的は無論その解放であり、ロイ側も把握できないでいるアラフェン侯爵ヘスマンの手掛かり探しも兼ねていた。その挨拶代わりに、フェレとタニアの国境にある砦をまず奪い

にかかった。

対象であるレタ砦は、砦としてもかなり小さい部類に入り、背の低い櫓の周りに城壁を建てただけといった簡素な造りで、フェレ側とタニア側にそれぞれ一つずつ門がある。そこには連合軍の兵士が百人弱ほど配置されていた。それに正対する位置に、リキア同盟軍の一団は陣を敷いた。中核はランスが率いるフェレ騎士団七百騎である。

「これより我が騎士団はレタ砦を奪う。フェレの誇りを胸に、日々の研鑽の成果を發揮せよ。かかれー！」

音頭を取ったランスが先陣を切り、フェレ騎士団は砦目指して疾駆した。黄昏に照らされ、土埃を巻き上げて進軍してくるフェレ軍に、砦の兵士たちは慌てふためいた。指揮官が閉門と弓兵部隊の派遣を命じて砦の全軍をフェレ側に固めさせていた。しかし、予期せぬことが起きる。タニア側の扉が開いたのである。

「されラウス騎士団。向こう側ではフェレ騎士団が武勇を見せつけている。だがこのラウスとて遅れは取らん！行くぞっ!!」

それに呼応して、森の中からシード率いるラウス騎士団百五十騎が砦を強襲。開いた門から次々となだれ込んだ。そのうちにもう一つの門も開けられ、砦に残っていた連合軍兵士は逃げ場を失い、次々と武器を捨てて投降。一人逃亡凶ろうとした司令官も、シードに逃げ道をふさがれた。

「逃げたいのなら好きにすればいい。この俺とラウス、フェレの両騎士団を一人で駆逐出来れば、の話だがな」

鈍い光を放つ槍の穂先を突き出された指揮官は、戦意を失い同じように投降した。数に勝っていたとは言え、一時間もしないうちにレタ砦は同盟軍の手中に収まったのである。

「ライドー・ライドはおるか」

戦いが終わった砦にて、交代で休息をとる最中、ランスはラウス騎士団の兵士を呼び出した。呼ばれた若き騎士は、ランスの顔を見るや、全身を硬直させて敬礼の姿勢をとった。

「ラ、ランス將軍！お、お久ちゆうございます！」

一瞬噛んでしまったことで、顔はパツと真っ赤になる。ランスは思

わず苦笑した。

「ははは。もつと楽にしろ、ライド。いちいち上がっていては身が持たんぞ」

ランスとライドは師弟の関係にある。そう、ライドは元々はフェレ家の従騎士であった。父ハーケンは勇者の称号を持つフェレ家指南役、母イサドラはフェレ騎士団の元将軍というサラブレッドであり、ゆくゆくはフェレ家の将軍と嘱望されている。それがラウス騎士団再興にあたり、見識を広めさせ、人を率いる経験を積ませようと、正式に騎士となったと同時にラウス騎士団に派遣されたのである。

「此度の働き、見事であると聞いている。なかなか顔も壮観になった・・・と言いたかったが、噛んでしまっってはな」

「せ、赤面の至りです・・・」

「しかし結構。これからも騎士としての誇りを胸に、ラウス騎士団を支えるのだ」

「はっー!」

かつての教え子の敬礼に、ランスは笑みを浮かべて敬礼を返した。

大胆な盟主

レタ砦を奪った翌朝、休息を終えたフェレ、ラウスを核とするリキア同盟軍は、連合軍の動揺を狙ってか、タニア城に最も近いペスタ砦に侵攻した。騎兵の機動性を最大限に生かした奇襲攻撃に、駐留していた連合軍兵士は蜂の巣をついたように離散。ついにタニア城と対峙する位置に陣を敷いたのである。

そのあまりにも早い進撃に、カノーブ將軍は明らかに狼狽した。侯爵姉妹を人質に取っていることでそうやすやすは侵攻しないだろうともくろんで侯爵の搜索に専念していたのだが、ろくな成果が得られないうちに土俵際に追い詰められたのである。

「おのれ．．．まさかここまで進撃してくるとは．．．我が軍をなめているのか？それとも人質を無視しているのか？いずれにせよ、リキア同盟軍のあのためらいのない攻撃．．．私の憶測が浅かったのか」

平静を装うとするが、頭を抱えて部屋をうろつくさまは動揺を如実に表している。指揮官の心情が伝染したのか、部下は不安をあらわに聞いてきた。

「大丈夫なのでしょうか．．．、こうなってはアラフェンに戻ったほうがよいのではないのでしょうか。もしかすれば、侯爵も戻っているかもしれないし．．．」

だが、部下の提案を、カノーブは烈火のごとく怒鳴り散らして却下した。

「撤退だど!?馬鹿者めっ!!それでは我が軍は恥をさらすだけだ!!数ではまだ我々が上回っておるのだぞっ!閣下の指示なしに独断でタニアを明け渡したとあっては．．．ぐっ」

しかし、いくら怒鳴ったところでむなしいだけだと悟り、可能な限りの策を探した。そして一つの策を思いついたのである。

「今、傭兵のごろつきどもはどれぐらいいるのだ?」

「さて、これで向こうはどう出るかだな」

ペスタ砦の屋上で腕組みしながらシードはつぶやいた。

傍らには手を腰に当て、城をにらむように仁王立ちするロイもいた。

「今のところはまだ動きはないようだが……。お前のとつた策はかなり無茶なものだ。奴らがどう出るかわからんぞ」

「確かに、かなり賭けに近い。だが向こう側は何かしら動かざるを得ない状況だ。『人質をとつてもリキア同盟軍は攻めてくる』という心理状態に追い込めれば、必ずスキは作れる。追い詰められた末に思いつくものは、必ず穴があるからな」

冷静に連合軍に与えたであろう衝撃を予測し、ロイは敵の出方をうかがう。大胆というか無茶というか、どちらとも取れる作戦を実行した後でありながら、それでいて平然としているロイの立ち居振る舞いに、シードは改めて呆れた。

「それにしてもだ……。敵を動かすために、挑発めいた奇襲を繰り返すお前もそうだが、あいつもまたとんでもない行動に出る。あの辺りはヘクトル様の血だな」

シードのつぶやきに無言になるロイ。今ここにリリーナはいない。彼女は彼女でオスティアから来た数名の臣下を連れて別行動をとっているのである。

「まあ、かなり無茶な作戦だけどね。リリーナもあれで結構頑固なところあるんだよな」

「恋人としちゃ心配か」

「そりゃね……。って、シード!」

あまりにもさりげなく言われ、つつい本音を漏らしたロイ。気づいたときにはもう遅かった。

「はははは。この辺りはまだまだガキだな。お前は」

「……。こんな状況でもからかうのか、君は」

ため息を一つついて、ロイは空を見上げた。夕闇に一番星が淡い光を放っていた。

「今夜は満月……。忍び込むには日が悪そうですね」

「でもぐずぐずしてられないわ。派手に進撃した以上、向こうはいろんな手を使ってくるはずよ」

タニア城は周囲を森で囲まれた丘の上にある。その石垣のそばに、森から人影がいくつかあらわれた。

「しかし、姫様も無茶をしますねえ。盟主自ら人質の救出を試みるなんて、ヘクトル様が生きてたら卒倒しちゃいますよ」

軽い口調で紫色の髪をし、無精ひげを生やした密偵の男は、主にそうつぶやいた。

「かもしれないわね。でも、ミステイをこれ以上巻き込みたくないの。早くお姉さまを解放して、タニアが連合軍に従う必要はないことを教えてあげたいのよ。アストールさん、頼んでたこと、できてる」

「もちろんですよリリーナ様。場所もルートも調査済みです」

リリーナは今、オージエ、ウエンデイ、そしてアストールの三人を従えて、タニア城の隠し通路、その入り口前にいた。

タニア解放作戦、その中心はリリーナであり、ロイ達の電撃的な攻撃は陽動の意味合いが強かった。ロイ達が連合軍の気を引いている間に、リリーナら数人がタニア候姉マリンデを救出し、侯爵ミステイに連合軍に与するふりをして内部崩壊させるよう働きかけることが中核であった。

だが、かなり危険な策である。火中に飛び込んで敵を刺激することはもとより、彼らにとって一番欲しい「首」をむぎむぎ差し出すような真似をしているのである。ロイでなくても心配せざる得ないのである。

だが、自分の不甲斐ないせいで多くの人が巻き込まれていることに、リリーナは遺憾に思っていた。これぐらいのことをしなければ、自分を許せなかった。元々頑固でこうまで意志が固まっていれば、ロイも説得を諦めざるを得なかったのである。

「行きましょう。タニア解放の為に」

ろうそくの頼りない弱々しい明かりだけの、タニア城の地下通路。その一角、埋め込まれている石の形に埃が舞う。そして押し出された石の裏から見えた穴の中から、四人の人間が出てきた。リリーナ一行である。周りを見渡して人気がないことを確認すると、リリーナは一つ息をついた。

「どうやら気づかれずに入れたみたいね」

「ずいぶん静かですね。それにしても・・・」

言ってオージェはリリーナを見る。

「どうしたの、オージェ」

「い、いやあ、せつかくのローブが勿体ないなあと。そんなに千切ってしまつて」

そう言つて、オージェは頬を赤らめながらリリーナを見る。その視線の先に気付いたウエンディは、同じように顔を赤らめてオージェをとがめた。

「ちよつ・・・オージェ！どこ見てるのよ、はしたない！」

「わ、いや、ウエンディさん違うんだ。俺はそういうわけじゃ・・・」
うろたえてウエンディの考えを否定するオージェ。そのやりとり
にリリーナは苦笑し、オージェをかばった。

「いいのよウエンディ。そりゃ誰だつて気になつちやうわよ」

リリーナはこの城に忍び込むにあたり、着ていたローブを動きやすいようにいじった。マントを外し、足首が隠れるくらい長かった裾を膝下近くまで裁（た）ち、もう片方にもスリットを入れた。これで足の自由は格段に利くようになったが、タイツやニーハイソックスをはいているとはいえ、年頃の姫君の大腿がちらつくのは妙になまめかし
くもあり、オージェはつい目のやり場に困ったのである。

少し歩くと別れ道に差し掛かる。ここでアストールは別行動をとる。

「そいじゃあ俺はミスティ様のもとに行つてきます。そっち側にいくと、マリンデ様が軟禁されている部屋になります」

「わかつたわ。お願いね、アストールさん」

アストールとは違う方の通路をしばらく進むと、やがてリリーナた

ちはひとときわ大きなロウソクで明るく照らされている牢の前についてた。オージエが壁越しに見張りの様子をうかがい、その後ろにウエンデイが立ち、リリーナがその後ろにいる。その時である。リリーナが何者かに口をふさがれたのである。主君の小さなうめき声に反応した二人はすぐ振り向くが、それは顔見知りの質の悪いいたずらだった。

「ハクイみなさんお久しぶり〜」

「キヤス？あなたはどうしてここに？」

「ちよつと子猫拾ったんでね。雨宿りも兼ねて忍びこんじやつただ」

「俺は猫じゃねえし、第一雨なんか降ってねえぞ」

すぐ後ろからは少年の突っ込む声が聞こえた。

「チャドも・・・まさかこんなところで」

「それはこつちのセリフよ。一国の王女様がなんで泥棒みたいな真似してんのよ。あんたロイを心配させる気？」

驚くりリーナに構わず、キヤスはリリーナの行動をとがめた。が、キヤスはすぐにオージエのそばに立つ。

「で、どうすんの？」

「見張りは一人。だがここは石造りの通路。大声を出されたら響く」

「そつか。んじや、アタシたちの腕を見てもらいましょつか。行くわよ、子分そのー」

「だから子分じゃねえっての」

キヤスは懐から小さなナイフを取り出すと、それをロウソク目がけて投げ、その明かりを消した。急に周りが暗くなったことに兵士は慌てたが、すぐさま鳩尾に一撃を食らって失神。チャドはすぐさま男を物色し、カギを取り出した。

弄ぶ連合軍

「ははあ！粹な歓迎じゃねえかつ！」俺たちの首はそう安くねえぞつ！！」

叫びながら、シードは襲い掛かってくる刺客たちを次々と返り討ちにする。その傍ではロイもその剣技で敵を木の葉のように斬り伏せた。

リリーナたちが城に潜入しているその夜、ロイたちは連合軍の夜襲を受けた。攻撃を仕掛けたのは連合軍に雇用されていた傭兵四百人超。「首一つに突き100ゴールド、大将格の首を持って帰れば一生道楽で暮らせる金を出してやる」と鼓舞して攻撃させていたのであった。奇襲に当初はうろたえていた同盟軍であったが、先頭切つて剣を振るうフェレ、ラウス両諸侯の勇敢な姿に落ち着きを取り戻し、大陸最強の称号を持つデイークの存在が同盟軍側を精神的に有利にした。オージエ、ウエンデイ、シャニー、ヒユウ、ランスの歴戦の猛者たちもそうだが、ラウス騎士団の部隊長であるライドとルカ、さらにレステン村から志願兵として従軍したアルクも果敢に戦い、傭兵部隊は次々と逃亡していった。ロイたちの砦からは、ほどなく勝どきが上がった。

「ひいひい・・・なんなんだよあれ。めちやくちや強えじゃねえか」「まったくだ。金は魅力あるけど、命あつての物種だぜ」

愚痴をこぼしながら戻ってきた傭兵部隊たち。ほとんどが怪我を負い、中には剣や斧を杖代わりに歩く重症のものもいる。そんな瀕死の傭兵百人余りがタニア城の城門にたどり着いたとき、満月の夜空を切り裂いて矢の雨が降り注いだ。

「うぎやあ！」

「ぴげえつ！」

「げふうっ！」

胸に、背中に、額に矢を受けて次々と倒れる傭兵たち。数が半数以下になった時に城門が開き、そこから槍をかざした兵士たちが突っ込んできた。

「死ねえっ!!」

「かくごしろっ!!」

一直線に突っ込んでくる兵士たちに、傭兵たちは命乞いをした。

「な、なんだてめえれげ!!」

「や、やめろ俺たちや味方だはっ!!」

「ひいっ! た、助けてくれっ!」

「ぎゃあっ!!」

だがそれも空しく、兵士たちの次々と槍の餌食となる。一方で兵士たちも懺悔の気持ちを抱えながら傭兵たちを虐殺していった。

(許してくれっ! 私たちだってこんな真似したくないんだ)

(だが、我らの主君と貴様らでは天秤にかけられん!!)

ほどなくして傭兵部隊は殲滅された。手にかけてしたのは、タニア軍の兵士たちであった。

「そうか。傭兵どもはすべて片づけたか」

玉座の間でふんぞり返って報告を受けたカノーブは、結果をわかっていたかのようにつぶやいた。そこに、血相を変えたミスティが、カノーブに詰め寄った。

「我がタニア軍に、友軍を始末させたそうですね・・・」

「おおミスティ殿か。ろくな力を持たぬタニア兵でも、死にかけて傭兵ぐらいなら倒せるのですなあ」

慇懃無礼な言葉遣いに、ミスティはカノーブの頬を叩き、目に涙を浮かべて怒りをぶつけた。

「この・・・外道っ!! 味方同士で殺し合いをさせるなんて、正気の沙汰じゃないわ!! 人殺し、悪党、けだもの!!」

無表情のままミスティの言葉を聞いていたカノーブは、悪魔の笑みを浮かべて言い返した。

「外道の真似をためらいなく奴らができるのは、貴殿ら姉妹の命がかかってきたからだ。『命令に逆らえば姉妹を処刑する』と言っておいただけだ。私は」

主君に対する忠誠心をもてあそんだカノーブに、ミスティは唇をか

むことしかできない。立ち上がるカノーブをなおもにらみ続けたが、目には涙が浮かんでいた。

「恨むのなら人質になるしか能のない病弱な姉君を、あるいは戦う術を持たない非力な自分を恨まれるがよい。・・・ああ、かといって妙な真似は致すなよ。姉の命を思うのならな。ハハハハハ」

破竹の勢いで進撃するリキア同盟軍を前に、侯爵たちが失踪し孤立した格好になったカノーブは、開き直った末に常軌を逸した作戦をとった。

タニアに対して徹底して精神的な攻撃をとったのだ。主君を人質にタニア軍の兵士たちに無理難題を押しつけ、臣下を想う主君には非道の仕打ちをさせてしまった後悔を押しつける。自分達の手中にあるのをいいことに、タニアを徹底的に甦ることを思いついたのである。

「ただ負けるのなら、一つの国をボロボロにして負けてやる。フッフ、ハハハハハ」

悦に入ったような狂った笑い声をあげるカノーブ。それを豹変させるような報告が彼の元に届いた。

「申し上げます！先ほど地下牢より連絡が！マリンダが何者かの手引きにより城から逃亡しました!!」

ほどなくしてその知らせはミスティにも知らされた。そして部屋の天井を見上げた。

「・・・これは、リリーナとロイによるものですか」

言葉をかけた天井からは男の声が返ってきた。

「そうです。ただ、これによつてあなたの立場を危うくするかもしれませんが、わが同盟軍はタニアを、そしてあなたを必ず助けます。信じていただけますか」

完璧に助け出すことは難しい。しかし、必ず奪還して見せる。男の言葉に、ミスティは腹を括った。

「・・・わかりました。その言葉信じます。姉上を・・・助けていただき、ありがとうございます」

そう言葉をかけた天井からは、既に人の気配が消えていた。

「ぎゃあああああつ!!」

玉座の間で火だるまになる男の絶叫が響いた。彼は当身を喰らわされて気を失っていた当時の門番である。カノーブは男が連れてこられるや、エルファアイアーで焼き殺したのである。

「おのれリキア同盟軍・・・。こうなればより苦しめてやろう。このカノーブ、ただでは決して死なんぞつ!!」

「そんな残酷な・・・」

一方、リリーナに助けられたマリンドから、ロイは敵の蛮行の詳細を聞き絶句していた。

「ちつ、胸糞悪い。だが、そんな作戦を平気でやらせてるつてのは、それだけ相手は追い詰められてる。・・・決着までは近そうだな。ロイ」
吐き捨てたシードだったが、彼の言うように連合軍はもはや虫の息である。強引な力押しでも勝てそうな勢いではある。

しかし、同じように声を失っていたリリーナは、だからこそ慎重に行くべきだと指摘した。

「でも、そこまで残酷になったのなら、もう何をしでかしてもおかしくないわ。私達の攻撃に合わせて、街を燃やしたりとか・・・」

「あるいはタニア軍の兵士に、タニアの民を殺させたりな。・・・もしかしたら、もう何か動いてるかも知れんな」

シードの展望を聞いてロイは考えを巡らせる。確かにそれくらいのことをしてもおかしくないことぐらいは推測がついた。

「ちよつと危険かもしれないけど・・・いくつか手を打っておくか。リリーナ、すまないがデイークを呼んできてくれないか。あとオージエも」

その後、砦から城を出る影があった。それらは空が白みががるころ、朝の靄（もや）に隠れながら街に向かっていった。

翌朝、ロイはフェレ騎士団三百騎を率いてタニア城の麓まで進軍した。対峙するように陣を敷いたロイは、腕組みをしてタニア城を見上げた。

「さて……ここまで来たら敵はどう出るだろうな」

そう考えたときだった。城門の上に設けられている物見に人影が現れた。年の頃は五十手前ぐらい。その男はその位置から文字通りロイを見下すように言い放った。

「私はリキア連合軍の軍師、アラフェン家宰相のカノーブである！ 貴様はリキア同盟の者か」

「いかにも。リキア同盟軍將軍、フェレ侯爵ロイだ」

ロイもまた負けじと、威風堂々と名乗る。そんなロイをカノーブは鼻で笑った。

「おお、我らが英雄殿か。我が城に何用かな？」

「降伏を勧告に来た。今すぐタニアを解放してもらいたい。これ以上無駄な血は流したくない。そもそも貴殿らの目的はオスティアでありフェレであつたはず。なんの関係もないタニアを、これ以上巻き込まないでもらいたい。勧告を受け入れるなら、盟主たるオスティア候に最大限の嘆願をすると約束する」

ロイの言葉を聞き終えて、カノーブは突然笑い始めた。

「フッフ、ハハハハハっ！ 降伏？ 嘆願？ 片腹痛いわ。かの動乱で大国エトルリアを傘下に収めた程の英雄にしては、ずいぶん浅はかな取引だな。タニアを解放せよとは、なんともおかしな話だ」

「どういう意味だ」

「意味か……フッフ、では教えてやろう！ やれ！」

カノーブが左手で合図するや、城壁に次々と柱が起き上がる。それを見て、ロイは言葉を失った。

起き上がったのは、人間が縛り付けられた十字架だった。それも十数本の全てが女や子供といった弱い者ばかりだった。

ロイは驚きを押し込め、あくまで冷静に聞き返した。

「・・・あれはなんの真似か、カノーブ殿」

「見ての通りだ、英雄殿。我々の命令に応じないときは・・・」

指を鳴らすと、槍を持った兵士が一人の男の両脇に立って、槍の穂先を男に向けた。

「皆がこうなる!」

そしてかぎした左手を降り下ろすと、男が槍で貫かれた。

「ぎいやあああつ!!・・・ガフッ」

「ひい!」

「きやあつ!」

男が事切れるのを目の当たりにした女子供は目をそらし、悲鳴を漏らして青ざめる。ロイは思わず叫びそうになったが、そこでも歯を食いしばって冷静に努める。

「貴様・・・なんという」

「安心されよ、英雄殿。今始末したのはタニアの者ではない。先のサントルス防衛戦で、逃げることしかできなかった腰抜けよ」

「斥候を手にかけたのか・・・なんと愚かな真似を」

「愚か、とな。猛将の血を引きながら、またもリキアに混乱を招いた小娘を擁護することと、さして変わらぬぞ。おっと、もう一人忘れておったぞ。ククク」

再びカノーブが指を鳴らし、十字架が起き上がる。そこに縛られていた人物を見て、今度ばかりはロイは声を上げた。

「なっ、ミスティ!」

「ククク。この娘の命が惜しくば我らの要求をのんでもらおうか」

カノーブの策略に、ロイはただただ歯を食いしばった。

タニア解放

進軍してきたロイ率いるリキア同盟軍に対して、リキア連合軍の軍師カノーブは、タニアの民、そして侯爵であるミスティを磔にするという暴挙に出たのであった。

「ミスティっ！」

「ああつ、お姉様！」

報せを聞いて慌ててマリンダが妹を呼び、磔にされたミスティは姉の無事を見て驚いた。そして安堵した。アストールがあの日天井裏から知らせてくれたことが事実であると分かったからだ。先の大戦で両親を失ったミスティにとって、マリンダは唯一の肉親であり、何よりも大切な存在であった。

そんな時、カノーブはロイに要求した。

「我々の要求はただ一つ！オスティア侯爵の盟主辞任と爵位剥奪である！もはやリキアの平穏をあの子にゆだねることはできません！我らがアラフエン侯爵こそ、リキアを総べるにふさわしいお方である。この者たちの命は、そこにいるであろうリリーナの首と引き換えだ！」

その要求に真っ先に反論したのは、マリンダとミスティであった。「黙りなさい、この外道。我がタニアを力でしか支配できないあなたたちこそ、同盟を総べる器はありませんわ！」

「そうよ！三つの国が連合したにもかかわらず、タニアだけしか征服できずフェレからは撤退。サンタルス地方はたった一日で奪い返され、おまけに肝心の諸侯たちは不在……。こんなずさんな連合にリキアは任せられないわ」

二人の口調、特にミスティの強気な笑みが気に障ったカノーブは、左の親指を地面に向ける。するとミスティの傍らに立つ兵士が、槍の穂先をミスティの頬に当て、そのまま横に斬りつけた。

「っ！」

「ミスティ！」

思わぬ行動に、マリンダは驚愕の声を上げたが、幸い頬を斬られただけだ。それでも白い肌に赤い線が一筋入り、そこから血が滴った。

「貴様、それ以上ミスティを傷つけるな！」

「今更あがいても無駄よ。これ以上の戦いはお互いに何も残さない。降伏しなさい、カノーブ」

ロイが怒り、リリーナが毅然と言い放ったのに対して、カノーブはさらにほくそ笑んだ。

「勇ましくて結構。しかし、貴殿らには考える猶予などない。私にはまだカードがあるのでね」

「カードだと？」

ロイの問いに、カノーブは得意げに答えた。

「そうだ。タニアの城下町には時を告げる鐘を鳴らすエリミーヌ教の聖堂があるのだが、そこを我々が抑えさせてもらった。間もなく鳴るのであろう正午の鐘の音に合わせて町は火の海となる。我がアラフェンの将校に見守られたタニア軍の兵によってな」

「な、なんですって！」

「またも非道な作戦を耳にして驚いた。そして、ロイたちに向かって叫んだ。」

「ロイ、リリーナ、私のことは構わないわ！今すぐ攻撃を仕掛けて！」

「なんですって！」

ミスティの言葉にリリーナは戸惑うが、ミスティの眼には迷いはなかった。

「お姉様が無事なら私に思い残すことはないわ。こいつらを早く倒して、タニアを取り戻して」

一方で姉は姉で掛け替えのない妹のために、カノーブに懇願した。

「妹とタニアの人たちの代わりに私の命を差し上げます。ですからどうか、どうかこれ以上タニアを傷つけないで」

そしてカノーブはというと、姉妹の声を無視してロイに迫った。

「さあどうする英雄殿。むぎむぎタニアを焼き滅ぼすか？それともこの人質を見殺しにするか？迷えば迷うほどタニアは血が流れるぞ？んん？」

勝ち誇ったようにロイに迫るカノーブ。だが、ロイは目を閉じたまま、口元を緩ませて言い返した。

「すでに勝ったかのような物言いであるが、果たしてそう思い通りになるかな？」

「何い？貴様、いまさら何を負け惜しみを」

「万事、己が思うままに進むと思わないことだ。戦いは将がうぬぼれたときに負けるのだ」

「ふん。今更説法か？」

「なら試してみるがいい。本当に正午を告げる十二の鐘が鳴りやんだときに、タニアの町が燃えているかをな」

堂々と言い切るロイに、タニアの姉妹とカノーブはただただ戸惑うばかりであった。

その頃、鐘が鳴り響いたタニアの城下町では、アラフェン軍の将校五十人に監視されながら、タニア軍の歩兵百人が、東西南北にそれぞれ分かれて、もつとも火が付きやすい場所にいた。

「よいか？鐘が鳴り終わったらだぞ？言う通りにすれば侯爵姉妹の命は保障されるのだぞ？」

兵士たちにならみを利かせながら、アラフェン将校が言う。タニアの兵士はどうにもならないこの状況下、やるせない思いで火のついた松明を用意した。

ゴーン・・・ゴーン・・・ゴーン・・・ゴオオーン・・・

最後の鐘が鳴り響いた。その余韻が静まった時、四方から断末魔が次々と聞こえた。

「ど、どういことだ・・・」

最後の鐘が鳴り終わり、その余韻も消えてだいぶ経ったのに、タニア城から見る城下町は平穏なままだ。

「お、おい。街の様子を見てこい・・・い、いや。待て」

カノーブはすぐさま斥候を出そうとするが、すぐに取り消す。タニ

ア城の構図にすぐさま気づいたからだ。人一人が出るぐらいの幅の通用口はいくつかあるが、馬に乗って出るには正面の門を開けるしかない。しかし、開ければ開ければでロイたちにみすみす城に入る機会を与えるようなものだ。

「どうしたカノーブ殿。街はまだ平穩のようだが、こけおどしであったか？」

今度は挑発してきたロイに、カノーブは錯乱する。そして破れかぶれに命じた。

「おのれ、私をコケにしおつて……、者ども！そいつらを処刑せ……よ？」

振り向いて人質の方を見ると、飛び回る謎の兵士に、槍を持っていた兵士たちが次々と倒され、次々と人質も解放されている。解放しているのは、マシューやアストールらオステアの密偵部隊だった。

「カノーブ、覚悟っ！」

呆気にとられているカノーブに、リリーナは叫びながらサンダーストームを放つ。

「そ、そんな馬鹿な！私の、完璧な計画が……」

向かってくる雷光にそう叫び、カノーブは雷に打たれてその命を散らす。それと同時に城の門があいた。

「よし、リキア同盟軍、突撃せよ！タニア城を制圧し連合軍を倒すっ！」

ロイの叫びに続いて、リキア同盟軍が城になだれ込む。残された兵士たちはただただ逃げまどい、瞬く間に陥落した。

「シード！無事だったか」

「ロイ、お前もよくやったな」

夕刻、別行動をとっていたシードは、ロイの出迎えを受けた。ロイは作戦を果たした盟友と固く握手を交わした。

カノーブの性格を考慮したロイは、マリンドを助け出した夜、シードと作戦を練り、万が一に備えてラウス騎士団とティークら傭兵部隊を城下町に潜伏させていた。万が一そこで蛮行を働くのならそれを

やめさせるためだ。そしてリリーナには連絡の取れる密偵たちを全て召集させ、城に潜り込ませていたのである。

そこに、タニアの姉妹がリリーナに連れられてやってきた。ミスティは目に涙を浮かべながら、ロイに何度も頭を下げた。

「ロイ、本当にありがとう。あなたのおかげで、私たちもタニアも無事解放されたわ」

「いや、礼を言われるほどのことではないよ。とにかくみんなが無事でよかった」

「それにむしろあなたには謝らなければならぬわ。わたしが盟主としてしっかりと諸侯をまとめていれば、こんなことには……」

後悔の念を言い、暗い表情をするリリーナをマリンドが励ました。

「いいえリリーナ。あなたが気に病むことはないわ。それを言えば、ロイ殿やシード殿、それにミスティ、同じ世代の者にも同じように責任があるわ。あなたをねたむ者はいるかもしれない。でも、同じようにあなたを支える者もいるのよ。自信をもって」

「マリンドさん……」

その夜。ささやかな祝宴が催された。いよいよアラフエンに向けて進撃する。

「ここにいたのか、リリーナ」

「あ、ロイ」

バルコニーで夜空を見上げるリリーナに、ロイは声をかけた。

「途中から姿が見えなくなったから、心配だったんだ」

「ええ。ごめんなさい。久しぶりのお酒なもの。ちよつと酔っちゃって」

そう照れ笑いを浮かべるリリーナ。ロイはその隣に立って、リリーナの肩を抱き寄せた。

「さっきの言葉だけど、マリンド殿の言ったように、君ばかりが思いつめる必要はないよ」

「うん……。でも、どうしても最近、考えてしまうの。お父様のように同盟をまとめることが、わたしにはできるのかなって」

「・・・それは、無理なんじゃないかな」

意外な言葉に、リリーナはロイのほうを見る。ロイもまたリリーナの顔を見、手を取って言う。

「確かにヘクトル様のようにはいかない。でもそれは、リリーナはリリーナであって、ヘクトル様じゃないからだよ。君には、君だからこそできることがあるんだから」

「ロイ・・・」

「大丈夫。リリーナは強いよ。だからこそ、自ら先頭に立って、このリキアを良くしようと呼びかけるんだから。だから・・・」

不意に、ロイは目を閉じて顔を近づけてくる。「えっ」と、呆気にとられるリリーナとロイは唇を重ね、そして言った。

「そんな君だから、愛しいんだ。・・・だから、君の悩み、苦しみ、もつと僕に分けてくれないか」

「・・・ロイ」

いつの間にか瞳に涙をためるリリーナ。ロイは優しく抱きしめ、その涙をしばらく胸に受け止めていた。

さわやかな夜風が、二人をなでていた。

そしてアラフエンへ

時系列を少しさかのぼる。レーブ侯爵家が皆殺しにされる直前ぐらいまで。

「ルウおにいちゃん、みてえ」

「あつ、きれいな花かざりだねえ。作ったのかい？」

「うん！あげる！」

「はは、ありがとう」

アラフエン郊外、南西の小高い丘の上に小さな孤児院がある。その院長が、今幼い子供たちに囲まれている魔導士のルウだ。

彼も元々はこのあたりにあった孤児院の出で、動乱の際には魔導士としてリキア同盟に参戦。魔導部隊の一員として戦い抜き、終戦後に得た功労金を元に孤児院を建て直した。

そこにその日、アラフエン侯爵家家臣の私兵が五十人ほどがやってきた。

「何か御用ですか」

子供たちをかばいながら、ルウは落ち着いた口調で尋ねる。対してアラフエンの兵士は高圧的だ。

「我々と城まで来ていただくか」

「傭兵の話なら、これまでと同じ、受ける気はありません。お引き取りください」

ルウの孤児院にアラフエンの関係者が来るのはこれが初めてではない。連合軍の結成直前、戦力となる魔導士を欲していた彼らは、ルウに高い契約金を見せ金に何度も迫ったが、決して首を縦に振らなかった。子供たちを人質に取らなかつたのは、孤児院がエリミーヌ教団の支援を受けており、ルウはその関係者に顔が利くために、しつぱ返しを警戒したからである。だが、この日の彼らはとかく強引だった。

「とにかく来ていただきたい。さもなくば・・・」

いつもと違う様子にルウは折れることにした。

「……。わかりました。では城に参りましょう」

「ええー！」

「ルウおにいちゃんーだいじょうぶ？」

案じる子供たちに、ルウは心配をかけまいと笑顔で声をかける。

「大丈夫。すぐに戻ってくるから、かしこく留守番してるんだよ。いいね」

それから二日たってもルウは城から戻らなかった。

そこにチャドが訪れ、子供たちから事情を聴き、これがただ事でないと感じて急ぎフェレに飛んだのだが、その途中で謎の集団に追われ、キヤスによって助け出されたのである。

この経緯をロイが把握したのは、タニアを解放した日の夜のことだった。時同じくして、ラウスのマーカスから、実は連合軍と繋がっていたというレーブ侯爵家が皆殺しに遭っていることも知った。アラフェンの異常は明らかであった。そして解放の翌日からリキア同盟軍はアラフェン領への進軍を開始したのであった。

そして、タニアを出発して二日後、国境のそばにある丘の上に着陣。明日にでも部隊を選抜し、乗り込むつもりだ。いったんここで進軍を止めたのは、作戦の伝達や連戦続きの中での休息をとるというのもあったが、もう一つやることがあったからだ。

「そうか……。結局古の民に関する情報は集まらなかったか」

密偵マシユーから受け取った報告書に目を通し、ロイは肩を落とした。

「城の文献、情報屋、名の知れた魔導士、一通りあたったんですが、これといったものはなかったですね。すいません、力になれなくて」「いや、いいんだ。大変だろうけど引き続き頼むよ」

「敵を知り己を知れば百戦危うからず、ですからね。了解しました」

そう言って、マシユーは煙のように消えた。

「古の民……。今のところリキアでしか活動してないってことかしら」「リリーナの懸念を、ロイは否定しなかった。

「かもしれない。しかし、野心のあるアラフェン侯をけしかけた連中

だ。他でも動いていないというのはあり得ないだろう。キリがないかも知れないけど、裏にその存在が見え隠れする以上、調べておかないとね」

「あの一、ちよつといいっすか」

そこに、ふらりとヒュウが現れた。

「その古の民なんですけど、もしかしたら婆ちゃんなら何か知ってるかもしれない。よかつたら俺がイリアの婆ちゃんどこまで行つてきて聞いてきましょう」

「・・・ニイメ様。確かにあの方ならそういう情報を記した文献を持つてるかもしれないわ。ロイ、ヒュウさんをお願いしてみない?」

ヒュウの意見を思案したりリーナがロイに提言する。そしてロイも了承した。

そして善は急げと、ヒュウはその日のうちに陣を去り、イリアに向かった。

「この戦いで終わるかもしれないけど、古の民の脅威はおそらく今後もどこかで出てくる。ならば知れる方法はいくらでも試さないかね」
「でもまずは、アラフェン侯を探し出すこと。ルウのことも気になるわ」

「ああ。無事でいればいいんだけどね」

翌朝、ロイ達はアラフェン攻略作戦を開始。まず後顧の憂いを断つべく、近辺に新設された砦を片っ端から襲撃した。

アラフェン侯爵の騎士団の規模は、オスティアに次ぐほど大きなものであるが、大規模な侵攻作戦に兵力の大半を割いたため、国内の残存兵力は二千にも満たない。そのうちの半数近くが国境近辺に乱立した二十近い数の砦に配置されている。そのため一つに突き五十人程度の兵力しか配備されていない。フェレとラウスの両騎士団で構成される同盟軍千騎は、二手に分かれて東西から巡回するように攻めた。

連合軍を撃破したことはアラフェン領内にも伝わっており、歴戦の戦士を要する同盟軍に対するおびえようは相当なものであった。砦

一つに対して十倍の戦力が攻めてくるといふのだから、当然のごとく逃亡兵が出る。来た時点でもぬけの殻という有り様がずいぶん続いた。

中には戦意を無理やり掻き立て抵抗の意思を示した砦もあったが、「リキア同盟軍將軍のロイである！武器を捨て投降するならば、貴殿らの助命を約束しよう！」

「これ以上の戦乱は民を苦しめるだけ……。戦いをやめて投降しなさい。応じれば盟主リリーナの名に懸けてあなたたちの命を保証します」

「我がラウス騎士団には『大陸最強』と名高い勇者ディークどのがおられる。血を流すのが嫌なら助けてやるが……。刃向うなら叩き潰すっ！」

ロイ、リリーナ、シードの三諸侯がそう呼びかけると次々と投降していった。

結局翌日の昼頃までにはすべての砦が陥落し、同盟軍の目指す先はアラフエン城のみという状況となった。

「そ、そんな馬鹿な……。タニアを取り返して、たった五日で砦全てを制圧しただと……」

リキア同盟軍の進軍と攻略の早さに、アラフエン軍の留守部隊隊長のキブナーは愕然とした。

「カノーブの兄上を討ったほどの軍隊だ……。数に差がないのでは勝ち目は……」

「余計ナ心配ハ無用ダ」

不意に、部屋の中に不気味な声が聞こえ、キブナーは無意識に身構える。すると突然目の前に禍々しく輝く魔法陣が現れ、部屋にいた者全員が狼狽する。だが、光が晴れると、キブナーの表情が明るくなった。

「へ、へスマン様っ!!」

安堵の色を浮かべて、主君に膝をつくキブナー。対してへスマンは

嘲笑を浮かべた。

「見事な変ワリ様ダナ。我があらふえん侯爵家ノ重臣タルモノガ」
「ヘスマン様、ああ、こうして無事なるお姿をお目にかかることができ、わたくし、臣下として恐悦至極にございます！」

「フフフ。ソウカ。ソウ言ワレルト悪イ気ハセンナ」

普段とはまるで違う口調と目の輝きをしているのに、キブナーは絶望に光が差したような心境にあり、気に止まることはなかった。

「デハらすとーる。奴等始末スルゾ。用意ハイイカ」

「もちろんでございます。モルフどもはすでに八百ほど。それに『アレ』も二、三体」

ほくそ笑むラストールの報告に頷くと、ヘスマンはキブナーに命じた。

「デハきぶなー。才前ハ残ルあらふえん兵全軍ヲモツテりきあ同盟軍ヲ迎撃ツノダ。何案ズルナ。質量共ニ我が軍ガ上ダ。必ず同盟軍ヲ倒スノダ」

「はっ。お任せを！」

整った敬礼を返し、キブナーは勇ましい足取りで城を出た。

「トコロデらすとーる。『あれ』ノこんとろーるハ利クノカ」

「さあ。力だけを宿した粗悪品故。敵味方もろとも、という可能性はなきにしもあらず。されど、同盟軍は無傷という訳には行きますまい」

他人事のように笑うラストールに、ヘスマンもまた笑った。

ついに根源へ

内乱終結。その最後のカギとなるアラフエン。その国境の森に、フエレ・ラウス連合軍を軸とするリキア同盟軍は陣を敷いた。その日の夜。一番大きな天幕に主だった面々が集まって作戦会議を開いていた。作戦会議とは言っても、結論はひとつ。「いかに早く『ケリ』をつけるか」に尽きる。これはどんな手を使うかの話し合いだった。

というのも、隣国のエトルリア王国にてこの内乱を感付いている節があるという情報が、陣を敷いてほどなくしてもたらされたのである。かのベルン動乱でクーデターが起きるなど大きく混乱したとはいえ、現状もつとも余禄を残しているエトルリア。終戦後保護からは外れたものの、内情の不安定さを悟られて介入されると厄介なことになる。オステイアでは「公務につきアラフエンにて外遊中」という体を繕っているが限度はある。

「・・・いよいよ事態は切迫してきたな」

テーブルに広げられたアラフエン地域の地図を前にして、腕組みして目を閉じていたロイが、天幕の重苦しい空気の中で口を開いた。

「地の利はむこう。こっちはは時間がない。かといって正面突破で戦火は大きくしたくない・・・八方塞がりも、ここまで塞がるとやつてられんな」

現状に対するシードのぼやきが、同盟軍を取り巻く空気の重さを代弁している。

『できれば民を巻き込まない』もうそれもやむ終えなくなってきたのか・・・やはりあの時もつと追求すべきだったのか」

諸侯会議の席上でヘスマンを青ざめさせた、決定的証拠の暴露。あの時踏み込んだ追求をしておけば、戦火そのものを防げたのかもしれない。ロイは自責の念にかられた。

「ロイが思い詰めることはないわ。それはむしろ盟主である私の責任よ。それに今は後悔している時間もないわ。始まってしまったのなら、終わらせなきや駄目よ」

「そうだな。すまない、リリーナ」

その時だった。

「敵襲っ！敵襲だあ!!」

天幕にいた全員が一斉に外に出ると、黄昏を背に騎士の一個小隊が迫ってくる。土埃を上げながら。アラフェン軍であることは明白だった。

「全軍戦闘体制っ!!迎え撃つぞ!」

ロイは全軍に向かって指示を飛ばした。だがその心中は穏やかでなかった。

(森とはいえ外での防衛戦か・・・苦しいな)

現在の同盟軍の主力は、フェレとラウスの両騎士団の中核であるソシアルナイト・パラディンは、機動力はあっても防御力には不安を残し、迎撃戦では不利となる。加えて援護する弓兵部隊などの後方支援も万全とはいいがたく、リリーナの魔法による破壊力に頼っていたのが現状だ。だが、今はどう悔いても仕方のないところではある。意を決し、ロイたちは敵の奇襲を耐えていった。

「ぞうらっ!!」

前線に立って大剣を振り回すデイーク。大陸中に名をはせた勇者の存在はやはり大きい。加えてシード、オージェらも腕を振るい勢力を次第に盛り返していった。夜襲を仕掛けたアラフェン軍は次第に押し返され、アレンら騎馬部隊が反撃に転じて戦況を盛り返していった。

そんなときだった。

「ん、なんだあいつ」

チャドの視線の先には、目深くローブをかぶった者が突っ立っていた。戦場には不釣り合いな様子にチャドはいぶかしんだが、すぐさまそれが異常な者であることが明るみになる。それらは突然発火したかと思うとみるみる身体が大きくなり、ついにはトカゲのような形になってその姿を現した。

「あ、あれは・・・まさか」

そしてチャドの報告を受けるまでもなく、ロイたちもその姿を遠巻きに確かめた。いや、聞きなれた咆哮に反応し、それが目についたのである。

「そんな馬鹿な！なぜあんなものが」

「アラフェン侯爵は、いったいどうなってしまったの？」

ロイとリリーナは、思いもよらぬ敵の増援に絶句する。シードは口を挟んだ。

「一応聞くが・・・、あれは『竜』ってやつか」

無言でうなづくロイ。その顔には、冷や汗が一筋伝っていた。

そしてリキア同盟軍の若い兵士たちは、見知らぬ怪物に恐怖し、瞬く間に伝染した臆病風によって総崩れとなり、逃亡兵が次々と出た。

「馬鹿者っ!!迂闊に背中を見せるなっ!!」

前線でアレンが檄を飛ばした直後、竜たちの背後から豪雨のごとき矢が舞ってきた。背後に無警戒となっていた逃亡兵たちの背中、四肢、さらには後頭部を次々と射抜き、そこに追い討ちをかけるべくモルフたちの騎馬部隊が攻め込んできた。

「アレンっ！ここは退くぞ。これでは立て直しも効かん」

「くっ！やむを得んか・・・」

親友ランスの進言に、アレンは苦々しさを押し殺して撤退を指示する。それに乗じてアラフェン軍本体はモルフ部隊に追従して『竜』とともに後を追った。迫りくる竜に兵士たちの動揺は頂点に達した。

だがその中でリリーナは、その竜に違和感を感じていた。

（何かしらあの竜。すごい魔力を感じるけど、周りにある炎は・・・）
「どうしたんだリリーナ」

撤退を指示しようとしたロイは、いぶかしむリリーナに気付き声をかけた。その瞬間、リリーナは自信の疑問を氷解させた。同時に、鬼気迫る表情でロイに行った。

「ロイっ！今すぐ全軍をここから撤退させて」

「わかった。それじゃあ準備を・・・」

「準備なんかしないで、すぐに逃げてっ！あの竜が・・・」

「落ち着くんだリリーナ。確かにあの竜は強力だ。だから対策を」

「そうじゃないの！あの竜は、あの不気味な兵士と同じモルフなの。それで、その完成度が低すぎるの。自分が宿している魔力に身体が耐えきれていないの！！下手をすれば途中で爆発して、このあたり一帯を吹き飛ばしてしまうわっ！！」

「何だっってっ!?!」

「おいおいリリーナ、いくらなんでも考えすぎじゃねえのか」

リリーナの見解にロイは驚き、シードは尋ねた。だがリリーナは確信を持って言い切る。

「わかりにくいかもしれないけど、魔力を宿するのは身体に毒を入れているのと同じなの。『器』、つまり身体に不釣り合いな魔力は、あたしたち魔導士ですらコントロールできなくなるわ。ましてや竜のような強力なものを生むにはそれ相応の魔力を使っているけど、人形にコントロールするとうる発想なんてない。器に入れっぱなしだと魔力の暴走は止まらなくなるの。今あの竜たちが身体に炎をまとっているように見えるけど、あれはひび割れた身体からあふれ出ている魔力なの」

「じゃあ、もし魔力が完全にあふれ出たら・・・」

「わたしの感覚だけど・・・火山の噴火に近いかも・・・そうならばこの陣どころか森一帯が消えかねないわ」

リリーナの必死の説得を理解したロイは、怒号交じりに撤退を命じた。

「手に持てないものはおいていけっ！逃げることだけを考えるんだ!!!」

「隊長、リキア同盟軍が森からの脱出を図っております」

「いま向こうは浮き足立っておるぞ！追撃を急げ！」

一方でアラフェン軍は、この行動を敵の混乱として追撃を指示。さらに竜たちも引き連れて森に向かって進軍を続けようとしたときだった。

「グ・・・ガ・・・ガア」

竜たちの動きが突然止まり、妙な唸り声を上げて前足から突っ伏す。全身から吹き出ていた炎に加えて、目や鼻、口から赤黒い煙を吹きだし始めた。そして、竜たちは紅い光に包まれ出した。

「な、なんだ。いったいどうし・・・」

アラフエン軍の部隊長がそうつぶやいたとき、竜たちは一斉に破裂。まるでそこが火山の火口であるかのように、地面を揺らす轟音とともに、天を貫くような火柱が上った。

魔道の双璧

耳をつんざく轟音と目を焼かんばかりの閃光が収まり、身を伏せていたロイ達はゆっくりと立ち上がる。目の前に広がっていたのは、黒い煤（すす）に埋め尽くされた荒野だった。

「間一髪だったな。リリーナが優秀な魔導士だったおかげだ」

頭の煤を払いながらシードがつぶやく。歴戦の勇士たちも目の前に広がった『黒い砂漠』に暫し言葉を失う。だが、ロイはすぐに配下の騎士に聞いた。

「アレン、我が軍はどれだけ生き延びた」

「はっ。敵の奇襲で少し失いましたが、迅速な指示により、フェレ、ラウス両騎士団は十分な戦闘能力を維持しております」

「ではランス、ルカと伴に体制を立て直せ。出来次第アラフェン城へ進攻する」

ロイの判断に、リリーナは不安を感じた。

「でもロイ。あまり急がない方がいいんじゃないかしら。まだ兵士たちにも動揺が」

「かもしれない。だがそれは向こうにも言えることだし、ダメージはおそらく向こうのほうが大きいはずだ。今ここで攻めることができれば、一気に決着をつけられる」

あくまでも強気なロイに、シードは念を押しした。

「結構危険な賭けだけぞ？俺たちが間違つて全滅でもしたら、リキアの歴史は終わるのかもしれないぞ？」

「それぐらいの価値はあるさ。・・・古の民に、これ以上僕たちのリキアを踏みにじられたくはない。今は一刻も早い内乱の終結に全力を注ぐ。否応なしに巻き込まれた民たちのためにも」

ロイの決断は、誰にも動かせないものだった。

「全軍に告ぐ！準備か整い次第、我らリキア同盟軍はアラフェン城に向かう。今の戦いでアラフェン側は間違いなく混乱しているはず。」

これを機に、謀反人たるアラフエン候へスマンを討つ！」

高々とレイピアを抜き放ったロイに、同盟軍の兵士たちは、疲労が吹き飛んだかのように呼応。鬨（とき）を挙げた。

そのころ、ロイの予想通りアラフエン側は混乱していた。

「リキア同盟軍が来るだど!! やつらだつて損害を受けたはずだぞ！」
「で、ですが、実際に来ております。規模は少なくなつてはいます
が・・・」

斥候からの報告に、アラフエン軍のキブナー將軍は怒りも焦りも通り越したような、呆けた表情で冷や汗をたらした。城からも確認できた轟音と閃光、焦土と化した森、自軍の全滅、そしてリキア同盟軍の進撃。凶報につぐ凶報に、キブナーの表情は青くなる一方だ。対してヘスマンやラストールは、まるで「これも想定内」と言わんばかりに落ち着き払っていた。

「ヤハリ、ニセモノノ竜デハ、無理ガアツタヨウダナ」

「然様で。しかし、どうあれ、我らは最後の切り札を投じねばなりません
まい」

そう言つてラストールは指を鳴らす。すると、魔法陣が浮かび上がり、一人の魔導士が現れた。

「如何様でございましょうか」

「リキア同盟軍がまもなくこの城に来る。すまぬがしばしの間食い止めてはくれぬか？」

「御意」

そう一言つぶやいて、男は再び魔法陣とともに姿を消す。その髪は碧かった。

ほどなくしてリキア同盟軍はアラフエン城に到着。そのまま精鋭で突入部隊を組織したロイは、正面から突破を図った。回廊を進むと、やがて一つの部屋についた。

「ここは？」

「謁見の間だな。奥の扉は玉座の部屋に通じている」

シードの問いにロイが答えていると、奥の扉が開き、一人の男が歩み寄ってきた。顔を伏せてはいるが、それはロイたちが知る人物であり、最も親しいチャドが呼んだ。

「ルウ！無事だったのか!!」

「やあチャド。心配かけたね」

「突然城に連れていかれたと聞いたけど、本当に何もなかったのかい」
「ロイ様、お久しぶりです。ご覧の通り、僕は何の問題もありませんよ」

ロイの問いにも、ルウは何事もなかったかのように、笑みをたたえながら応じる。だが、ロイもチャドもどこか違和感を感じずにはいられない。ここでルウは一つため息をついた。

「ま、警戒してしまうでしょうね。拉致された僕が、こうして無事な姿でいるわけだし、リリーナ様が一番僕を警戒していますからね」

そういつてリリーナに視線を移す。リリーナはルウが現れたときから表情をこわばらせたままだった。

「否が応でも警戒するわ。あなたがこの部屋に入ってから、魔力の流れが明らかに変わったんだもの」

口元をひきつらせながらリリーナが言い返す。

「それに、僕たちですらそれを感じられるんだ。警戒しないのは」
「不自然ってことさ。てめえ本当にルウか？」

その両脇に立って、ロイとチャドがレイピアとダガーの切っ先をそれぞれルウに向けている。そこでルウは鼻で笑った。

「やれやれ……。それじゃ、遠慮なく切り刻ませてもらいましょう」

おもむろに伸ばした手で指を鳴らし、全身を発行させるルウ。生み出された魔力にロイとチャドが吹き飛んだ。

「いい機会ですネリリーナ様。僕と勝負しませんか？勝てたら、アラフエン候にお会いできますから」

見開かれたルウの目は、血を思わせるような赤黒い鈍い光を宿して

いた。言動も好戦的になっている。

「嫌だと、言ったら？」

「ハハハ。選択の余地があるとでも？僕の魔法に敵うのはあなただけでしょ？」

ルウはさりげなく右手だけで印を結ぶと、鋭い閃光を放つ。直撃したりキア兵が一瞬にして高圧電流で黒焦げとなった。

「受けて立ってくれますね・・・リリーナ様」

「そうせざるを得ないかしらね・・・」

「では、邪魔が入らないように・・・」

もう一度ルウが指を鳴らすと、ロイヤチャド、シードらが一か所の結界の中に閉じ込められた。広い謁見の間で自由に動けるのは、ルウとリリーナだけとなった。

「・・・」

「では始めましょうか」

二人の賢者の戦いはこれからだった。

理の乱舞

「サンダー!!」

謁見の間ではリリーナとルウの賢者同士の魔法のぶつけ合いが繰り広げられていた。ルウもまた、魔道書なしで手で印を結ぶだけで魔法を発動できる技量を持っている。リリーナと比べて技の複合や強化はできないが連続で放て、追尾する力を加えることができる。魔道の障壁を身体にまとわせながら、リリーナは雨のように降り注ぐ雷を可能な限り避け続けた。

「ルウ君！目を覚ましてー！」

そう叫んでリリーナも反撃。それぞれの手にエルファイアーを発動し、それを合わせて放つ。普通のそれの10倍近き火球がルウめがけて飛ぶ。

「チィ!!」

かわすものの爆風だけでも皮膚が焼けそうになる。実際、羽織っているマントの一部が燃えた。直撃するれば消し炭になっていただろう。

「さすがですね……。でも、僕の手数に耐えきれますかね」

不敵な笑みを浮かべると、今度は連続で風の魔法エイルカリバーを放ってきた。

(エイルカリバーを!?くっ!)

対するリリーナもエイルカリバーを放つ。こちらは威力を増幅させた巨大な風の刃だ。ルウの風の刃を次々と砕くが最後の風がぶつかり合ったところで霧消した。ちなみに風がぶつかると同時に周りに真空波が弾け飛び、壁や柱には斬痕が刻まれた。

「アハハ……。さすがですね。数で稼がないと勝てないや。今のも腕を斬るぐらいの風は残ると思っただけど」

禍々しい目でルウは自虐的に笑う。一方でリリーナは次第に呼吸が荒くなる。攻めるだけでなく、身を守るための障壁を生み出しているために、魔力の消費はルウよりも激しい。

「でも、果たして耐えられますかね……。絶え間なく放たれる僕の魔法を」

「……甘く見ないで。私の魔力はそう簡単に尽きるほどヤワでもないわ」

嘲笑を浮かべるルウに対して、リリーナは気丈にふるまう。

「じゃあ、仕切り直しと行きましょう。今度こそ刻んであげますよ……」

ルウの右手には、風の刃が渦巻いている。

「ギガスカリバアツー!!!」

「!!」

ルウの放った魔法にリリーナは目を見開く。それは賢者が操る理魔法でも最上位に当たり、幻の魔法ともいわれた強力な風の魔法。いくつもの風の刃が重なり一つの巨大な真空刃となる。エイルカリバーとは比べものにはならない破壊力を持つ。

(まさか……。これを打ってくるなんて。エルファイアーを重ねても太刀打ちできない)

風の刃が迫る中、リリーナは新たに魔法を唱える。それは研究のおり、師であるエトルリア魔道軍将セシリアを通じて異国から手に入れた炎の魔法だった。

「ボルガノン!!!」

印を結んで両手をかざすと、火山の噴火を彷彿とさせる業火の奔流が放たれる。ルウのギガスカリバーを呑みこむほどのものだった。今度はルウが戸惑う。

「ば、バカナ、ギガスカリバーを呑みこむなど……。ぐっ!!」

とっさに障壁を作るルウであったが、炎の濁流に瞬く間に呑み込まれてしまった。

「うあああああああああああああああああああああつ!!!」

濁流からはじき出されたルウは、大理石の床にたたきつけられた。致命傷こそ避けたが、いたるところにやけどの跡があり、身に着けているローブも焼け焦げていた。

だが、リリーナもまた膝から崩れ落ちてしまった。馴れない魔法の

反動に体が耐えられなかったのである。

(す、すごい魔法・・・全身が・・・焼けそう)

二人の魔導士が倒れる中、一つの魔法陣が現れ、その光から少女が現れた。

「ぎやははは。すっごいたたたかいだったねえ。いきてるっかなああ
〜」

罨にかかった雀を見に行く農家の子供のような言葉だ。だが、この幼い姿の魔導士も、古の民なのである。

「あ、そうだ。おにいちゃん。もうたたかえないんだったらかえしてね。ちから」

そういつてルウに手をかざすと、その体から黒い煙が噴き出した。「ふぐうっ!!!ううう・・・」

その煙を、少女は大きく口を開けて頬張るようにして呑みこむ。全てを吸い込むと、苦虫を噛み潰したような表情を見せた。

「うげええ。。。かしてあげたちからほとんどないじゃん。じゃ、こっちのおねえちゃんはどうかなあ?」

そう言つて今度はうつぶせに倒れるリリーナに近づく。朦朧とするリリーナの髪を強引に引つ張る少女。それで意識が戻つたりリリーナは、目の前の少女を見て記憶がフラッシュバックする。

「あ、あなたは・・・」

目の前の少女は、自分をオステイア城から拉致し、トリアまで連れていった魔導士だった。驚くりリーナをしり目に、少女は顔を近づけてきた。

「あははは。おねえちゃんひさしぶり。まりよくちようだい」

リリーナが悪寒を覚える笑みを浮かべると、少女はリリーナと口づけをする。するとリリーナの全身を妖しげな光が包んだ。

「ぷっは。おくちなおしで〜きた」

少女が口を話して満足げにしゃべったのと同時に、リリーナは強烈な脱力感に襲われ再び倒れた。呼吸はできるが、指一本動かすことさ

えできない。

「な、なにを・・・したの・・・あなた」

「えへへへ。おなかすいたから、まりよくをごちそうになったの。おなかいっぱいにはならなかったけど、とつてもおいしかったよ。えへへ。あ、あたしエンヴィアっていうの。じゃ、そこのおにいちゃんといっしょにころしてあげる」

無邪気な笑みを浮かべているが、目の前の少女が放つ魔力は尋常ではない。だが反抗する力は今の彼女にはなかった。その時である。突然、魔力のゆがみを感じた。

「えっ、えっ、なんなの〜？」

リリーナだけでなく、エンヴィアも困惑の表情を浮かべる。そんな中、部屋に一つの魔法陣が浮き上がる。不気味な光を放つ中で現れたのは、ルウと同じく緑髪の魔導士だった。

「よう。面白そうだな。じゃあ俺が先に殺してやるよ。クソガキ」

闇の申し子の介入と黒幕の高笑い

「へく・・・おにいちゃんすごいまりよくだねえ・・・あたしにちようくくだあ〜いつ!!ギャブツ!!」

まがまがしい目を向けて、エンヴィアは現れた魔導士、レイに飛び掛かる。それを鼻で笑ったレイは、手をかざして魔法を放つ・・・かと思いきや、強烈な回し蹴りを顔面に叩き込んだ。まさかの体術攻撃である。顔面に魔導士の蹴りをモロに受けたエンヴィアは、毬のように地面を弾んだ。

「フン。ガキみたいな面して得体のしれないやつだ。だが俺をそんなじよそこらの闇魔導士（ドルイド）と一緒にするなよ。身一つで旅するうえで、それ相応の動きがでななきや話にならないんでね・・・それによ、そろそろガキのフリはやめろよ、バケモノ」

嘲笑を浮かべながらレイはエンヴィアに言い放つ。

「姿形をガキにしてあちらこちらで人間を殺しまくったらしいが・・・どうせなら本性表しな。ここには俺たちしかいないんだからな」

レイの挑発に、エンヴィアは高笑いを響かせる。

「キヤハハハハハハハハハハハハハハハハ・・・ムカつくこと言うね、お兄ちゃん。そんなに死にたいのなら・・・」

笑みを浮かべながら体から黒い煙を吹きだすエンヴィア。それは次第にエンヴィアを包んでいく。

「お望み通り・・・殺シテヤルヨ。デモ、ドウセナラ・・・」

そう言つてエンヴィアは目を光らせる。すると戦いを見守ることしかできなかったロイたちの結解が解ける。いなや駆けだしたロイとチャドが、リリーナとルウを抱きかかえる。

「大丈夫か！リリーナ」

「おいルウ！目を覚ませ!!」

「・・・う、ロイ・・・」

「・・・そ、の声は・・・チャド・・・」

二人の呼びかけに、魔導士二人はゆつくりと目を開き、口元に笑みを作る。そしてロイは目の前にいるレイに声をかける。

「しかし、レイ。どうして君がこんなところに・・・」

「フン。ただの寄り道さ。ベルンに用があるんだが、このあたりに来た途端、やけに城から禍々しい魔力が沸き出てるのを感じてな。まあ、結界張ってたけど、あの程度じゃ俺が侵入するのはわけない。ま、お前らはしばらく休んでな。このバケモノは俺の獲物だからな」

ニヤリとするレイを見て、エンヴィアは歯ぎしりする。

「グルルルル・・・ナニヨ。オマエダケデアタシヲオセルトデモ？」
「思ってるから挑発してんのさ。・・・来な」

そう言つてレイは中指を立てて挑発する。エンヴィアはまず噛みつきにくる。対してレイは一冊の魔道書を開く。

「黒く輝く月のきらめきよ、我を介し全てを貫け・・・ルナっ!!!」

レイがかざした右手から、黒く輝く球体が現れ、エンヴィア目がけて飛ぶ。黒い光はその胴体をすり抜けエンヴィアを悶絶させる。

「おいおい、その程度でくたばるのかよ。もう少し抵抗しな」

レイは続けざまにルナを放ち続け、その度にエンヴィアがもだえ苦しむ。

「グガガガ・・・ナ、ナゼ・・・アタチガ、コ、ココマデ・・・」

「化石同然の状態から突然起きたお前らと、常に闇の謎を解こうと抗ってる俺とは伸びが違うんだよ!!」

「エエエエイ!!!コウナツタラホンキダシチャウゾオ!!!」

「そうかい。だったら出す前に潰してやる。・・・言葉通りにな」

レイは手にしている魔道書のページをめくると、右手を上にかざした。

「汝の身に及ばぬ重力に屈せよ・・・ビグラティ!!」

そう言つて右手を振り下ろすと、エンヴィアの足下に不気味に光る魔法陣が現れ、その中でエンヴィアは四つん這いの状態で動けなくなる。

「ウ、ウウウ・・・ゴ・・・ゴレブア・・・ア、ア・・・」

うめき声を挙げて地面に突っ伏した次の瞬間、エンヴィアの身体は大理石の床にめり込み、そのまま二度と動かなくなった。まるで何かに押しつぶされたように。

あまりにもあつけない決着、そしてレイの戦いぶりに目を丸くした一同。体力がある程度回復したりリーナが、驚きの声を漏らした。

「すごい……。これだけの怪物を、こうもあつさり」と

「フン。こいつが分不相応の手段を使ったからさ。自分の身体に収まり切れないほどの魔力を取りこんだせいで、こいつは体中にヒビが入っていた。俺はその亀裂に闇魔法を流し込んでやっただけさ」

「分不相応、か。このような者たちでも、強力な魔力の前には無力という事か……」

余裕綽々と語るレイは、鼻で笑いながらエンヴィアの屍を見下ろした。許容範囲以上の魔力を有する代償であることは、以前リーナから聞かされたので頭にはあつた。故に、合点も早かつた。

「で、ここを出るなら親玉を倒さないとな。いるんだろ？」

あたりを見渡しながら誰かに語るように話し始めたレイ。すると目の前に、血を思わせる赤い鎧に身を包んだ男が現れた。

「つーアラフエン侯」

ロイはそう叫ぶ。現れたのはアラフエン侯爵であり、この内乱の『表』の現況でもあるヘスマンであつた。もつとも、既に正気ではないことはロイたちも分かっている。ヘスマンの目の輝きが、トリアでの戦いを思い起こさせたからである。と、その時だつた。

「ヴ……。ヴヴヴ……」

かすれ声が漏れたかと思うと、ヘスマンは突然吐血。そのまま跪くと突つ伏す。それと同時に全身から白い煙を吹きだす。その煙は、鼻を刺すようなにおいを持っていた。

「な、なんだこの匂いは……」

シードがそうつぶやき、嗚咽をこらえる。他の者たちも似たようなものだつた。やがてヘスマンの身体に変化が現れる。皮膚、筋肉、そして骨。ありとあらゆる部位が煙とともに消えていく。やがて残つたのは、彼が身に付けていた鎧だけだつた。

「フハハハハハハハ。やはり、もうもたなくなつたか。やはり、凡人

はもろいな。ま、それでも、よく続けましたがね」

部屋中に響く耳障りな高笑い。言葉とともに現れた魔法陣から、声の主が現れた。

「お前は、ラストール！」

ロイは現れ魔導士を視認するや、怒りを込めた声をぶつけた。

「おやおや。これはフェレ候。オスティア侯爵もまだ生きていましたか。皆様、やはり先の大戦をくぐりぬけられたことはある。それに、ラウス候。トンビが鷹を産むとはよく言ったものですね」

「悪党に言われるお世辞ほど胸糞悪いもんはねえな……。遺言はそれでいいんだな」

ロイ以上に殺気を放ちながら、シードは手にした槍の穂先を、ラストールの喉笛に向ける。そのまま前に出せば、おそらく貫くだろう。「貴様のせいで、リキアの民がまた苦しめられた。ここで終わらせようか」

続いてロイもレイピアを抜き放ち、他の面々もそれぞれの武器を手取る。だが、次の瞬間だった。

「うわあああつ!!」

突然、黒い閃光がラストールの周りから放たれ、ロイたちは皆吹き飛ばされ、床に激しく叩きつけられた。

「そう焦らなくてもよろしいでしょう。お楽しみは最後までとっておくものですよ。英雄殿」

ラストールは余裕の表情を浮かべ、そのまま宙に浮く。

「もうリキアではやることはすみましたからお返します。今一度、荒れ果てた国の再興にご尽力ください。では、またいつか……」

「くっ！待ちやがれ!!」

立ち上がったシードは、手にした銀の槍を投擲する。しかし、すでにラストールの姿はなく、空を切った槍は壁に突き刺さった。

この平穏は嘘か誠か

リキア地方全土を巻き込んだ反オステイア家一派による内乱は、首謀者であるアラフェン侯へスマンの死によって一応の終息となった。アラフェン城制圧後から七日もしないうちに、オステイア城に生き残った諸侯がリリーナによって召集された。開催された諸侯会議において、まずリリーナは陳謝した。

「私の力がいたらないばかりに、余計な戦乱を招いてしまった・・・。盟主として、心よりお詫びします」

集まった諸侯の前でそう述べて頭を下げたリリーナ。だが、意外にもそれを糾弾する声はなく、出てきたのは詫びの言葉。それもフェレヤラウスと言った気心の知れた諸侯からではなかった。

「謝るのは我々のほうだ、リリーナ殿。貴殿ら若い力が新しいリキアを導いていこうというときに、ヘスマンたちの暴走におびえ、ただ日和見ることしかできなかった我らが恥ずかしい。それに、こうして早期に内乱を終結出来たのもあなたのおかげだ。もはやリキアは若い世代の物だ。思うようになされるがいい。我らはあなたについていこう」

諸侯の一人がそう述べ、他も続いた。一人一人からの言葉に、リリーナは胸を熱くしていた。

それを見守るロイも安どの表情を浮かべる。

「リリーナの行動力が認められた。僕たちも、彼女を支えられるように頑張らないとね」

一方で、シードは冷やかな目線を向けていた。

「ケツ。正直胸糞悪い。もっと前からリリーナを認めていれば、ヘスマンの奴らもそうは動けなかったはずなんだ。そのうちまた、面従腹背の奴らが出てくる」

「そうかもしれない。だが、だからこそ僕らが支えるんだ。リリーナを。そして、そういう姿勢が浮く雰囲気を生み出すんだ。それが、必ずリキアの再興につながる。僕はそう思っているよ」

「お前は本当に器が大きいな」

言い切るロイに、シードはまいったとばかりに肩をすくめた。

しかし、シードの危惧は外れてもおらず、実際にそれぞれの諸侯の胸の内は黒いものを潜めていた。だが、それはリリーナの次の言葉に、永遠に封じねばならなくなった。

「なお、今回の謀反の責により、アラフェン、カートレー、トスカナ三侯爵家一門の爵位、領地、私財全てを没収。各領地は近隣侯爵家の管理下に置き、残党は全員逮捕、掃討します」

その言葉に、参加した全ての諸侯、ロイやシードですら驚き、ざわめいた。

「い、いささか厳しすぎはしないか、リリーナ殿。確かに罪の大きさははかり知れぬ。だが、知らぬ間に巻き込まれた縁者らまで罰するのは・・・」

「反乱に参加した者の中には、意図せずして与した者もおられよう。そのような者たちまで一律に裁くのは無情ではありませぬか」

うろたえながら抗議する諸侯に対し、リリーナの解答は断固たるものだった。

「皆様の寛大さには感服いたします。しかし、それではダメなのです。私はこれまで、よほどであっても再び正しき道を歩んでくれると信じ、重い処罰を下しませんでした。しかし、それが甘えとなり、このリキアの諸侯たちの間には、国を統べるものとしてはぬるい空気が蔓延していました。平和を保つためには、統べる者が時として痛みを伴わねばならないと。そして決めました。この痛みを戒めとして胸に抱き、リキアをさらに発展させていかねばならないと」

麗しい外見に似つかわしくない、亡父ヘクトルを彷彿とさせる迫力を伴ったリリーナの断罪に、各諸侯も腹を括らざるを得なかった。迂闊に面従腹背の姿勢をとれば「明日は我が身」となりかねないと悟ったからだ。なお、大規模な粛清をそのまま行くと、リキアの情勢の不安定さをさらすことに直結するために、表向きは「三侯爵の急逝、ならびに跡継ぎの不在及び幼少のため、近隣諸侯が後見として各領地を統治」という形がとられた。ともあれ、ヘスマンを中心とした反リ

リーナー一派によるリキア転覆を目論んだ内乱は幕を閉じた。リーナーはその後しばらく、領土問題や戦後処理の対応に明け暮れることになり、ロイとシードも、それぞれ統治を任されたアラフェン、カートレー、トスカナの徴税体制の整備、復興事業に心血を注ぐことになった。

「古の民」の謎を十分解明できないままに……。

ここは一体何処なのか。暗闇ゆえに、声だけしかわからない。闇の中から声がする。

「リキアは『失敗した』ようだな。ラストールよ」

声の主に対して、リキアの反乱を裏で操っていたラストールは、申し訳なさそうに答えた。

「はい。ある程度のエーギルを集めることはできましたが、思った以上に盟主の一派が強かった、というのが私の印象です。……やはり、かの動乱を終結に導いた『英雄』の看板に、偽りはなかったという事です」

「……まあよい。他に手はある。お前はかの地で根回しを続けてくれ」

「はっ。お任せあれ」

「我らを地の底に追いやった忌まわしき八神将……。そしてその末裔たるエレブの愚民ども……。根絶やしにするその日まで。『古の民』の復讐は続くのだ。ククククク、フツ、ハハハハハハ」

闇の中に、不気味な笑いが木霊した。

新たななる火種 草原に渡った青年

サカ。

八神将の一人、神騎兵ハノンが生まれた地であり、エレブ大陸では最も広大な草原を有する地方である。西端のエトルリア王国国境のタラス地方や、東端にあるイリア・リキア・ベルンの三国の国境の交わる位置に築かれた交易都市ブルガルには、他の国々と同じ石造りの建造物が存在するが、国土の九割以上は草原である。明確な国家を持たず、幾多の民族が広大な草原を駆け回る遊牧生活を送っている。それは戦前戦後も不変だ。

かつての動乱において、当時のベルン三大将軍「三竜将」の一人、賢者ブルーニヤが指揮するベルン西方軍の侵攻により、ブルガルは壊滅。さらにその傘下に入った有力部族ジュテ族の手によって、クトラ族をはじめ多数の反ベルン派部族が駆逐された。動乱終結後もその傷跡は未だに深く、人口は動乱前の七割に届かず、ブルガルもどうか交易の中継点としての体を成し始めたぐらいだった。

そんなサカに、戦後一人の青年がリキアから渡っていた。

「こんにちわ」

ある日。その青年は、ブルガルで開かれている市場の、ある店に顔を出した。

「おう。これはクトラの。また、弓でも見に来たか？」

「ええ。おもしろいものが手に入ったと聞きましたから」

青年の言葉にニヤリとした店主は、奥から一つの弓と矢を持ってきた。

「・・・すごく硬い矢ですね。石でも貫けそうな・・・。それに、弓弦も普通の弓より頑丈な感じがしますね」

「そう。まさに『貫きの弓』さ。弓使いつてのは、分厚い鎧を着こんだ

連中には傷を負わせられなかったが、こいつでこの矢を打てば、鎧ごと貫けるって寸法さ。それに、こいつも見てくれ」

「これは・・・変わった形ですね」

「弩（いしゆみ）ってやつさ。台座に固定した矢を、この引き金で撃てるようになってる。射程は短いが、懐に入られても撃てるんだ」

店主が紹介する武器に、青年は興味津々に見入る。そしてふと笑う。

「でも、今はなかなか使う機会がありませんけどね」

「ハツハツハ。ま、こういう実戦向きなのは特にな。弓矢で狙うのは、獣や鳥で十分ってわけだ。おかげでこいつらは買い手のつかないガラクタってことさ。で、ものは相談だが、もらっちゃくれねえか？」

「えー！こんな珍しいものを？」

「ああ。『リキアの鷹』とも言われたあんたには、ここで商売を始めてからはひいきにしてもらってるからな。こいつは、その札だと思ってくれ。押し付けるように悪いが、あんたなら他の使い道も思いつくだろう」

「そうですか・・・。じゃあ、遠慮なくいただきます」

「また来てくれよ。ウォルトの旦那」

その青年、ウォルトはサカの民ではない。リキア諸侯の一つ、フェレ家の出身で、現諸侯ロイの乳母レベツカの息子だ。つまりロイとは乳兄弟の間柄である。

かつての動乱の際は、フェレ軍の弓兵として参戦した。戦いを経て弓兵として力をつけた彼は、終戦時にはリキア同盟軍の弓兵部隊の要となり「リキアの鷹」と称されるようになった。当然、終戦後は故郷に戻り、ロイを支える重臣として生きていくと誰もが思っていたし、そう囑望されていた。

だが彼は故郷に帰らず、サカで生きることを決めた。

きっかけは一人の少女、のちに伴侶となる女性との出会いだった。

「おかえり、ウォルト」

ブルガルから馬を飛ばして、ゲルが点在する一つの集落に戻ると、

その女性が出迎えてきた。豊かな長い深緑の髪が印象的な、いかにもサカの民と思わせるエキゾチックな雰囲気醸し出している。

「ただいま、スー。ラクトは」

「静かに寝てるわ。さっきまでじじに遊んでもらってたから、疲れたみたい」

ウォルトがサカに残った理由、それはこの女性、スーとの出会いだっただった。

動乱の最中、リキア諸侯の一人、トリア前公爵の館にて親ベルン一派の姦計を打ち破った際、助け出されたのがスーだった。サカの戦火を脱してリキアに落ち延びたスーは、以後リキア同盟軍に同行。その際、同じ弓使いとして馬に乗らなかつたウォルトにスーは関心を持ち、互いの考えを理解し合う過程で興味が好意、やがて愛に変わり、終戦後はスーの方からウォルトをサカに誘った。ウォルトもまた同じように、スーに惹かれていき、悩んだ末に初めて恋心を抱いたスーのもとに移ることを決断した。

やがて、ウォルトはクトラ族の一員として迎えられ、ブルガルをはじめとしたサカ地方の立て直しにリキアとの外交役として尽力する日々を過ごし、のちにスーと結ばれた。そして一昨年、愛の結晶である息子が生まれたのだ。

(いい弓をもらったけど・・・この子が安らかに過ごせる世界には、使われないほうがいいのかもな)

天幕で静かに寝息を立てている息子を見て、ウォルトはそう思った。そこに、一人の遊牧民がやってきた。

「我はキルス族の者なり！クトラの長はおられるか!!」

その男は、新たな火種を持ってきたのであった。